倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第1集

浅 原 寺 跡

1984年3月

倉敷市教育委員会

序

浅原寺跡は倉敷市の郊外，福山の中腹の俗塵をはなれた静閑なたたずまいの中にあります。

かって平安時代には多くの僧坊をもった一大伽藍であった浅原寺も南北朝の戦乱によって一山焼亡の厄に遭ってからは次第に衰え，江戸時代にはこの地に安養寺が移築されることになります。しかしながら，現在安養寺に残る国指定重要文化財の毘沙門天立像や吉祥天立像をはじめとする41躰にもおよぶ仏像，あるいは阿弥陀堂西方の層塔の礎石などは浅原寺の往時の姿を偲ばせるに余りがあります。

このたびの調査は，安養寺会館建設に伴う小規模なものでしたが，平安時代の軒瓦を含む多数の瓦や礎石などが発見されました。

この報告書は，その成果をまとめたものです。本書が文化財の保護・保存さらには学術研究のため広く活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが，調査にあたり御協力いただいた関係各位に対し厚くお礼申し上げる次第であります。

昭和59年3月

倉敷市教育委員会

教育長　　三　島　一　夫

例　　言

1. 本報告書は，安養寺会館建設に伴う浅原寺跡の発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は倉敷市教育委員会が行い，昭和55年4月7日から4月26日まで実施した。
3. 現地での発掘調査は，倉敷市教育委員会文化課職員脇本裕・福本明が担当し，小野一臣氏の応援を得た。
4. 発掘期間中は安養寺住職小畑徹真氏をはじめ多くの方々にお世話になった。また工事を担当した㈱藤木工務店の方には調査当初から完了まで大変お世話になった。記して感謝の意を表します。
5. この報告書の作成は倉敷市教育委員会が実施し，文化課職員福本・鍵谷守秀が担当した。
6. 出土遺物の実測等は赤松伸咲氏の援助を得て，主に福本が行い，実測図の浄書・遺物の写真撮影は鍵谷が行った。
7. 遺物の整理にあたっては，加計三千代氏・堀美智子氏・高橋和美氏・中務美智子氏の協力を得，原稿の浄書等には守谷妙子氏・大塚淳美氏にお世話になった。
8. 本書の執筆は福本・鍵谷が分担し，第1章第1節を鍵谷が，他を福本が担当し編集を行った。
9. 本報告書に使用した方位は，いずれも磁北である。
10. 本報告書に掲載した第2図の浅原寺跡周辺遺跡分布図は建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図（倉敷・箭田）を貼り合わせて縮尺したものである。
11. 本報告書作成にあたっては，倉敷考古館々長間壁忠彦氏，倉敷考古館学芸員間壁葭子氏・藤田憲司氏，奈良国立文化財研究所上原真人氏，正岡睦夫氏をはじめとする岡山県教育委員会文化課の職員の方々の御教示を得た。記して感謝の意を表します。
12. 発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真等は，すべて倉敷市教育委員会文化課分室に保管している。

目　　次

序
例言
目次
第1章　序説 …… 1
　第1節　周辺の地理的・歴史的環境 …… 1
　第2節　浅原寺について …… 5
第2章　調査の経過 …… 7
第3章　発掘調査の概要 …… 9
　第1節　検出遺構 …… 9
　第2節　層序 …… 11
　第3節　出土遺物 …… 14
　　Ⅰ　瓦類 …… 14
　　Ⅱ　土器類 …… 35
　　Ⅲ　その他の遺物 …… 38
第4章　まとめ …… 43

挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置 …… 1
第2図　周辺の遺跡 …… 2
第3図　調査地周辺地形図 …… 7
第4図　発掘調査区位置図 …… 8
第5図　西区遺構実測図 …… 10
第6図　石積壇立面図 …… 11
第7図　南トレンチ南壁断面図 …… 12
第8図　北トレンチ南壁断面図 …… 13
第9図　東トレンチ北壁断面図 …… 13
第10図　軒丸瓦　(1) …… 15
第11図　軒丸瓦　(2) …… 16
第12図　軒平瓦　(1) …… 19
第13図　軒平瓦　(2) …… 21
第14図　軒平瓦　(3) …… 23
第15図　丸瓦　(1) …… 26
第16図　丸瓦　(2) …… 27

第17図　平瓦叩き目 (1) …… 29
第18図　平瓦叩き目 (2) …… 30
第19図　平瓦叩き目 (3) …… 31
第20図　同心円叩き平瓦 …… 31
第21図　鬼瓦 …… 32
第22図　雁振瓦 …… 33
第23図　文字瓦 …… 34
第24図　西区瓦溜り出土の土器 …… 36
第25図　西区瓦堆積層出土の土器 …… 37
第26図　西区南トレンチ最深部出土の土器 …… 37
第27図　鉄釘 …… 38

表　目　次

第1表　出土軒丸瓦一覧表 …… 17
第2表　出土軒平瓦一覧表 …… 24
第3表　出土土器観察表 …… 39～41

図　版　目　次

図版 1－1.2.浅原寺跡遠景（南から）
図版 2－1.調査区調査前全景（北東から） 2.西区瓦溜り全景（南から）
図版 3－1.西区瓦溜り（南から） 2.西区瓦溜り（北から）
図版 4－1.2.西区瓦溜り遺物出土状況
図版 5－1.2.調査区遺構面全景（北西から）
図版 6－1.西区遺構面全景（南から） 2.西区石積壇検出状況（東から）
図版 7－1.西区石積壇・礎石検出状況（南から） 2.西区石積壇・溝遺物出土状況（東から）
図版 8－1.西区南側礎石検出状況（東から） 2.西区敷石遺構検出状況（北から）
図版 9－1.西区瓦堆積層軒丸瓦1出土状況　2.東トレンチ北壁断面（南から）
図版10－1.西区南トレンチ全景（北から） 2.西区南トレンチ全景（北西から）
図版11－1.西区南トレンチ南壁断面（北から） 2.西区南トレンチ調査風景（西から）
図版12－1.西区北トレンチ全景（北西から） 2.西区北トレンチ南壁断面（北から）
図版13－軒丸瓦
図版14－軒平瓦
図版15－軒平瓦・丸瓦・文字瓦
図版16－平瓦・鬼瓦・鉄釘
図版17－土　器　類

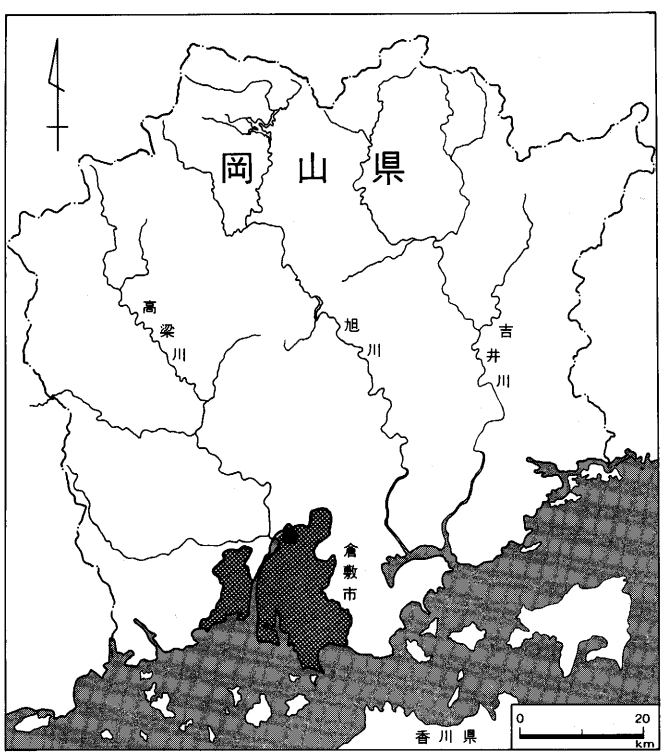
第1章　序　　説

第1節　遺跡の位置と歴史的環境

浅原寺跡は，岡山県倉敷市浅原1573番地に所在する。

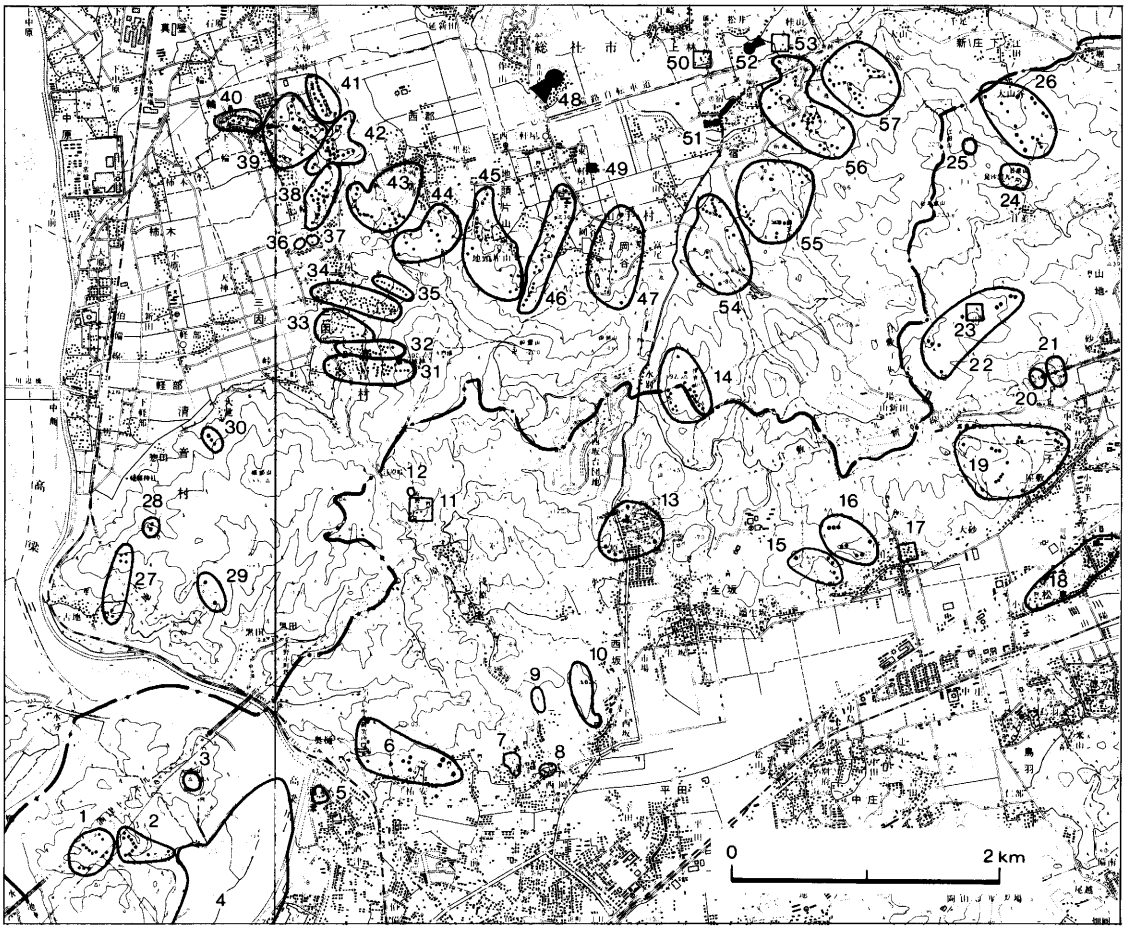
岡山県三大河川の1つ高梁川は，新見市の北端，千屋の花見山に源を発し，西川，成羽川などの支流を集めながら吉備高原を南流し，最後に小田川と合流して瀬戸内海へ注いでいる。

この小田川と合流する地点の左岸には，標高302mの福山を筆頭とする山々が東西に連なっているが，現在，そのほぼ中央を国道429号線が南北に貫通しており，西側の福山山塊と東側の江田山山塊とにわかれている。本寺跡はこの福山の南山腹に存在する。地理的には，福山とその東の軽部山とがつくる谷のほぼ中央付近に位置しているのだが，古くからこの谷沿いに道がひらけており，安養寺[(1)]のすぐ北には，福山合戦[(2)]の時，足利直義がそこから福山城を攻めたという浅原峠がある。



第1図　遺跡の位置

広義の岡山平野の西部に位置する倉敷市は，主に高梁川の沖積作用と近世の干拓とによって，現在の地形がほぼできあがった。したがってそれ以前，まだ高梁川の沖積化が進んでいなかった頃，倉敷市のほとんどはまだ海面下に没しており，わずかに小高い山や丘陵のみが島となって浮かんでいたと思われる。縄文時代の貝塚はこのような島や当時の海岸線付近につくられることが多いが，倉敷市においても，磯の森貝塚[(3)]，船元貝塚[(4)]，福田貝塚[(5)]などそのほとんどが，そのような立地をもつ。また，浅原寺跡がある福山の南のふもとにも縄文時代中期を主とする西岡貝塚[(6)]



1. 酒津入会古墳群
2. 酒津山相生坂古墳群
3. 酒津八幡山々頂遺跡
4. 酒津一水江遺跡
5. 酒津貝塚
6. 祐安古墳群
7. 西岡廃寺
8. 西岡貝塚
9. 妙見谷池西遺跡
10. 菅生小学校裏山遺跡
11. 浅原寺跡
12. 安養寺裏山経塚群
13. 原津古墳群
14. 狸岩山古墳群
15. 端生坂古墳群
16. 三田古墳群
17. 三田廃寺
18. 松島城址
19. 二子高鳥居山古墳群
20. 二子御堂奥古窯址群
21. 御堂奥遺跡
22. 二子古墳群
23. 二子堂屋敷
24. 日差廃寺
25. 日差山北遺跡
26. 矢部大山谷古墳群
27. 古地古墳群
28. 王子古墳群
29. 黒田古墳群
30. 大覚寺古墳群
31. 峠古墳群
32. 堂屋敷古墳群
33. 万貫古墳群
34. 天神古墳群
35. 山地古墳群
36. 鋳物師谷遺跡
37. 鋳物師谷古墳群
38. 殿山古墳群
39. 宮山古墳群
40. 下三輪古墳群
41. 船山古墳群
42. 岩屋古墳群
43. 持坂古墳群
44. 西部古墳群
45. 地頭古墳群
46. 津坂古墳群
47. 岡谷古墳群
48. 作山古墳
49. 角力取山古墳
50. 備中国分寺跡
51. 宿寺山古墳
52. こうもり塚古墳
53. 備中国分尼寺跡
54. 平山古墳群
55. 竜王古墳群
56. 宿古墳群
57. 原古墳群

第2図　周辺の遺跡

があり，このあたりまで海水の浸入があったことを物語っている。

縄文時代以降，中世に至るまで，当時の海岸線がそれほど変わっていないことは，現在の高梁川河口付近の平野に遺跡がほとんど存在しないことからもわかるが，一方，古墳時代に入ると，その海岸線に面した山裾や丘陵上に古墳が造られ始める。

福山々塊南斜面及び酒津山を含めた地域では，今のところ確実に前期にさかのぼると思われる古墳は発見されておらず，また，中期古墳をみても，福山の最南端，西岡貝塚のすぐ西側の尾根に位置する西岡古墳群がその可能性をもつ唯一のものである。

一方，福山山塊の北側，すなわち総社平野の南端にあたる清音村には，弥生時代末期から古墳時代初めにかけての墳墓遺跡である宮山遺跡[7]，鋳物師谷遺跡[8]が存在し，また，その東の山手村には，全長120 mの前方後円墳，宿寺山古墳や一辺約36 mの方墳，角力取山古墳など，前半期の古墳が存在する。

このような，両地域における古墳のあり方の違いは，おそらく，それぞれの集団が生産の基盤としていた沖積平野の違いに起因すると思われる。すなわち当時，高梁川の沖積化は，総社の平野においてほぼ完了していたものの，倉敷では依然として稲作農耕には適した状態ではなかったと考えるのである。しかしながら，沖積化の遅れていた倉敷でも，高梁川の河口付近では，流れてきた土砂などにより微高地状のデルタが形成されていたと思われ，こうした稲作に適した場所には，弥生時代中期から中世に至るまでの遺跡である酒津－水江遺跡[9]が存在するのである。

古墳時代も後期になると，福山山塊南側の山裾付近の丘陵には，祐安古墳群，原津古墳群，三田古墳群などが，また，酒津山の尾根には，酒津－水江遺跡との関係が深いと思われる，相生坂古墳群，入会古墳群などいわゆる群集墳が多く造られるようになる。しかし，酒津山に造られた古墳群を除けば，一つの古墳群を構成する古墳の数は少なく，したがってその密集度も低い。これは，当時この地域では，依然として広い沖積地を望めず，背後の山から流れ出る小河川によって堆積したごく限られた狭い範囲にしか生活の基礎を置くことができなかったからであろう。それに比べて，福山山塊の北側では，すでに述べたように，かなり広がっていたと思われる沖積平野をバックに，弥生時代後半から古墳時代前半には，すでに大きな勢力が存在していたが，次の古墳時代後期には，その総社平野を見おろす丘陵上におびただしい数の古墳が造られるようになる。これらの古墳群は，その規模，密集度共に南側の古墳群をはるかに上まわっており，特に清音村の北部，福山の西山裾にあたる三因の丘陵上には100基あまりが密集し，俗に「三因千塚」[10]と呼ばれている。

これらの古墳は，直径10 m未満の小円墳がほとんどで，尾根筋に整然と並んで造られているものが多く，その意味で，生産力の向上により台頭してきた人々の家族墓的性格を持つものとして理解できるが，その中で，狸岩山古墳群[11]だけは，他の古墳群がほとんど山裾に造営されているのに対して，山頂付近に群集している点，また，その中に積石塚が数基混在している点な

どから他の古墳群とはやや性格を異にしていると思われる。ただ発掘調査がなされておらず，経塚である可能性もある。

備中における古代寺院は，旧山陽道に沿って集中する傾向があるが，福山，江田山山塊周辺にある備中国分寺，国分尼寺，矢部廃寺[12]などもその1つである。これらは奈良時代に属するものだが，この付近でさらに古いと考えられ[13]ているものに，白鳳期の瓦を出土する日畑廃寺がある。江田山々塊から東へ延びる王墓山丘陵[14]の東裾に位置するこの寺跡は，倉敷ではもちろん，岡山県下でも古いものの1つであるが，[15]ここより南西へ約2㎞離れた二子の山裾で，同寺の瓦を焼いたと思われる窯跡が発見されている。

平安時代の寺跡として[16]は，日差山廃寺，三田廃寺，二子堂屋敷などがあるが，いずれも発掘調査がなされておらず詳しいことはわからないが，採集された瓦から判断すれば，平安時代前半のものであろう。

さて，浅原寺跡であるが，現在この地には真言宗安養寺が建っている。浅原寺と安養寺の関係及びこの地に安養寺が建つに至った経過については，第2節「浅原寺について」に詳しいが，要約すれば，平安末から鎌倉にかけて栄えた浅原寺が寛文七年（1667年）に破却したあと，享保二年（1717年），この地に安養寺が移ってきたのであり，もともと安養寺は，数多くあった浅原寺の増坊の1つということになる。浅原寺及び安養寺の創建については明らかではないが，現在ある安養寺の裏山に所在する3基の経塚の1つから発見された瓦経に，「応徳三年春二月於安養寺」という文字があり，少なくとも[17]応徳三年（1086年）には安養寺が存在していたことになり，したがって浅原寺もその頃には存在していたであろう。

このように，福山山塊と江田山山塊に，平安時代から鎌倉時代にかけて多くの寺院が建てられており，しかも，それらは山の中腹や山上近くに立地するという，いわゆる山上伽藍の傾向を示しているのである。

註1. 後に述べるように，浅原寺跡には現在安養寺が建っている。
註2. 『太平記』巻第十六・「備中福山合戦事」，日本古典文学体系35・『太平記二』
註3. 池田次郎・鎌木義昌　「岡山県磯の森貝塚発掘報告」『吉備考古』81．82合併号1951年
註4. 平田英文　「三備地方貝塚集成概説」『吉備考古』86号　1953年
註5. 清野謙次『日本原人の研究』岡書院　1925年
註6. 註5と同じ
註7. 高橋護「三輪山墳墓群の調査から」『岡山県総合文化センター館報』No.39 1963年
註8. 小野一臣・間壁忠彦・間壁葭子「岡山県清音村鋳物師谷2号墳出土の土器」『倉敷考古館研究集報』第13号 1977年
註9. 間壁葭子　「酒津－水江遺跡」『倉敷考古館研究集報』第8号　1973年
註10. 『清音村誌』清音村誌編纂委員会　1980年
註11. 尾崎喜生「都窪郡菅生村の経塚」『吉備考古』10号　1931年
註12. 間壁葭子「官寺と私寺」『古代の日本』4　角川書店　1970年
註13. 『倉敷の古代』倉敷考古館　1972年
註14. 間壁葭子「日畑赤井廃寺」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会　1974年
註15. 註14と同じ
註16. 葛原克人・池畑耕一「二子御堂奥古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第2集　岡山県教育委員会 1974年
註17. 『安養寺瓦経の研究』安養寺瓦経の研究刊行委員会　1963年

第２節　浅原寺について

浅原寺の歴史については，藤井駿氏の「倉敷の安養寺について」『岡山春秋68号（1959年）』の中に詳しい。ここではこの文に沿って浅原寺についての説明を加えたい。

現在，浅原寺跡の境内地には，真言宗の安養寺が建っている。安養寺には国指定重要文化財の毘沙門天立像・吉祥天立像をはじめとして他に39躰の毘沙門天が祀られており，12世紀頃の造立といわれている。また安養寺の裏山には3基からなる県指定史跡の安養寺経塚群があり，国の重要文化財に指定[(1)]されている多数の瓦経が発見されている。このうち第3経塚から出土した瓦経の願文中には「応徳三年春二月於安養寺」という文字がしるされており，少なくとも応徳三年（1086年）頃にはすでに安養寺という寺名が存していたことを示している。現在の安養寺には，阿弥陀堂，本堂をはじめとして新たに建立なった宝塔，絵馬堂などがあるが[(2)]，阿弥陀堂の南西の山よりの一段高くなった部分には，鎌倉から室町時代にかけてのものといわれる塔跡の礎石群が残っている。

ところで浅原寺と安養寺[(3)]との関係については，幕末頃に編纂された『備中誌』に「享保二年浅原寺滅跡へ安養寺を引移すとて諸堂を彼舊地へ遷せる時　毘沙門の側より古瓦一枚掘出す　其文に日備中州朝原寺別當経覚阿遮梨執筆金剛佛子了專と云」とある。この「朝原寺」とは「浅原寺」のことで，もともと安養寺は現存の場所にあったのではなく享保二年（1717年）にすでに廃寺となっていた浅原寺跡へ移ってきたとされている。また同じく『備中誌』に「今毘沙門堂は享保二年安養寺今の地へ移せる時再建せり安養寺は浅原寺と別院なる事山号にても明か也」とあって，安養寺は山号を「長源山」といい，浅原寺は「浅原山」といっていたようで，現在の場所にはもと「浅原山浅原寺蓮臺院」があり，毘沙門天百八躰を本尊としていたようである。

要するに，いまの地にはかっては浅原寺蓮臺院という寺があって，それが次第に衰微して享保二年（1717年）にその跡に安養寺という寺が移ってきたということになる。これが現在の安養寺である。

さて，浅（朝）原寺が文献に現われる最初は，『源平盛衰記巻七』の「大納言出来言」の条である。それには「備中国安養寺に，調御房という僧を請して，備中国朝原寺にて出家受戒し給ひけり。御布施には，六帖抄と云歌双紙をそ渡されける。」とある。治承元年（1177年）鹿ケ谷の謀議の露顕により，同年六月藤原成親は備前児島に流刑となり，間もなく庭瀬の郷有木の別所という山寺にうつされ，同年七月成親はここで殺される。成親はその死の直前の頃，すなわち治承元年六月から七月の間に，備中の朝原寺に安養寺の調御房という僧を導師として出家受戒したというのが前出の記事である。ここでも朝原寺と安養寺とは別の寺院として扱われて

いる。

次に藤井氏は，鎌倉時代の史料として，『金沢文庫古文書』の中に朝原寺に関する2つの記事を発見されている。1つは金沢文庫に襲蔵する『愛染法密記』の元弘二年（1332年）の写本の識語の中のもので，「干時文永十一年甲午九月廿七日庚子日曜亥時，於備中国朝原寺東谷阿彌陀院書寫了，一校了，金剛佛子尊竟卅七歳云々永仁五年丁酉十二月十一日，於備中州朝原寺円満院，賜法印権大僧都御本書写了，交合了，金剛佛子玄覚三七歳云々」とあり，これを藤井氏は，「文永十一年(1274年)に朝原寺の東谷の阿彌陀院の僧が筆写した『愛染法密記』という本を，それから約20年を経て永仁五年（1297年）に朝原寺の円満院の僧が複写した」と解されている。また第2の史料として，『梵篋印』の元徳二年（1330年）の写本の識語の中の「干時永仁六年戊戌正月廿三日，於備中州朝原寺安養寺東谷円満院，賜権大僧都法印大和尚位御本，令書写了」という記事をあげている。これは「永仁六年（1298年）に朝原寺の中の安養寺の子院である円満院の僧が『梵篋印』という経本を筆写した」ことを示している。

続いて『備中誌』には建武三年（1336年）「大江田式部大輔氏経福山城に籠りたるを足利直義大軍を卒て攻之　氏経落去して播磨に奔る　此時浅原寺を始めとし福山寺の伽藍悉く焼失して　只毘沙門堂一宇のみ残りしなり　是より再興昔の様にならね共　度々造立有」とあって，南北朝の戦乱によって浅原寺も毘沙門堂一宇を残してすべて焼失してしまったようである。

室町時代の史料としては，『備中国惣社宮御造栄帳之事』という記録がある。その中に総社宮の造営にともなう祭礼で，朝原寺は日間寺・福山寺・新山寺・広谷寺などとともに舞楽を奏したことが記されている。この時朝原寺から出演した「舞児」は「次郎丸」で，彼は「朝原寺蓮台院ノ弟子」とされている。

これによると，南北朝の戦乱で毘沙門堂のみを残して焼失してしまった浅原寺も，室町時代には稚児をもつ寺として存続していたことがわかる。

これ以降は，『備中誌』に大永二年（1522年）「上野四郎次郎又修造す　本堂四間四面也　皆古材木を用ひて北に移す事十五間　今の堂の地也　即毘沙門天を此堂に安置す」とあって，さらに寛文七年（1667年）「浅原寺破却有」続いて享保二年(1717年)「其舊地へ安養寺を遷され祇園社へわづか三石を附せられける」という記事がみられる。

平安時代末から鎌倉時代にかけて隆盛を誇った浅原寺も南北朝の戦乱によって燼灰に帰してからは，修復を重ねながらも，しだいに衰微していったようで，寛文七年に破却されてからのち，享保二年にその地に安養寺が建てられることになるのである。

註1　『岡山県の文化財(1)』　岡山県教育委員会　1980年

註2　『安養寺瓦経の研究』　安養寺瓦経の研究刊行委員会　1963年

註3　註2と同じ

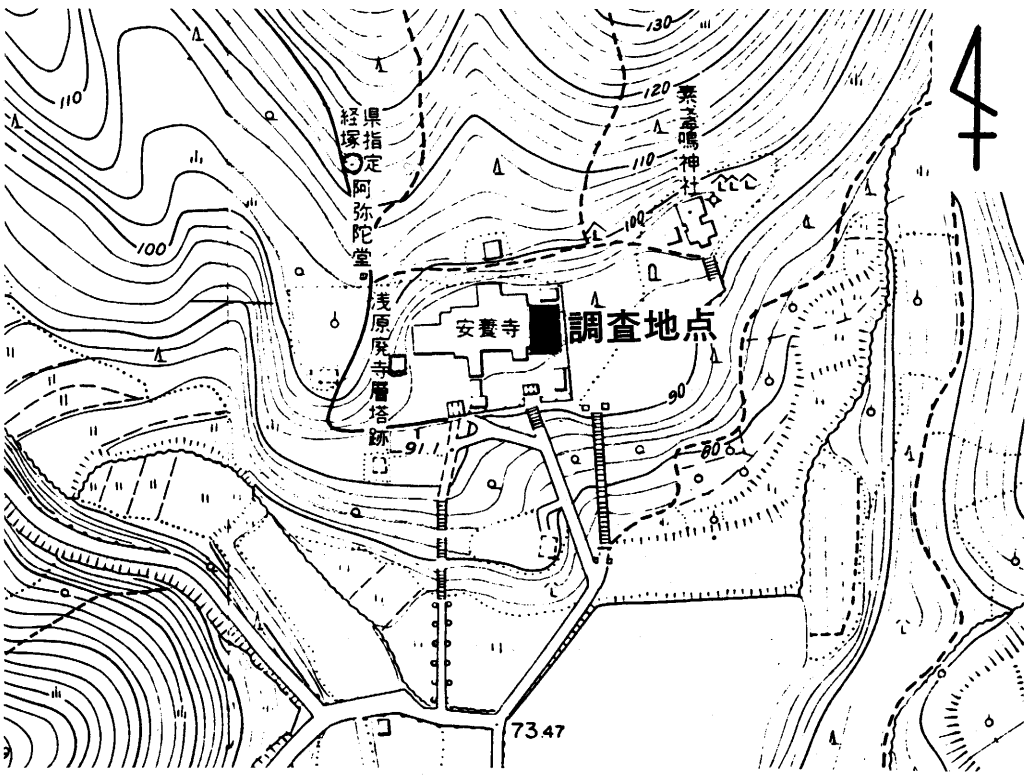
第2章　調査の経過

宗教法人安養寺は，近年参拝者の増加に伴い寺院の整備が進められているが，昭和53年の宝塔の建立につづいて，今回庫裏の一部を改築して安養寺会館を建築することになった。

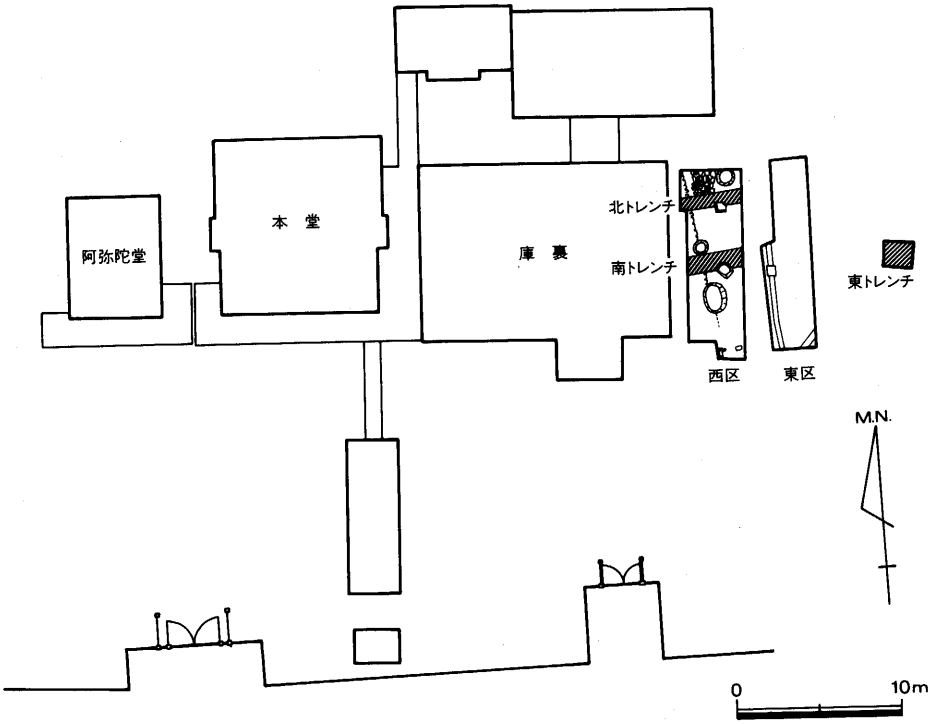
当該地は「倉敷市文化財分布図」の2－20「浅原寺跡」の境内地にあたるため，事前調査の必要を認め，協議の結果，文化財の取り扱いに関して宗教法人安養寺と倉敷市教育委員会の間で覚書を取り交わして文化財確認調査を行うことになった。

調査は昭和55年4月7日から4月26日まで実施した。調査区は安養寺の主要な伽藍が建つ東西約95 m，南北約43 mの中腹の平担地のほぼ中央にあたる。現在伽藍が建っている付近は，地形図でみると（第3図），寺の背後の山頂から南に向って派生する2本の尾根にはさまれた格好で，ちょうど谷筋にあたる位置にあり，現在建物が建っている平担地は，東西の尾根を削って，谷を埋めて造成したことをうかがわせる。

この平担地には西から阿弥陀堂，本堂，庫裏が建ち並んでいるが，このうちの庫裏の東端にあたる部分について調査を行った。調査対象面積は約70 ㎡である。調査区のほぼ中央に現在使



第3図　調査地周辺地形図



第4図　発掘調査区位置図

われている排水溝が流れているため，この間を約1 mの土手として残し，これをはさんで西側の調査区を西区，東側を東区と呼称した。西区は南北約11.3 m，東西約3.3 mで，東区は南北約11.4 m，東西約2.6 mを測る。

調査はまず西区から掘り下げた。表土下約20 cmで瓦溜りに達したため，瓦溜りを精査するとともに東区も同時に掘り下げた。しかし，東区では瓦片は出土するものの，瓦溜りの延長としてとらえられるようなものは検出されなかった。続いて，西区の瓦溜りを取りのぞくと石積の壇状の遺構および礎石が検出された。ここでも東区では，近現代の乱掘拡のほかは遺構はみられなかった。遺構の実測，写真等が終った時点で，以下の土層の確認のため西区に2本のトレンチを設定するとともに，調査区の東側のやや高くなっている地点に1ケ所トレンチを設けた。このうち西区のトレンチでは石積壇の直下に多くの瓦を含む瓦堆積層が確認され，また土層は東から西へ向ってかなりの傾斜をもって堆積していることが確認された。

第3章　発掘調査の概要

第 1 節　　検 出 遺 構

今回の調査は前述のように小規模なものであり，西区・東区および東トレンチあわせて発掘面積は約70㎡にとどまった。このため，遺構の全体について把握できるようなものは検出できなかった。遺構は西区のみに集中してみられ，東区は近現代の乱掘拡のほかには遺構は検出されなかった。検出された遺構としては，瓦溜り，石積壇とこれに伴うと思われる溝および敷石遺構，礎石などがあげられる。

1. 瓦溜り（図版３）

西区の表土下約20㎝，石積壇の東側に，東西約1.7ｍ，南北7ｍ以上にわたって帯状に広がる。深さは石積壇の上面近くまであり，石積壇の東にある礎石の上にも覆っており，厚さは約30㎝を測る。西側の一部は後世の乱掘拡によって削られている。瓦溜りの中には少量の軒瓦もみられるが多くは磨滅のはげしい小破片の瓦である。また土師質土器や備前焼，あるいは青磁といった土器片や鉄釘等の遺物も多く含まれている。混入している土は暗黄褐色粘質土で炭が含まれている。これらの遺物はまとまって一時に廃棄されたものと思われる。

2. 石積壇・溝（第５・６図）

石積は東面を揃えて積まれ，西区の南端より北端まで続き，さらに北へ延びる。途中２個の後世の乱掘拡により分断されており，南端付近も壊されている。調査区内での残存部分の延長は6.9ｍを測るが，東側に沿う溝と同様に調査区南端まで続いていたものと思われる。北部付近では，花崗岩割石を２～４段比較的荒く積み上げており，高さ約40㎝を測る。上面は南へ向ってわずかに傾斜している。なお石積壇の方向は磁北よりやや西へふっている。

この石積壇の東側に沿って溝がはしる。石積壇と同様に途中乱掘拡により分断されるが，調査区内で延長11.0ｍを測り，溝の幅は北端の石積壇と敷石遺構との間で約30㎝，南部で約50㎝を測る。深さは15㎝～20㎝で南へ向って傾斜する。なお，この溝は南端で東西方向にはしる幅25㎝の溝に続くものと思われる。この溝は調査区南端で一部しか検出していないが，割石で側壁をつくり上に石をのせている部分がみられる。おそらくこの石積壇をめぐる溝の一部と考えられる。

3. 敷石遺構・円形土坑（第５図）

前述の石積壇およびそれをめぐる溝と一連となる遺構である。西区の北端，石積壇から溝を

はさんで約30㎝離れた位置にある。辺を石積壇とほぼ平行にした方形を呈し，約30㎝四方，厚さ10㎝前後の花崗岩の割石を上面をそろえて敷いている。南辺で約1.4ｍを測り，北側は調査区端から，さらに北へ延びると思われるが，調査区内での東辺は約1.4ｍを測る。

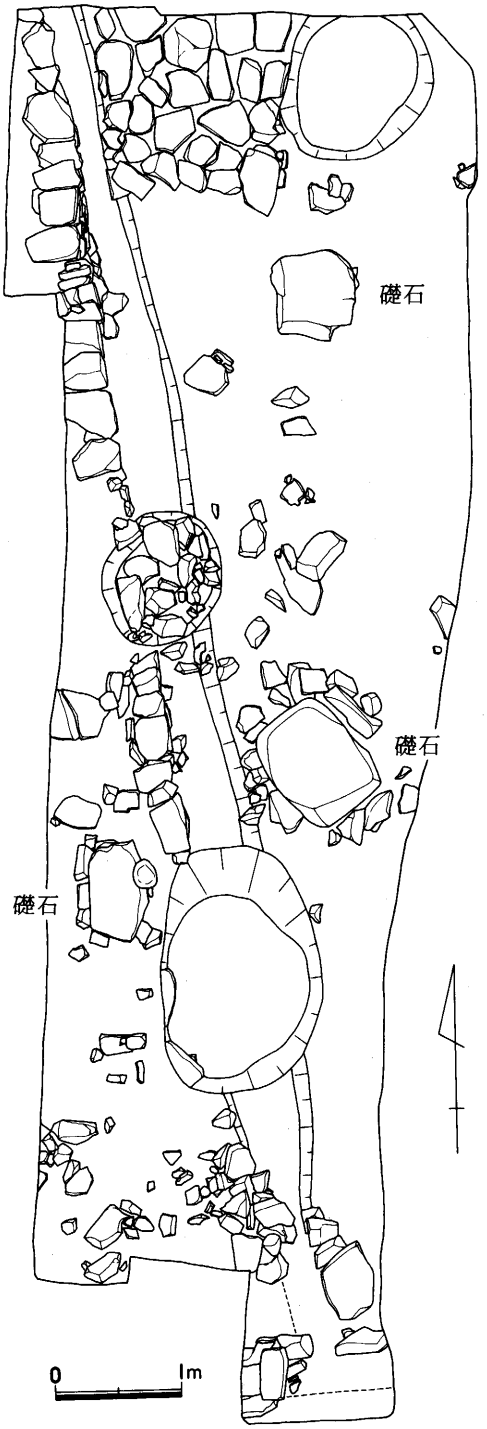
さらに敷石遺構の東に接して,径約1.2ｍ，深さ約50㎝のほぼ円形を呈する土坑が掘られている。土坑の底面には厚さ約1㎝の漆喰状の層がみられる。前述の敷石遺構の上面は西に向ってゆるやかに傾斜して溝につながっており，これとあわせて考えれば，円形土坑に水を溜めるなどして，敷石の上で水を使う作業を行ったものと考えられる。なお，円形土坑中からは桟瓦片が検出されている。

4. 礎石（第５図）

石積壇の東に２個，石積壇上に１個みられる。東側の礎石はやや大きくほぼ南北方向に並んでいる。このうちの南側の礎石は花崗岩製で，長方形をなし，93㎝×70㎝，厚さ40㎝を測る。上面はほぼ水平である。径約1.5ｍの掘りかたには10～30㎝前後の花崗岩割石がつめられている。なお，この礎石掘りかたの西側は石積壇東の溝によって切られている。

北側の礎石は，70㎝×60㎝，厚さ43㎝の花崗岩で，ほぼ正方形に近い形である。上面はほぼ水平をなす。径約95㎝の掘りかた内には，南側の礎石と同様に人頭大の花崗岩割石をつめるが，数は少ない。

これら２個の礎石は，それぞれのほぼ中心の位置で礎石上面の高低差は約1.8



第５図　西区遺構実測図

第6図　石積壇立面図

cmであり，心々の距離は約3.8mを測る。これらの礎石を同一の建物に使われたものとみた場合，これらの心々をむすぶ線は，西側にある石積壇とは方向がずれており，別の遺構と考えられる。

石積壇上にある礎石は，80cm×45cmの長方形で厚さは15cmを測る。掘り方埋土には割石をつめている。石積壇東の礎石のうち南側のものとの心々距離は約1.9mで，上面の高低差は約2cmであるが，礎石の大きさ，あるいは位置などからこの礎石はむしろ石積壇に伴うものと考えられる。

5. 瓦堆積層

遺構としてはとらえられなかったが，西区の西端付近で石積壇直下に，比較的残存状態のよい瓦が多く堆積する層が確認された。瓦には軒瓦が多く含まれており，層はさらに調査区より西へ延びると思われ，何らかの遺構が伴うことも考えられる。

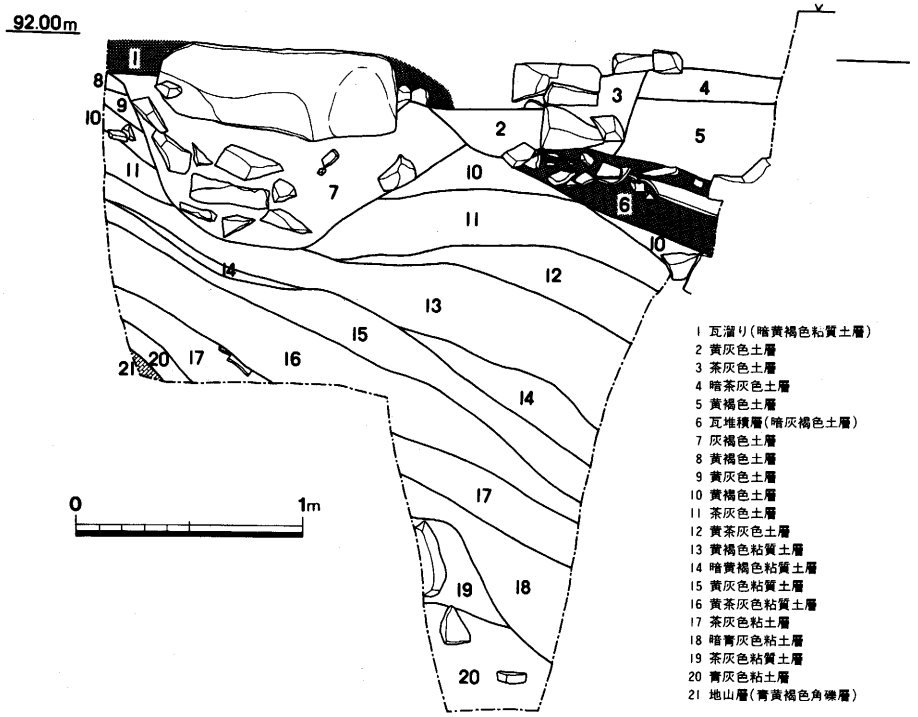
第2節　層　序

今回の調査では，礎石等の遺構が検出されたのち以下の層を確認するためトレンチ調査を行った。トレンチは調査区の西区内に，東西方向に2ケ所掘開し，南側のものを南トレンチ，北側のそれを北トレンチと呼称する。なお今回の調査区の東方にも層位確認のためのトレンチを設定した。これを東トレンチとする。以下それぞれのトレンチにおける層序について説明を加える。

1. 南トレンチ（第7図）

西区石積壇東にある2個の礎石のうち南側の礎石にかかるよう東西方向に幅約1m，長さ約3mのトレンチを設定した。

現地表は庫裏の床面にあたり，地表下約20cmあたりまでは造成土である。この直下に瓦溜りがみられる。瓦溜りは前に述べたように，礎石を覆うように一時に廃棄された状態で堆積している。石積壇は南トレンチ付近では花崗岩割石を3段に積み，瓦片を含む茶灰色土をうらごめに入れる。石積壇の東に接して溝がめぐるが，この溝は東にある礎石の掘りかたの一部を切っている。また石積壇の直下には暗灰褐色土中に多量の瓦片を含む瓦堆積層がみられ，この層もまた石積壇と溝によって切られている。したがって，礎石と瓦堆積層はいずれも石積壇よりは先行することが知れるが，礎石と瓦堆積層の前後関係は層位からでは明確でない。瓦堆積層か

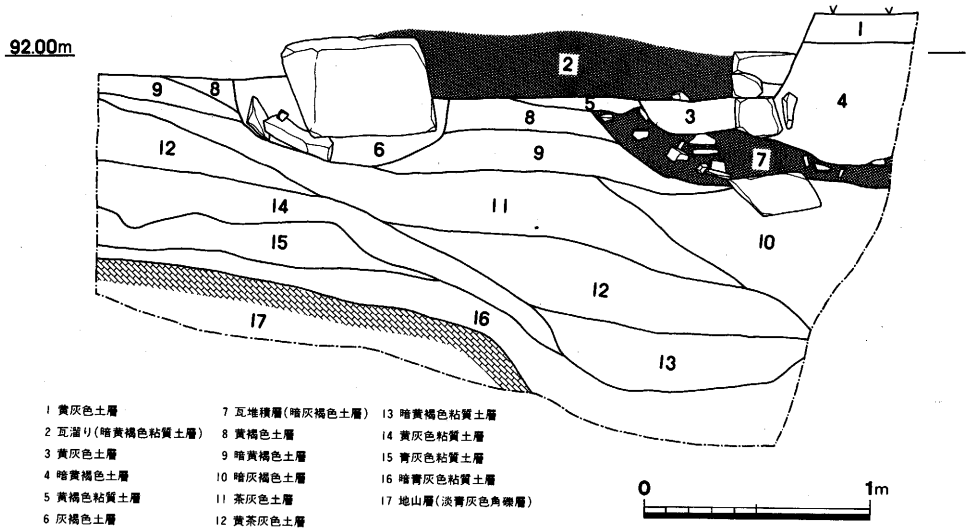


第7図　南トレンチ南壁断面図

ら以下の層については，黄褐色を呈する層がいずれも東から西に向ってかなりの傾斜をもって堆積している。これらの層から最深部の青灰色粘土層にいたるまでの間には遺物はほとんど含まれていない。地表下約2.3 *m*からはじまる青灰色粘土層からは，いわゆる黒色土器を含む土師質の土器片や凸面に荒い縄目叩きをもつ平瓦片が検出されている。これらの層は調査区北西から南に向って開く自然谷の堆積土の一部と考えられ平安後期以降にしだいに埋められていったものと思われる。南トレンチでは，西半で深さ3.1 *m*まで掘り下げたが，それ以下は崩壊の危険があるので作業を中止した。したがって明確な地山のラインは検出し得なかったが，トレンチ東端で，のちに述べる東トレンチで確認された地山である黄褐色角礫層に相当すると思われる青黄褐色角礫層が西に向ってかなり傾斜した形でわずかに確認されている。

2. 北トレンチ（第8図）

西区の北側の礎石にかかるよう東西方向に幅約60 *cm*，長さ3.5 *m*のトレンチを設定した。層序については，南トレンチとほぼ同様の状況であるが，水の影響で全体に青灰色を呈している部分が多い。表土下約15 *cm*で瓦溜りに達する。北トレンチ付近では礎石と石積壇の間に厚さ約30 *cm*にわたって堆積している。南トレンチと同様に石積壇とそれに伴う溝は瓦堆積層を切ってつくられている。礎石は石積壇より約1.3 *m*はなれた位置にあり，掘りかたは瓦溜り下面から切り込まれている。以下の層についても，南トレンチと同様に，東から西に向って傾斜する青み

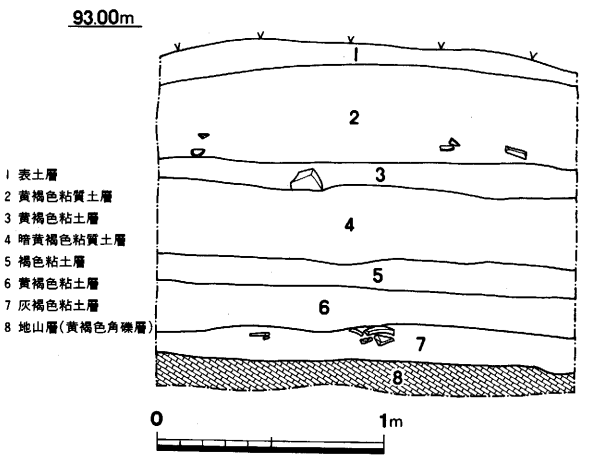


第8図　北トレンチ南壁断面図

がかった黄褐色土が堆積している。これらの層の中には遺物はほとんど含まれていない。また，南トレンチでわずかにみられた地山層は，北トレンチでは，青灰色角礫層としてとらえられ，東からゆるやかに傾斜し，トレンチ中央付近で急角度で西に向って落ちている。なお，北トレンチは，崩壊の危険があるため地表下約1.9 *m*までで掘り下げを中止した。

3. 東トレンチ（第9図）

今回の調査区から東へ約4.5 *m*はなれた地点に2 *m*×1.5 *m*のトレンチを設定し，層序の観察を行った。トレンチ付近は，西区の地表より約70 *cm*程高くなっている。約10 *cm*の表土層の下は厚さ約40 *cm*の黄褐色粘質土が続き，中に瓦片が含まれている。これから下の層はおおむね水平で地表下1.2 *m*まではほとんど遺物を含まない層が続く。しかし地山直上の灰褐色粘土層からは比較的多くの瓦片が検出された。地山は黄褐色の角礫層で，わずかに東が低くなっている。地山の高さは，南トレンチの地山面より約90 *cm*，北トレンチのそれより約40 *cm*高くなっている。



第9図　東トレンチ北壁断面図

第 3 節　出 土 遺 物

今回の調査において発見された遺物としては，瓦が大部分を占め，遺物整理箱約70箱を数える。瓦には，軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・雁振瓦がある。

瓦のほかに，土器類としては，土師質の椀・小皿が多く，須恵質土器，備前焼，近世陶器等もある。また鉄釘もみられる。出土遺物のほとんどは，西区から出土しており，おおむね，瓦溜り，瓦堆積層，及び南トレンチ下層に分けることができる。

Ⅰ 瓦　類

1）**軒丸瓦類**（第10図～第11図，図版13）

軒丸瓦は，併せて12種，13点出土している。このうち，瓦当面が完全なものが2点ある。いずれも西区の瓦溜り及び瓦堆積層中から検出されたものである。細部の計測値等については第1表を参照していただきたい。

1. 宝相華文軒丸瓦（第10図1）

中央に花文をおき，その周辺に中に向って四葉から成る宝相華を配する。弁下端は界線状を呈し，楕円形の珠文を密に配する。瓦当外周・瓦当裏は，ナデによって整形する。胎土は精良で，焼成はやや堅緻である。色調は淡灰色を呈す。造りは接合式で瓦当側は荒く指ナデが施されている。

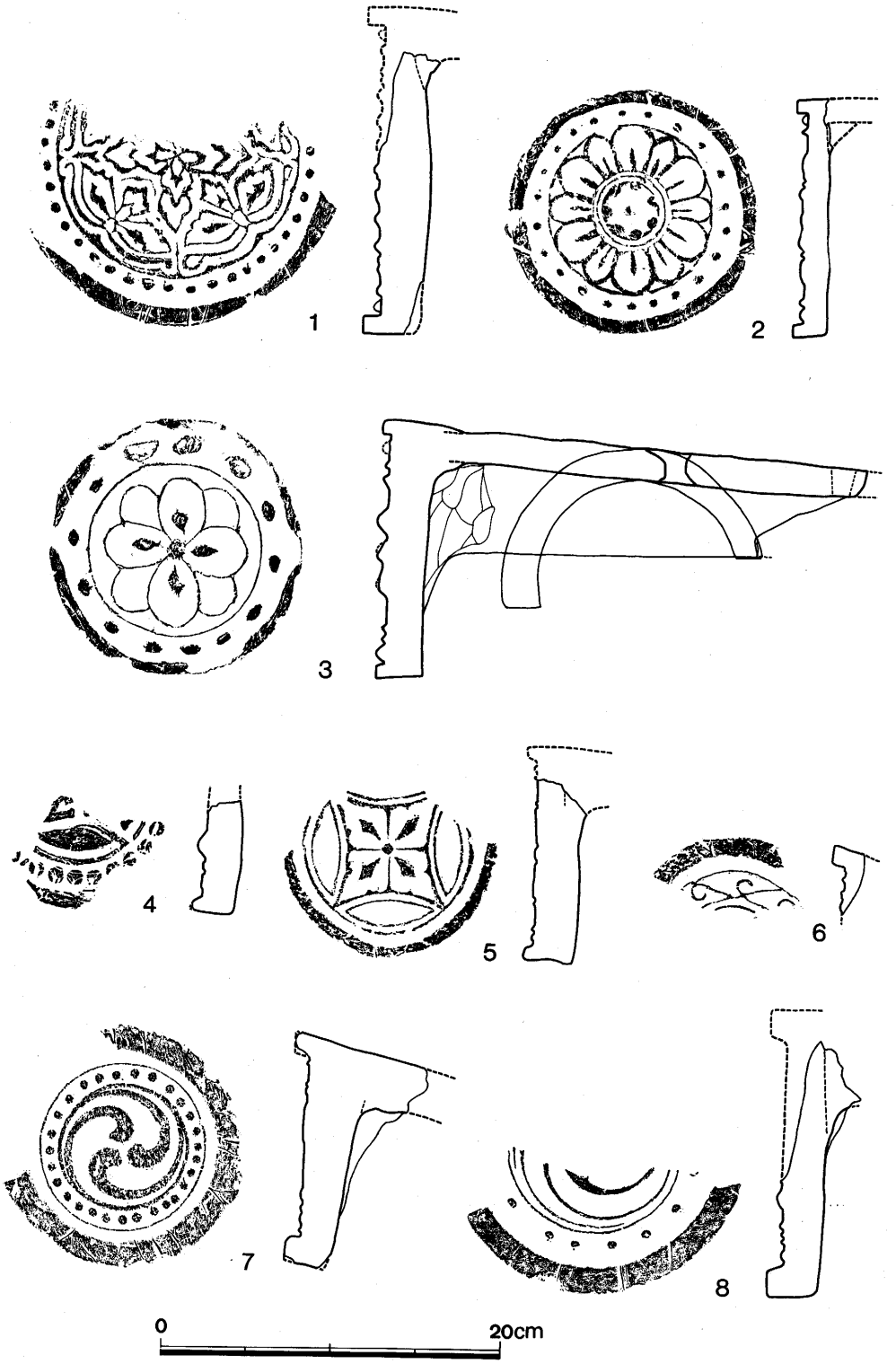
同様の文様で中央に大粒の蓮子を1個配する瓦が同じく浅原寺跡から出土している(1)（第28図1）。

2. 単弁十二葉蓮華文軒丸瓦（第10図2）

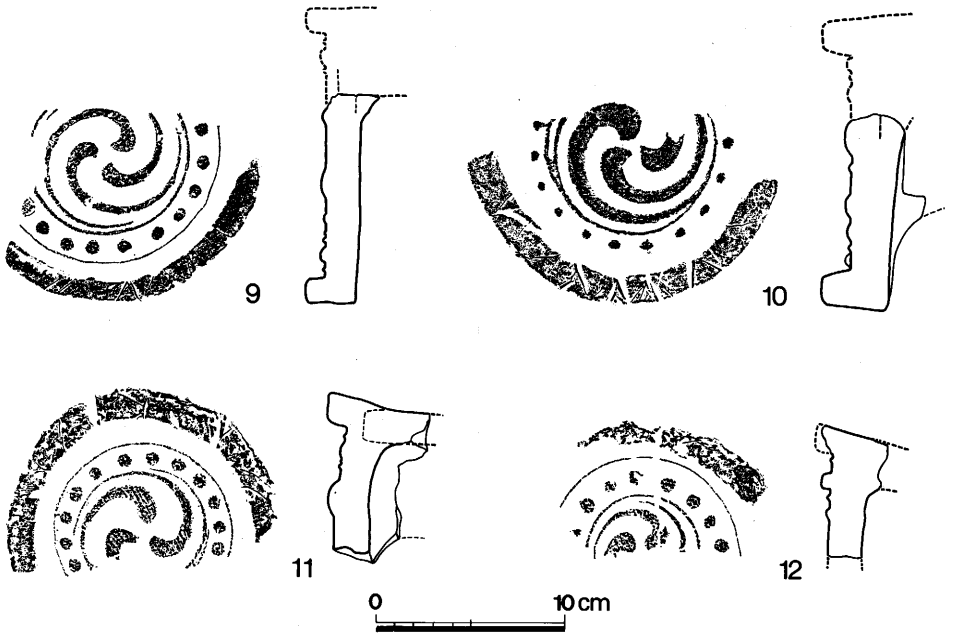
瓦当面完形品。花弁は十二葉であるが，そのうち六葉はやゝ小型で大小の弁を交互に配し，のぞき花弁風につくられ，弁の重なりあった状態をあらわす。中房との境には界線がめぐり，その中で一段盛りあがった中房を形成している。蓮子は1＋7で，中房の外周に接して並んでいる。弁端がややまるみをもった一種の剣頭文風の花弁をもち，先端は界線に接している。その外側に22個の珠文がならぶ。瓦当は比較的うすい。筒部は欠落しているが，瓦当の上端に接合されており，接合面には篦状工具によるくぼみがつくられている。瓦当外周及び瓦当裏はナデによる整形。胎土には白色砂粒を含み，焼成は堅緻。淡灰色の色調を呈する。

3. 単弁四葉蓮華文軒丸瓦（第10図3）

瓦当面完形品。大形の花弁の間に大きくのぞき花弁が配されており，その外側に界線・珠文帯で瓦当文様を構成する。大きな弁子のまわりを，一重の断面三角形を呈すシャープな輪郭線で囲んで花弁を形成しており，中央に大粒の蓮子を一つおく。のぞき花弁には弁子をもたない。珠文は大粒で，楕円形を呈し，蓮子・弁子とともに隆起も高い。瓦当外周・瓦当裏はナデによる整形。瓦当と筒部との接合面には，筒部凸面凹面とも粘土があてがわれ，荒い指ナデ痕がみ



第 10 図　軒丸瓦(1)



第 11 図　軒丸瓦(2)

られる。筒部には焼成後に両面から穿かれた釘孔が2ヶ所ある。筒部凸面は縦方向の篦削りののち荒いナデを施す。凸面にはこまかい布目痕がみられるが，内周の3分の2で布目が切れている。胎土にはこまかい砂粒を多く含む。焼成は堅緻。色調は暗灰色を呈している。

4. 単弁四葉蓮華文軒丸瓦（第10図4）

周縁と内区の一部が残る小片である。瓦笵のズレのため文様がわかりにくいが，これと同文のものが浅原寺跡で発見されているので，それによって文様の構成をうかがうことができる。花弁は四葉で，弁端の尖った一種の剣頭文状を呈し，弁の先端をむすぶように，大型で肉厚の舟形状の隆起がみられる。やや幅広の界線をはさんで大型の珠文が密にならぶ。瓦当外周および瓦当裏はナデによる整形。胎土は精良であるが，焼成は軟質である。色調は暗灰褐色を呈す。(2)

5. 単弁四葉蓮華文軒丸瓦（第10図5）

やや小型の軒丸瓦である。先の尖った一種の宝相華風の花弁を割菱状に四葉ならべ，中央に蓮子を1つおく。花弁の先端に接して界線がめぐる。各弁と界線のあいだには舟形状に突線がめぐる。花文の表出はあさく，平面的である。軒丸瓦**4**と類似した文様構成をもつが，珠文はみられない。瓦当外周および瓦当裏は指頭によるナデ整形である。胎土は精良な粘土。焼成は堅緻。色調は暗灰色を呈す。

6. 唐草文軒丸瓦（第10図6）

外区と周縁の一部が残るのみの小片であるため委細は不明である。外区には，2本の圏線内に左まわりの唐草文を配する。内にみられる圏線様のものは，あるいは巴文の一部かもしれな

い。瓦当面には木目痕が認められる。瓦当上面は縦方面の篦削りを施す。胎土は砂粒を含む。焼成は堅緻，色調は暗灰色である。

7. 三巴文軒丸瓦（第10図7）

扁平な右巻きの三巴文である。巴の頭部はやや尖り気味である。巴の末尾は相互に連なり界線を構成する。珠文は比較的小粒で密に配し，珠文帯の外側に圏線がめぐる。瓦当裏および瓦当外周はナデによる整形。筒部上面は縦方向の篦削りを施す。胎土には砂粒を多く含み，焼成は堅緻。色調は暗灰色を呈す。

8. 三巴文軒丸瓦（第10図8）

やや大型の右巻き巴文軒丸瓦である。破片のため巴頭部は不明であるが，長く尾をひき肉厚である。尾の末端は界線には接していない。外区には小粒の珠文を粗に配する。周縁は比較的幅が広い。瓦当外周と瓦当裏はナデによる整形。胎土には砂粒を多く含み，焼成はやゝ軟質である。淡灰色の色調を呈す。

9. 三巴文軒丸瓦（第11図9）

内区には，右巻きの三巴文を配する。巴の頭部は比較的小さく，やや尖りぎみである。尾の末端はすらりと長くのびるが，界線には接しない。外区には，やや大粒の珠文を配し，その外側にはさらに圏線がめぐる。瓦当外周および瓦当裏はナデ整形を施す。胎土は精良で，焼成も堅緻である。色調は暗灰色を呈す。

10. 三巴文軒丸瓦（第11図10）

肉厚で全体にやや幅広の右巻き三巴文を配する。巴の頭部はやや大きく，先端は尖っている。

番号	名称	出土地点	直径	内区					外区						胎土	焼成	色調	個体数	備考
				中房径	蓮子数	弁区径	弁幅	弁数	外区広	内縁 幅	内縁 文様	外縁 幅	外縁 高	外縁 文様					
1	宝相華文軒丸瓦	西区瓦堆積層	192			148		4	24	13	(S 40)	11	10	素文	精良	やゝ堅緻	淡灰色	1	
2	単弁十二葉蓮華文軒丸瓦	西区瓦堆積層	140	42	1+7	103	26	12	19	11	S 22	8	6	素文	砂粒	堅緻	淡灰色	2	
3	単弁四葉蓮華文軒丸瓦	西区瓦堆積層	152	13	1	102	35	4	26	17	S 13	9	5	素文	砂粒	堅緻	暗灰色	1	
4	単弁四葉蓮華文軒丸瓦	西石積壇埋土区	(145)			(93)		4	25	15	(S 28)	10	6	素文	精良	軟質	暗灰褐色	1	
5	単弁四葉蓮華文軒丸瓦	西石積壇埋土区	125	7	1	102	33	4	11	4	なし	7	6	素文	精良	堅緻	暗灰色	1	
6	唐草文軒丸瓦	西区瓦溜り							32	21	唐草文	11	8	素文	砂粒	堅緻	暗灰色	1	
7	三巴文軒丸瓦	西区瓦溜り	135					三巴	31	17	S 28	14	9	素文	砂粒	堅緻	暗灰色	1	
8	三巴文軒丸瓦	西区瓦堆積層	(169)					三巴	32	13	(S 20)	19	10	素文	砂粒	やゝ軟質	淡灰色	1	
9	三巴文軒丸瓦	西区瓦堆積層	156					三巴	33	19	(S 20)	14	10	素文	精良	堅緻	暗灰色	1	
10	三巴文軒丸瓦	西区瓦堆積層	(150)					三巴	30	12	(S 20)	18	15	素文	細砂	軟質	黒灰色	1	
11	三巴文軒丸瓦	西石積壇埋土区	(135)					三巴	35	17	(S 17)	18	11	素文	砂粒	堅緻	暗灰色	1	
12	三巴文軒丸瓦	東区黄褐色土	(136)					三巴	39	24	(S 16)	15	9	素文	精良	堅緻	淡灰色	1	

（ ）内は推定数値，Sは珠文，数値単位は㎜

第1表　出土軒丸瓦一覧表

尾の末端は界線に接し，その外側にやや小粒の珠文が配されている。周縁は高くやや幅広である。瓦当裏および外周はナデによる整形。胎土には細砂を多く含み，焼成は軟質である。色調は黒灰色を呈する。

11. 三巴文軒丸瓦（第11図11）

右巻きの三巴文で，巴の頭部は丸みをもち肉厚である。尾は長くのびるが，相互に接することはなく，界線もみられない。外区にはやや大粒の珠文を配し，その外側には圏線をめぐらす。瓦当面には笵の木目痕がみられる。筒部上端は縦方向の篦削りを施す。胎土は砂粒を多く含み，全体につくりは粗い。焼成は堅緻，色調は暗灰色である。

12. 三巴文軒丸瓦（第11図12）

右巻きの三巴文であるが，巴は全体に小さい。巴頭部は丸みをもち，みじかめの尾にくらべて頭部は大きい。界線の外側には大粒の珠文を配し，さらに外側に圏線をめぐらす。筒部上面は縦方向の篦削りを施す。瓦当裏はナデ整形。胎土は精良で，焼成は堅緻。淡灰色を呈す。

2）**軒平瓦類**（第12図～第14図，図版14,15）

軒平瓦は併せて18種31点検出されている。瓦当面が完存しているものが4点みられ，このうち1点は平瓦部までほぼ完存しており，釘穴に釘が残ったまま検出されている。ほとんどは西区の瓦溜り及び瓦堆積層中から出土したものである。細部の計測値については第2表を参照願いたい。

1. 均整唐草文軒平瓦（第12図1）

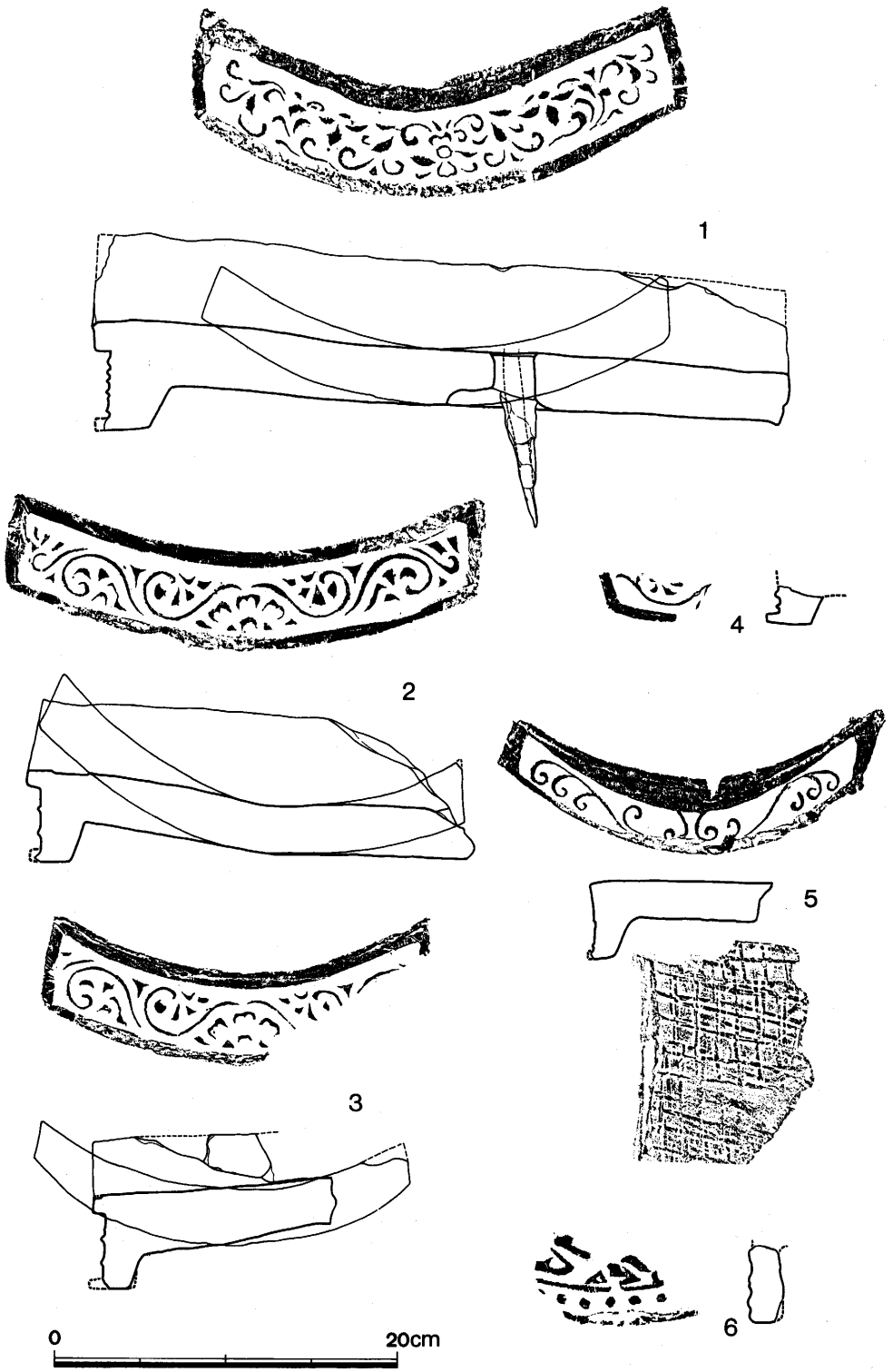
瓦当面および平瓦部がほぼ完存している。双脚状の唐草を付した花文を中心飾りにおき，左右に3転する唐草を配する。顎は段顎で瓦当外周から瓦当裏および平瓦部凸面にかけてはナデによる整形を施す。平瓦部凹面は布目痕がみられ瓦当際まで続く。また平瓦部には焼成後に穿たれた釘孔があり釘の下半がそのまま残っている。胎土には砂粒を多く含む。焼成はすこぶる堅緻で瓦当面の一部には自然釉がみられる。色調は全体に暗灰色を呈する。

2. 宝相華唐草文軒平瓦（第12図2）

半截花文を中心飾りにおき，左右に2転半する巻きの強い唐草を配する。顎は段顎で，瓦当外周下部から瓦当裏にかけてはナデによる整形。平瓦部凸面は板状のものによる叩き目かと思われる痕跡がみとめられ，さらにナデにより整形されている。凹面には瓦当面際まで布目痕が続く。顎部には部分的にベンガラらしい赤色の付着物がみられる。胎土は精良で，焼成はやや堅緻。色調は暗灰色を呈する。今回の調査区からは4点出土している。いずれも同笵と思われる。

3. 宝相華唐草文軒平瓦（第12図3）

軒平瓦**2**と全く同文であるが，**2**の笵型の両端を切り落としたものを笵にしている。唐草文は，中心飾りの半截花文から左右に2転したところで終る。整形も**2**と同様であるが，平瓦部凸面は板状工具により荒く削られている。凸面には，細かい布目が瓦当面際まで続く。胎土は



第 12 図　軒平瓦(1)

砂粒を含むが比較的精良であり，焼成は堅緻である。色調は赤褐色である。

4. 唐草文軒平瓦（第12図4）

瓦当部左端の顎部のみの小片である。平瓦の凸面側に別の粘土を盛って瓦当部を成形したものと思われ，粘土を盛った顎部のみが剝落したものであろう。軒平瓦2・3と類似するモチーフをもつが，唐草の巻きの方向が異なる。胎土には粗い砂粒を多く含む。焼成はすこぶる堅緻である。全体に灰褐色を呈する。

5. 均整唐草文軒平瓦（第12図5）

文様区中心部上端から下に向って巻きの強い唐草文が左右に分かれる。それぞれ2転しながら，蔦状に延びた主茎の先端は3本の蕨手に分岐する。笵の押しつけはきわめて浅くなっており，また瓦当面の曲線と笵の曲線とは一致していない。このため瓦当中央上端では周縁がきわめて広くなっており，段状に笵の痕が残っている。また下端右側では周縁が非常にせまくなっている。瓦当面にはわずかに笵の木目痕がみられる。平瓦部凹面は瓦当面際まで布目痕を残し，凸面はやや大型の格子目叩きを施す。やや丸みをもった段顎で，瓦当下端から顎部にかけてはナデによる整形，胎土は精良であり，焼成はやや堅緻である。色調は灰色を呈す。

6. 宝相華文軒平瓦（第12図6）

瓦当面下半の一部のみが残る小片であり，文様構成がはっきりしないが，これと同文と思われるものが浅原寺跡から出土している。それによってみると，半截の宝相華文をおそらく3個，上下に交互に配した文様構成をもつもの[3]と思われる。下部には太い界線をつくり，やゝ大型の珠文を配している。瓦当外周下面及び裏面はナデによる整形。胎土は精良であるが，焼成は軟質である。色調は暗灰褐色を呈する。

7. 宝相華唐草文軒平瓦（第13図7）

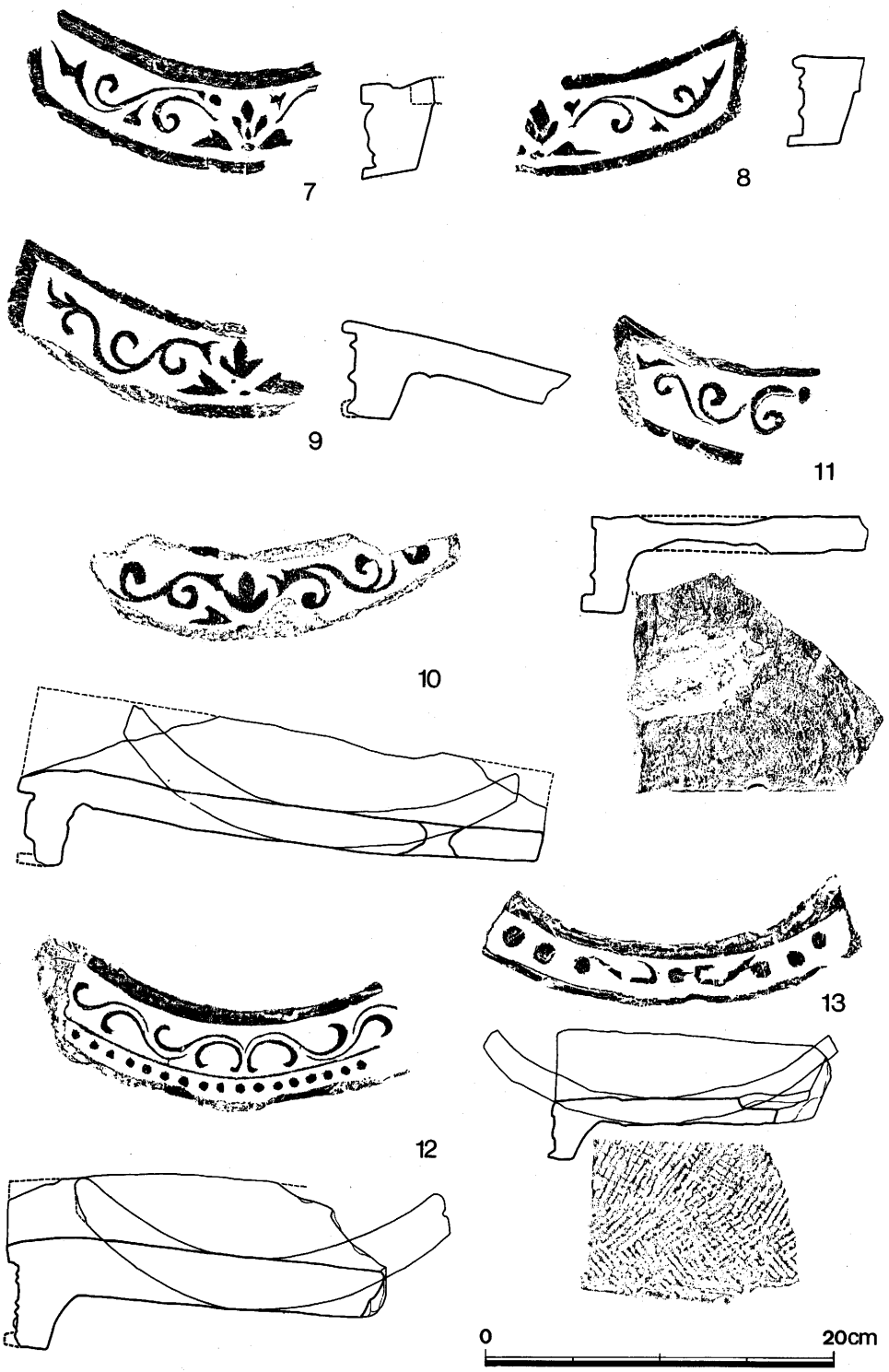
半截花文を中心飾りとし，現存する左半部では，各々分離した巻きの強い唐草が2転し，さらに先が2つに分かれる枝葉がのびる。瓦当外周下面および瓦当裏は横方向の篦削りを施す。平瓦部凹面には瓦当際まで布目痕が残る。胎土には砂粒を多く含み，焼成は堅緻である。全体に淡灰色を呈する。

8. 宝相華唐草文軒平瓦（第13図8）

7と全く同じ文様構成をもつ。半截花文を中心飾りとし，巻きの強い唐草を2転させ，さらに枝葉がのびるが，主茎は7のように分離しない。瓦当外周下面と裏は横方向の篦削り。布目は瓦当際まで続く。焼成は堅緻で，胎土には砂粒を含む。色調は暗灰色を呈す。

9. 宝相華唐草文軒平瓦（第13図9）

やや硬化した半截花文を中心飾りとし，巻きの強い唐草文を3転し，主茎の先端には，先が3つに分かれる枝葉を配する。瓦当外周下面および顎部には強いナデ整形を施す。平瓦部凹面に布目痕がみられ，瓦当際まで続く。平瓦部凸面はナデによる整形。胎土は砂粒を含み粗く，焼成は軟質である。色調は全体に茶褐色を呈す。



第 13 図　軒平瓦(2)

10. 宝相華唐草文軒平瓦（第13図10）

半截花文を中心飾りとし，やや太めの唐草文を左右に3転する。主茎の先にはさらに枝葉がのびる。瓦当外周下面と瓦当裏はナデによる整形。平瓦部凸面は板状工具による削りののちナデ整形を施す。平瓦部凹面には細かい布目痕が瓦当際まで残る。また平瓦部に焼成後に穿たれた釘穴がみられる。胎土には砂粒を多く含み，焼成は軟質で，色調は黄灰色である。今回の調査区からは，4点出土している。

11. 唐草文軒平瓦（第13図11）

現存する左半部では左方に向けて巻きの強い主葉を3転させ，さらに枝葉がのびている。おそらく軒平瓦10と同様の文様構成をもつもので中心飾りには半截花文をおくものと思われる。平瓦部凹面には布目痕がみられ瓦当際まで続く。凸面には同心円叩きと思われる痕がみられるがナデて消されている。瓦当外周下面および裏はナデによる整形。胎土には砂粒を含み，焼成はやゝ堅緻。色調は暗灰色である。

12. 均整唐草文軒平瓦（第13図12）

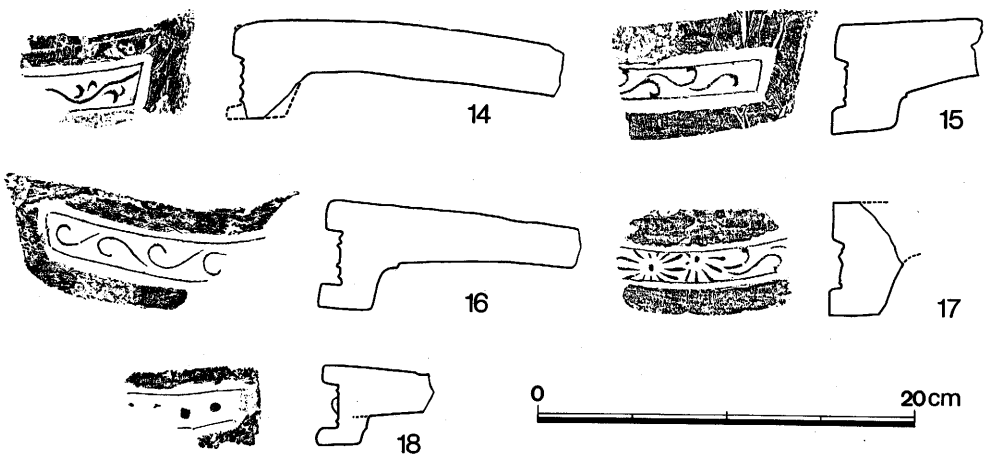
瓦当中央にうつぶせのC字状の中心飾りを配し，左右に唐草文が3転する。下部に界線をはさんで，比較的大粒の珠文が密に配される。瓦当面には笵の木目痕が残る。瓦当外周下面から顎にかけてはナデによる整形を施す。平瓦部凸面は板状のものと思われる叩きがみられ，ていねいにナデが施される。また凸面の一部に布目痕がみられる。凹面は布目痕がみられるが，瓦当面から約8cmのところまで指頭によるていねいなナデが施されている。胎土は精良で，焼成は堅緻。色調は暗灰色を呈す。全体につくりはていねいである。今回の調査区からは5点出土しており，同文で笵の異なるものが1点みられる。いずれも西区瓦堆積層から出土したものである。また凹面に，瓦当面を下にして瓦のほぼ中央に『大』ないし『天』銘を篦で描いているものが1点ある。

13. 唐草文軒平瓦（第13図13）

中央に珠文を1つおき，左右に中央に向った退化した唐草を配する。さらに外側にはそれぞれ3個の大型の珠文がならぶ。瓦当面の大きさと笵の大きさが異なるため，周縁幅は一定せず左端では周縁はなくなっている。瓦当外周下端は横方向の篦削り。瓦当裏は縦方向の指おさえによる整形がなされており凹凸が目立つ。平瓦部凸面は小型の格子目叩きが施される。凹面には布目痕がみられ，瓦当際まで続く。胎土は砂粒を含み，焼成はやや堅緻である。色調は淡灰色を呈する。全体につくりは荒く，小ぶりの瓦である。

14. 唐草文軒平瓦（第14図14）

瓦当右端部の破片。右に向って屈曲する茎から先が2つに分かれた枝葉が配される。外には界線がめぐり，周縁の幅は広い。瓦当外周下端および瓦当裏はナデを施す。平瓦部凸面は板状工具による削り。凹面は瓦当際まで布目痕がみられるが，上からナデが施されている。胎土は精良。焼成はやや堅緻で，全体に暗灰色を呈す。



第 14 図　軒平瓦(3)

15. 唐草文軒平瓦（第14図15）

現存する部分では右に向って弛緩した唐草が4転している。唐草に接して界線がめぐる。周縁の幅は広い。瓦当下面と瓦当裏はナデによる整形。平瓦部凸面は板状工具により縦方向に削られている。凹面は布目痕が瓦当際まで続き，一部ナデにより消されている。胎土には砂粒を含む。焼成はやや堅緻。色調は暗灰色を呈する。

16. 唐草文軒平瓦（第14図16）

瓦当の中心付近から左半分の破片。左に向って退化した唐草が4転する。おそらく均整唐草文になるものと思われる。外側には界線がめぐり，周縁の幅は広い。瓦当外周下面および瓦当裏はナデによる整形。平瓦部凸面は板状工具による縦方向の削り。凹面は瓦当際まで布目痕が残されるが，上から縦方向のナデによって消されている。胎土は精良で，焼成はやや堅緻。色調は暗灰色である。

17. 唐草文軒平瓦（第14図17）

瓦当の中央付近の破片である。浅原寺跡から出土している同文の瓦によってみてみると，菊花状の中心飾りを上下にややずらし，重ねるように2つ並べ，そこから退化した唐草(4)が左に5転，右に4転する。内区の文様に接して界線がめぐり，周縁の幅はかなり広い。瓦当外周下面および瓦当裏はナデによる整形を施す。瓦当上面には布目痕が先端まで残る。胎土は精良で焼成は堅緻，色調は淡灰色である。

18. 連珠文軒平瓦（第14図18）

右端部の破片である。やや大粒の珠文が並び，上下に界線をおく。界線は右端で周縁にあたっている。瓦当下面と瓦当裏はナデによる整形。平瓦部凸面は板状工具により削られている。凹面は瓦当端まで布目痕が残る。胎土には砂粒を含み，焼成はやや堅緻，色調は灰色を呈す。

番号	名称	出土地点	上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇幅	脇区文様	文様の深さ	胎土	焼成	色調	布目本/cm たて×よこ	個体数	備考
1	均整唐草文軒平瓦	西区瓦堆積層	266	57	283	63	38	均整唐草	17	なし	8	なし	10	なし	2	砂粒	堅緻	暗灰色	9×9	1	鉄釘残存
2	宝相華唐草文軒平瓦	西区瓦堆積層	267	43	273	53	35	宝相華唐草	11	なし	7	なし	8	なし	2	精良	やゝ堅緻	暗灰色	9×10	4	
3	宝相華唐草文軒平瓦	西区石積壇溝	218	34		53	35	宝相華唐草	12	なし	6	なし	7	なし	2	やゝ精良	堅緻	赤褐色	9×12	1	
4	唐草文軒平瓦	西区石積壇溝						唐草			6	なし	7	なし	2.5	粗砂	堅緻	灰褐色		1	
5	均整唐草文軒平瓦	西区瓦堆積層	218	42	216	44	17	均整唐草	22	なし	5	なし	14	なし	0.5	精良	やゝ堅緻	灰色	8×8	2	やゝ大型の格子目叩き
6	宝相華文軒平瓦	西区瓦溜り						宝相華			21	S?			2	精良	軟質	暗灰褐色		1	
7	宝相華唐草文軒平瓦	西区瓦堆積層				54	36	宝相華唐草	11	なし	7	なし	8	なし	6	砂粒	堅緻	淡灰色	9×10	1	
8	宝相華唐草文軒平瓦	西区瓦堆積層				51	38	宝相華唐草	7	なし	6	なし	9	なし	4	砂粒	堅緻	暗灰色	9×10	1	
9	宝相華唐草文軒平瓦	西区瓦堆積層				55	38	宝相華唐草	7	なし	10	なし	15	なし	4	砂粒	軟質	茶褐色	11×11	1	
10	宝相華唐草文軒平瓦	西区瓦堆積層				50	35	宝相華唐草	9	なし	6	なし	7	なし	5	砂粒	軟質	黄灰色	11×12	4	
11	唐草文軒平瓦	西区瓦堆積層				54	37	唐草文	7	なし	10	なし	11	なし	3	砂粒	やゝ堅緻	暗灰色	10×8	1	同心円叩き
12	均整唐草文軒平瓦	西区瓦堆積層				57	27	均整唐草	11	なし	19	S20	14	なし	2	精良	堅緻	暗灰色	9×9	5	
13	唐草文軒平瓦	西区瓦堆積層	186	33	217	33	20	唐草文	9	なし	4	なし	4	なし	2	砂粒	やゝ堅緻	淡灰色	9×11	1	小型格子目叩き
14	唐草文軒平瓦	西区南端溝				(49)	23	唐草文	15	なし	(11)	なし	24	なし	1.5	精良	やゝ堅緻	暗灰色	9×11	1	
15	唐草文軒平瓦	西区石積壇埋土				57	23	唐草文	19	なし	15	なし	16	なし	0.5	砂粒	やゝ堅緻	暗灰色	8×9	1	
16	唐草文軒平瓦	西区石積壇埋土				56	28	唐草文	15	なし	13	なし	15	なし	2	精良	やゝ堅緻	暗灰色	11×11	2	
17	唐草文軒平瓦	西区瓦溜り				60	23	唐草文	22	なし	15	なし			2	精良	堅緻	淡灰色	8×10	1	
18	連珠文軒平瓦	東区表土				42	23	連珠文	10	なし	9	なし			4	砂粒	やゝ堅緻	灰色	10×10	2	

( ) 内は推定数値，Sは珠文，数値単位は㎜

第2表　出土軒平瓦一覧表

3）**丸瓦**（第15図・第16図）

今回の調査で出土した丸瓦には，玉縁のつくものと玉縁のつかないいわゆる行基葺の丸瓦がみられる。この2種は西区瓦溜り，瓦堆積層のいずれからも検出された。

玉縁付丸瓦（第15図）

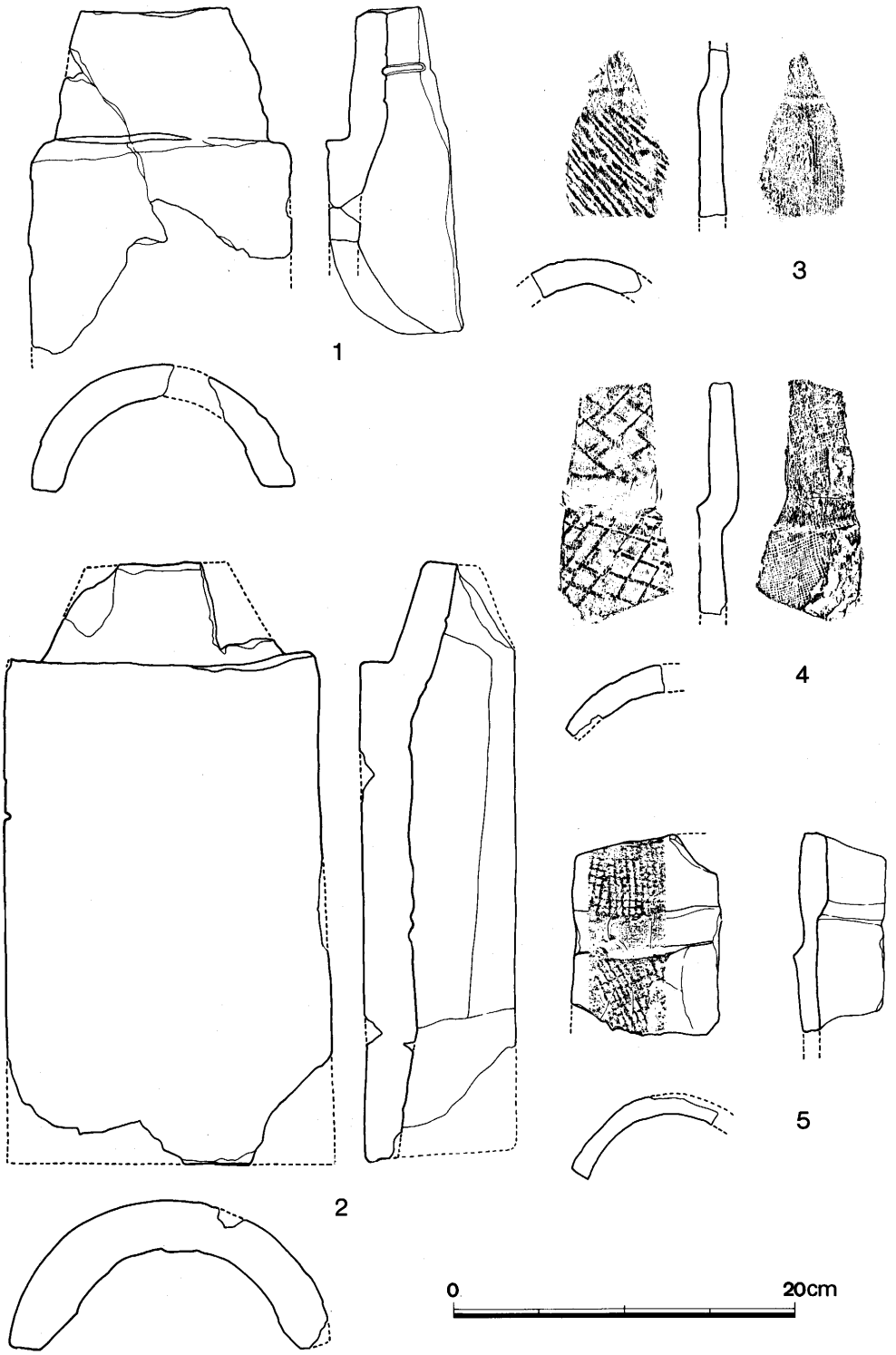
1は下半が欠落するが玉縁の長いもので，玉縁長7.5㎝を測る。玉縁は横方向のナデで仕上げられている。凸面は玉縁に近い部分を横方向のナデ，以下は縦方向のナデで仕上げる。凹面には玉縁端から約3㎝のところに幅5㎜，深さ3㎜の凹線状の凹みがあり，これから上部は横方向の篦削りを施し，下部には糸切り痕の上に布目痕がみられる。胎土は精良で，焼成はやゝ軟質である。全体に淡灰色を呈している。**2**は全長が知り得るもので，全長35㎝，玉縁長は5.8㎝を測る。凸面は縦方向の縄目叩きののちナデ，玉縁部は横方向のナデを施す。凹面は布目痕が残るが，下端および側縁は篦により大きく面取りがなされ，玉縁部も篦削りにより調整されている。砂粒を多く含み焼成は良好で淡灰色を呈している。**3**は玉縁部付近の小片であるが，玉縁部はゆるやかな段をなしており，凸面は玉縁部まで平行条線の叩きがみられる。凹面は磨滅がはげしいが布目痕を残す。胎土には細砂を含み，焼成は軟質，暗灰色を呈する。**4**の凸面はやや大型の格子目叩きを玉縁端まで施し，玉縁の基部は横方向の強いナデを施している。凹面は玉縁端まで布目痕が続いている。玉縁長は約7㎝を測る。胎土は比較的精良で，やや軟質の焼成である。全体に黒灰色を呈する。**5**は玉縁長約7㎝を測り，凸面は細かい格子目叩きを玉縁端まで施し，玉縁の基部は強い横方向のナデを施している。凹面は荒い布目が玉縁端部まで続く。胎土には砂粒を多く含み，焼成は堅緻である。色調は淡灰色を呈している。

行基葺丸瓦（第16図）

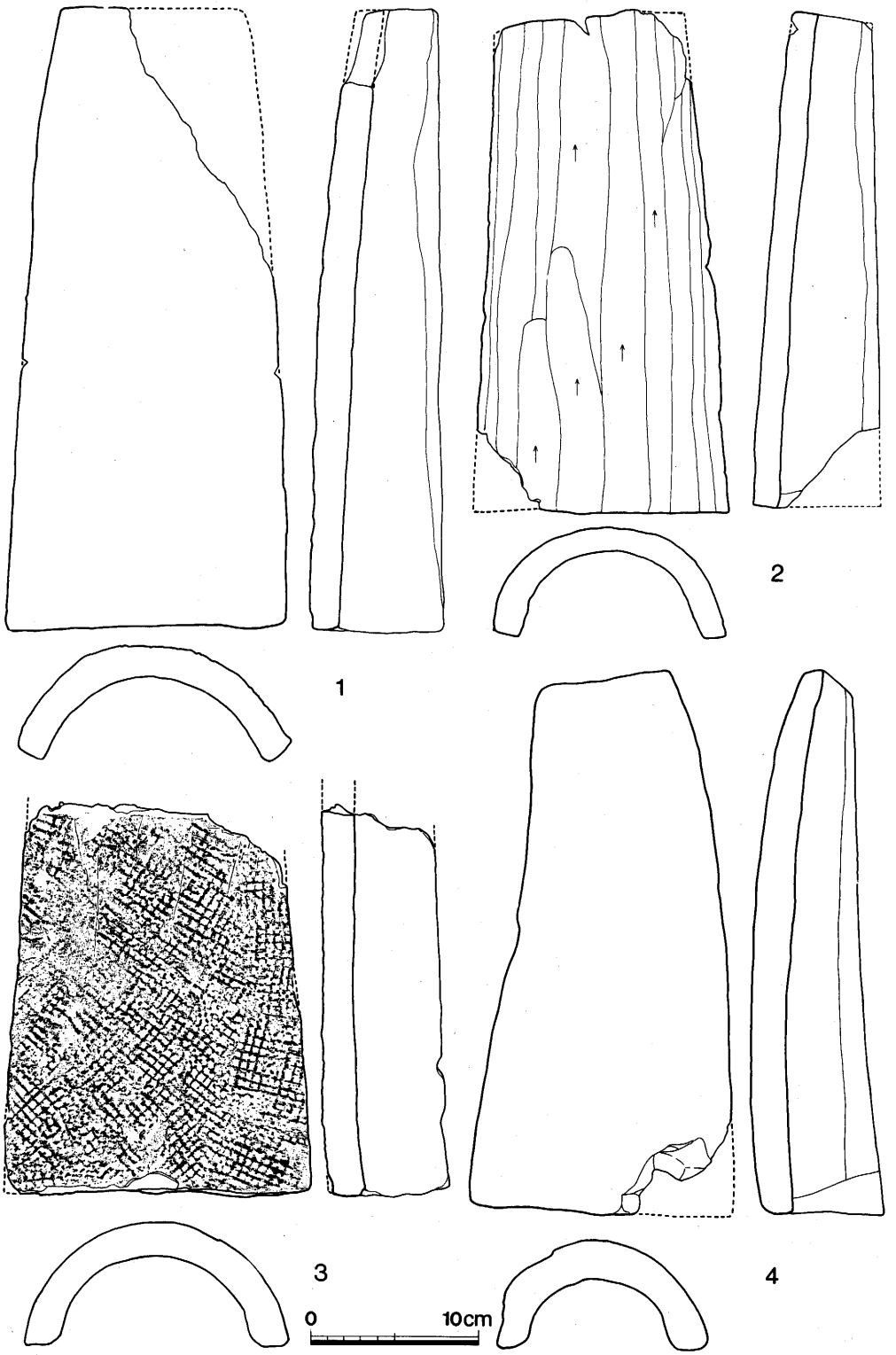
1は全長37㎝を測る。凸面は全体に磨滅がはげしいため調整ははっきりしないがナデを施している。凹面は全体に糸切り痕ののち布目痕がみられ，両側縁は面取りがされる。胎土には砂粒を含み，軟質の焼成で灰褐色を呈する。**2**は全長29.5㎝で，凸面は全体に広口端から狭口端に向って篦削りを施す。凹面は全体に布目痕が残り，側縁は面取りがなされている。胎土には砂粒を多く含みやや荒い。焼成は堅緻で淡灰色を呈している。**3**は下半部だけの破片であるが凸面は細かい格子目叩きが施され，凹面は目の細かい布目痕がみられる。砂粒を多く含む胎土で焼成は堅緻，色調は灰色である。**4**はややゆがんでいるが全長32.5㎝を測る。凸面は縦方向の縄目叩きののち縦方向の篦削りを施す。凹面は全体に布目痕を残し，両側縁および広口端縁は面取りがなされている。胎土には細砂を含み，焼成は軟質で暗褐色を呈する。

4）**平瓦**（第17図～第20図）

ほとんどの平瓦の凹面には布目痕が残っており，凸面には各種の叩きがみられる。このうちナデにより叩き痕を消したものないしは無文の叩きののちナデによって仕上げたものが最も多く，その他には縄目・平行条線・格子目をはじめとして18種がみられた。特異な例として凸面全体に同心円叩きを施したものがみられる。



第15図　丸　瓦　(1)



第16図　丸　瓦　(2)

縄目叩き（第17図1～4）

4種がみられ，出土量は無文のものについで多い。やや大型の荒い縄目をもつ厚さ約3㎝前後の厚手のもの1とやや目の細かい厚さ1.5㎝前後の薄手のもの2がある。いずれも側縁に対して斜め方向から叩いているものである。2の縄目叩きをもつものには赤褐色を呈し焼成の堅緻なものが目立つ。また，1の叩きをもつもののうち凹面の布目が側面にまで続いているものがみられる。3は端縁に平行に縄目がみられるもの，4は側縁に平行に整然と縄目が通るものである。3は厚手で焼成の良好なものが多く，4はやや軟質の焼成のものが目立つ。

平行叩き（第17図5・6）

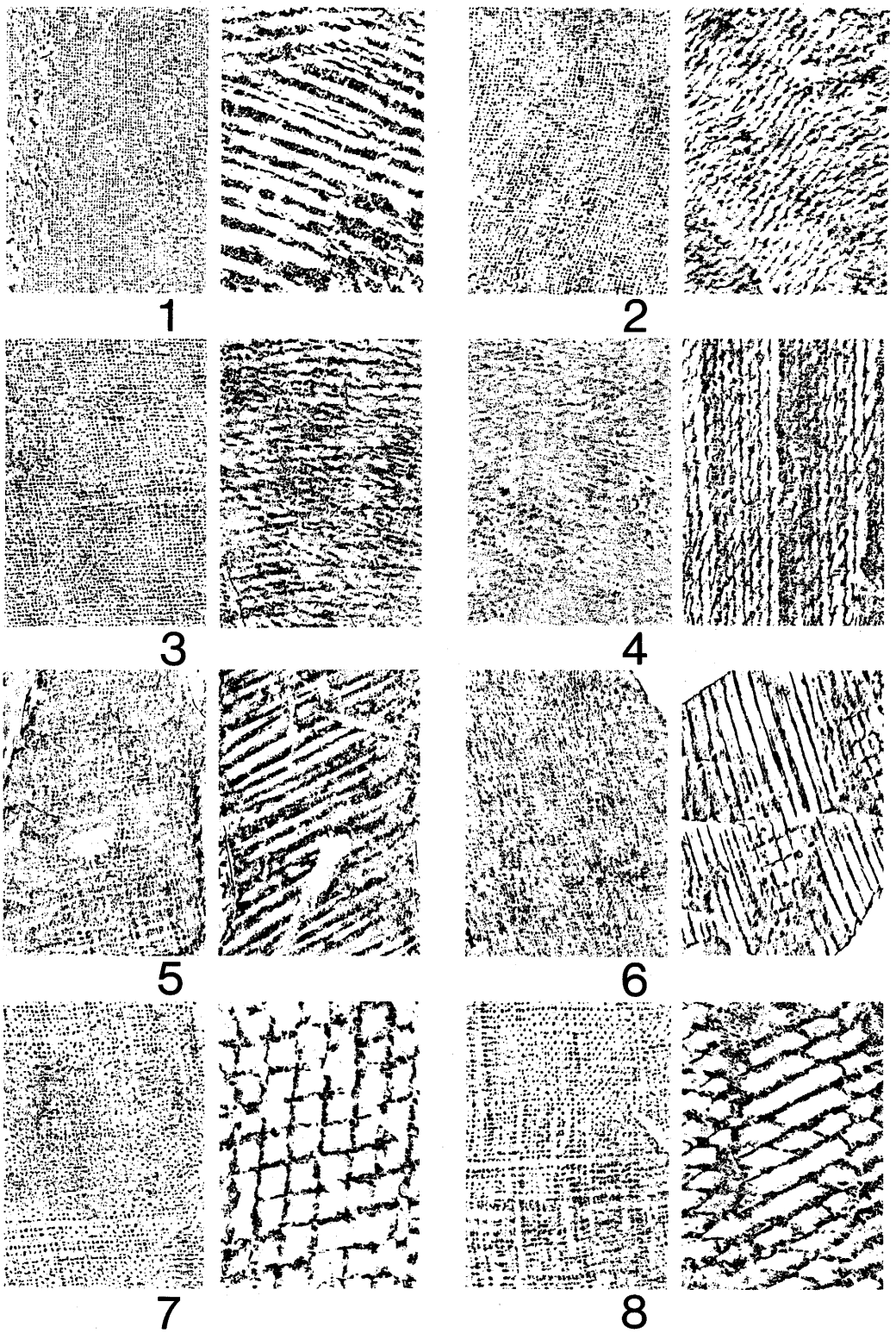
平行条線文を施したもので2種みられる。出土量はわずかである。5は厚さ約1.5㎝で焼成は軟質，黒褐色を呈する。6は平行条線の一部に横方向の条線が入り，格子目状になっている。薄手で焼成の堅緻なものである。

格子目叩き（第17図7・8，第18図9～16）

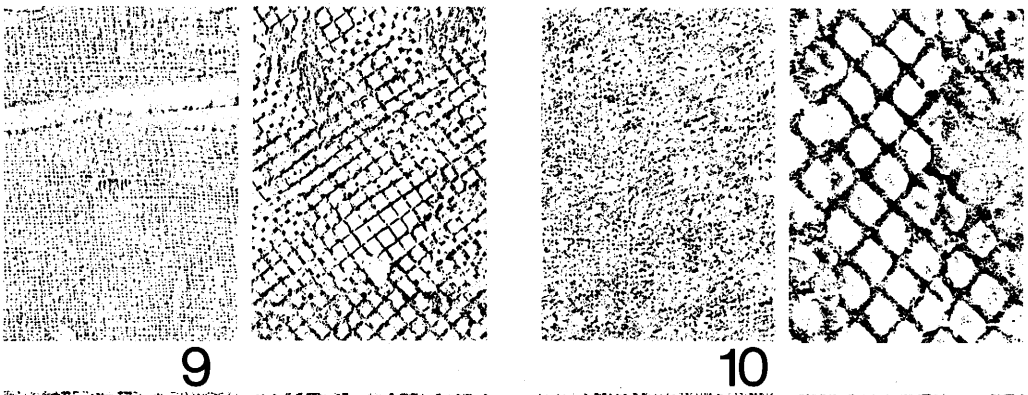
各種とりまぜて10種ある。7は正方形に近い格子目をもち，焼成はすこぶる堅緻で一部に自然釉のかかるものがある。8は斜格子目文をもつもので，焼成は堅緻である。7・8とも厚さ約1.5㎝の薄手のものである。9は非常に細かい格子目をもち，布目も細かい。厚さは約1.2㎝前後で，色調は淡灰色，胎土には砂粒を含み，焼成はやゝ軟質のものが多い。9と同じ格子目叩きは軒平瓦13にみられる。また，この叩き目と類似するものに亀山焼の甕の胴部の叩き目があるが，最近の亀山焼の窯跡の調査により，叩き目，布目，胎土，焼成とも9と酷似する瓦が発見されている。10は斜格子目の角がまるみをもっているものである。黒褐色を呈し，焼成は軟質である。(5) 9と同様に亀山焼窯跡出土の瓦に類似するものがみられる。11はやや大きい斜格子目で，彫りは浅い。全体に黒灰色を呈するものが多く，焼成はやや軟質である。軒平瓦5の凸面にみられる叩きである。12はさらに大型の斜格子目叩きで，胎土には砂粒を多く含み，焼成は堅緻なものである。13・14は大型の斜格子でいずれも焼成は良好，暗灰色を呈している。15は小片で全体のようすはわからないが斜格子を複線で描いている。茶褐色を呈し，焼成は良好である。16は斜格子の交点に横線の入ったもので，暗灰色を呈し，焼成は良好である。13～16はいずれも凸面の表面に細かい砂粒が付着しており，叩き板の剝離剤として撒かれたものと思われる。なお13・14に類似する斜格子叩き目は，和気町泉瓦窯跡，瀬戸町万富東大寺瓦窯跡などから出土している。

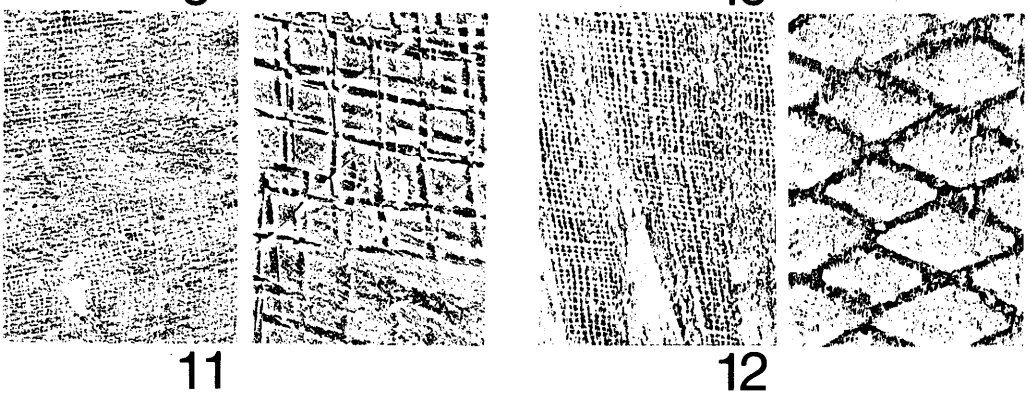
同心円叩き(6)（第19図17）

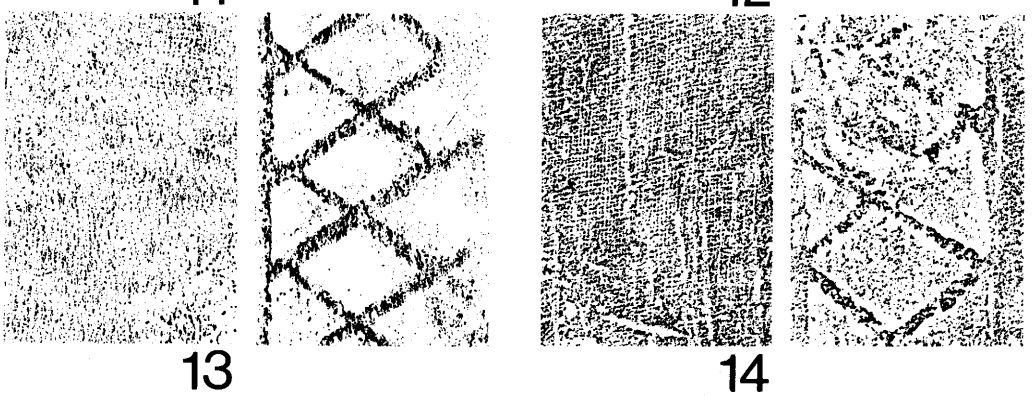
17は凸面に同心円叩きをもつ特異なものである。この叩き目をもつ平瓦は今回の調査区から全部で22点出土している。このうち全体のわかる例（第20図，図版16）についてみてみると，狭端幅20.5㎝，広端幅推定21.5㎝，厚さ1.3㎝～1.8㎝を測る。胎土は精良で，焼成は堅緻で須恵質を呈する。色調は凹凸面とも暗灰色で断面は紫灰色である。叩きの原体は円筒形状のもののようで，同心円は14条の円を重ね，直径は6.6㎝である。彫りは浅く同心円の中心は扁在して

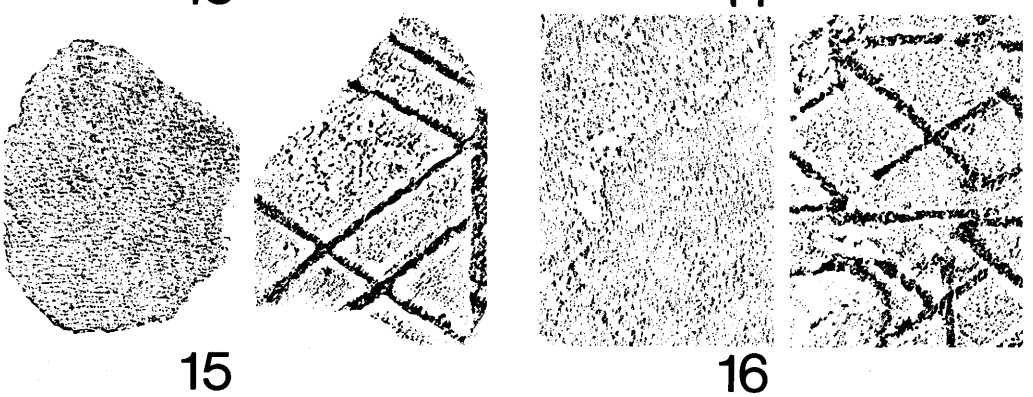


第 17 図　平瓦叩き(1)（縮尺$\frac{1}{2}$）





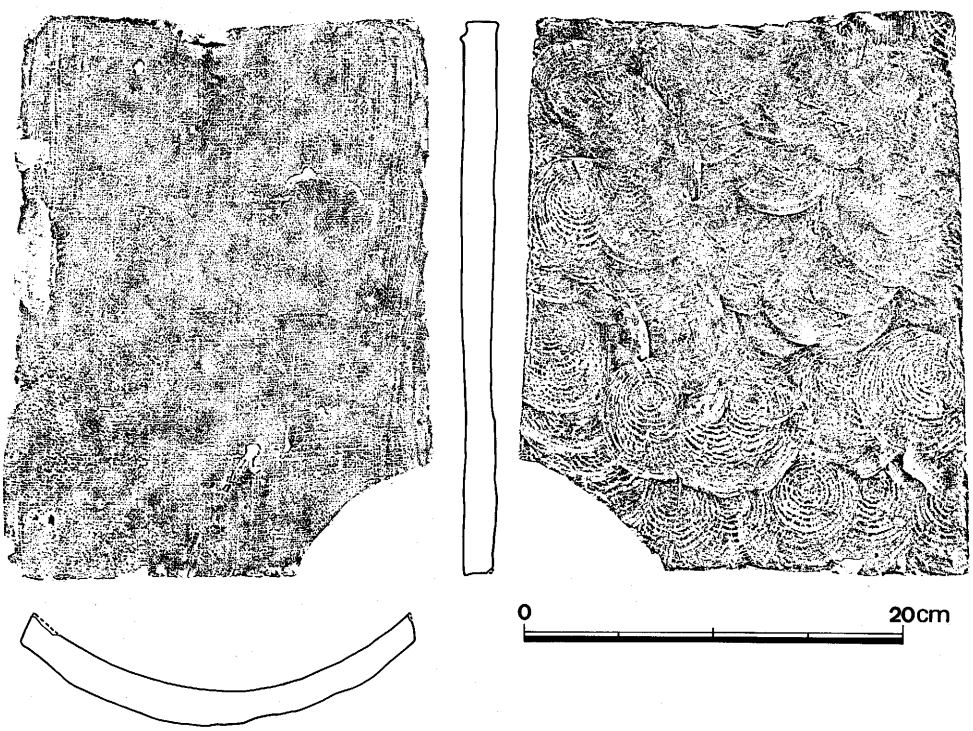




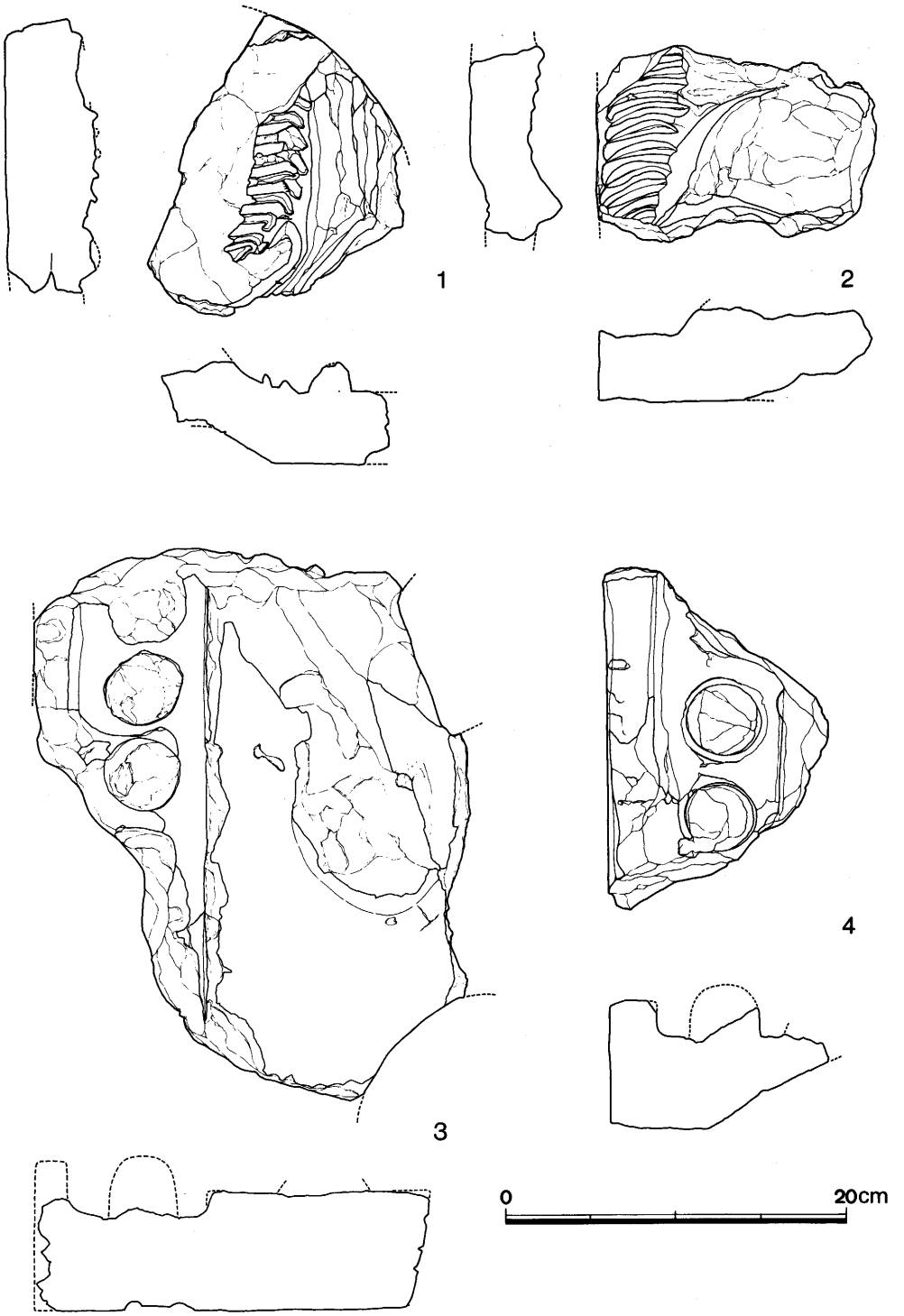
第 18 図　平瓦叩き(2)（縮尺$\frac{1}{2}$）

第19図　平瓦叩き目(3)（縮尺$\frac{1}{2}$）

おり，円の中心より約1.5㎝ずれている。叩きは凸面全体におよんでいるが，上半部はナデにより消されている部分が多い。凹面は全体に細かい布目痕が残されている。第20図に示したものは，西区瓦堆積層中から出土したものであるが，西区瓦溜りからも出土している。同心円叩きをもつもののうち，軒平瓦11にみられるように厚さが2.0㎝～2.8㎝の厚いものと，1.0㎝～1.8㎝の薄いものとに分かれる。厚手のものは全体に淡灰色を呈し，焼成はややあまい。薄手のものは暗灰色で須恵質である。いずれも凹面全体に布目痕が残り，布目の細かいものが



第20図　同心円叩き平瓦



第 21 図　鬼　　瓦

目立つ。

その他

18 は凹面凸面とも糸切り痕が残るものである。凹面には糸切り痕のうえに布目痕がみられる。色調は全体に茶褐色を呈し，胎土は精良，焼成は良好である。

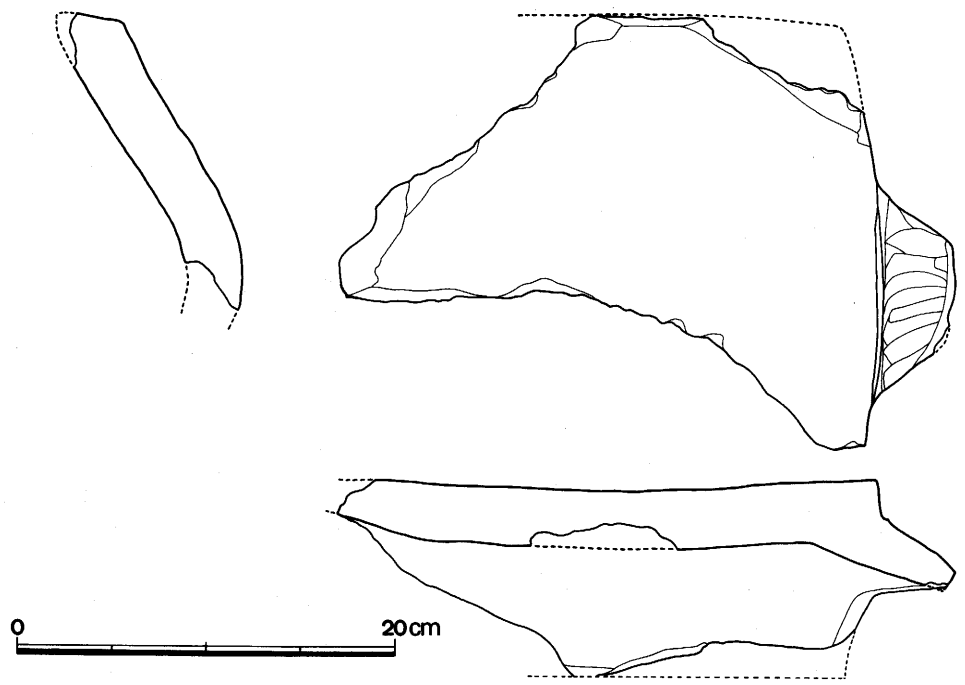
5) **その他の瓦類**

鬼瓦（第21図1～4，図版16）

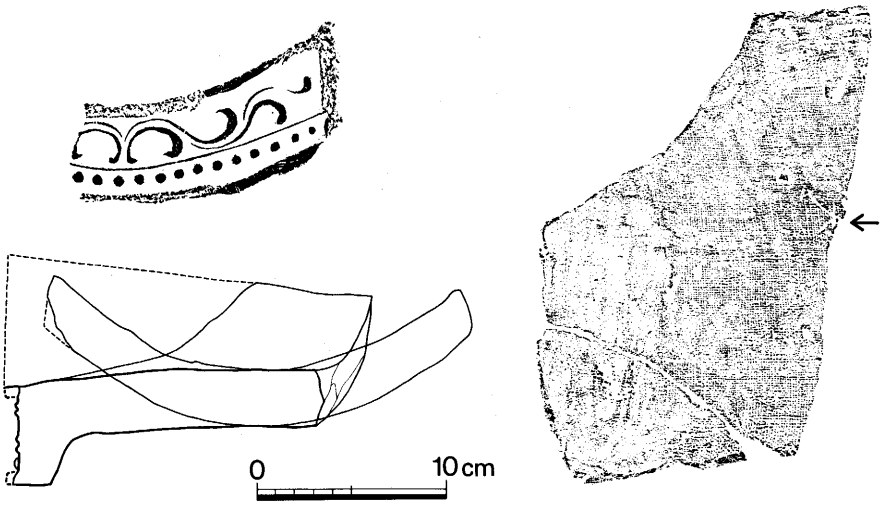
今回の調査区からは4点出土しているが，いずれも破片で全容をうかがえるものはない。

1 は西区瓦溜りから出土したもので，文様は笵型でつくられている。厚さは約4.5㎝を測る。鬼瓦のどの部分にあたるかは明確でないが，図の上端の円弧をなす部分の側面が荒く削られておりアーチ型をなす鬼瓦の上部に近い部分ではないかと思われる。裏面は荒く篦削りがなされ，中央部分に向って深さ約2㎝ほど粗く刳っている。胎土には砂粒を含むが比較的精良で，焼成はやや堅緻である。色調は淡灰色を呈する。

2 も同様に西区瓦溜りから出土している。文様は笵型でつくられ，型抜き後文様の細部をナデにより調整している。厚さは約4㎝を測る。図の左端側面はナデにより整形されており，鬼瓦の側面の一部ではあるが，どの部分に相当するかははっきりしない。裏面は荒く篦削りがなされており，図の下端にあたる部分は篦により刳りとられている。また裏面の一部に布目痕がみられる。胎土は比較的精良で，焼成はやや堅緻，全体に淡灰色を呈し，**1** と酷似しており同一個体の可能性もある。



第22図　雁　振　瓦



第23図　文　字　瓦

3は西区瓦堆積層から出土したものである。鬼瓦の左下半部と思われる。文様については欠落しているため不明であるが，文様区から一段さがって幅7.5cmの珠文帯があり，径4.5cmの珠文がならぶ。さらに外側には幅2cmの周縁がみられる。図の下端左は弧状に欠きとられ，ナデによって整形され，右上は方形の一端のように篦によって欠きとられている。表面はナデによって調整され，裏面は全体に糸切りの痕跡が残る。厚さは7cmを測る。胎土は砂粒を多く含み非常に粗い。焼成はやや堅緻で，色調は暗灰色を呈す。

4は西区瓦溜りから出土している。上下は不明であるが鬼瓦の側の一部である。幅7cmの珠文帯に径4cmの珠文をならべ，外に幅2.8cm，高さ2cmの周縁がめぐる。厚さは5.5cmを測る。表面および側面はナデにより整形される。裏面は糸切り痕が残るが，端から5.5cmのところから内に向って篦により深く刳りとられている。胎土には砂粒を多く含み粗い。焼成は堅緻で，全体に暗灰色を呈す。

雁振瓦（第22図）

棟の最上を葺く瓦である。玉縁部を含む約$\frac{1}{2}$の破片である。現存長32.5cm，玉縁長3.8cm，厚さ約3cmを測る。凸面は縄目叩きののち横方向のナデ整形を施す。凹面は糸切り痕をよくとどめ，その上に玉縁端まで続く布目痕を残し，さらに一部に篦削りを施す。凹面の端縁は大きく面取りされている。玉縁部凸面は縦方向の篦削りにより整形する。胎土には砂粒を含むが比較的精良で，焼成は堅緻である。色調は暗灰色を呈す。今回の調査区では10点出土している。

文字瓦（第23図　図版15）

今回の調査では西区瓦堆積層中より1点のみ発見された。軒平瓦12と同文異笵の軒平瓦の凹面中央に書かれている。文字の一部がちょうど割れ口にかかっているため明確ではないが，『大』ないしは『天』と読める。文字は篦先状の鋭い工具により描かれており，書き順は左下方向のはね→右下方向のはね→よこ一文字の順である。

Ⅱ　土器類（第24図～26図，図版17）

土師質土器，須恵器，陶磁器等がみられる。土師質土器は椀と小皿が中心である。須恵器はいずれも甕の胴部の小片である。陶磁器には青磁小皿や備前焼・染付等がみられる。これらの土器は，ほとんどが西区より出土しており，おおむね瓦溜り，瓦堆積層，南トレンチ最深部に大別することができる。

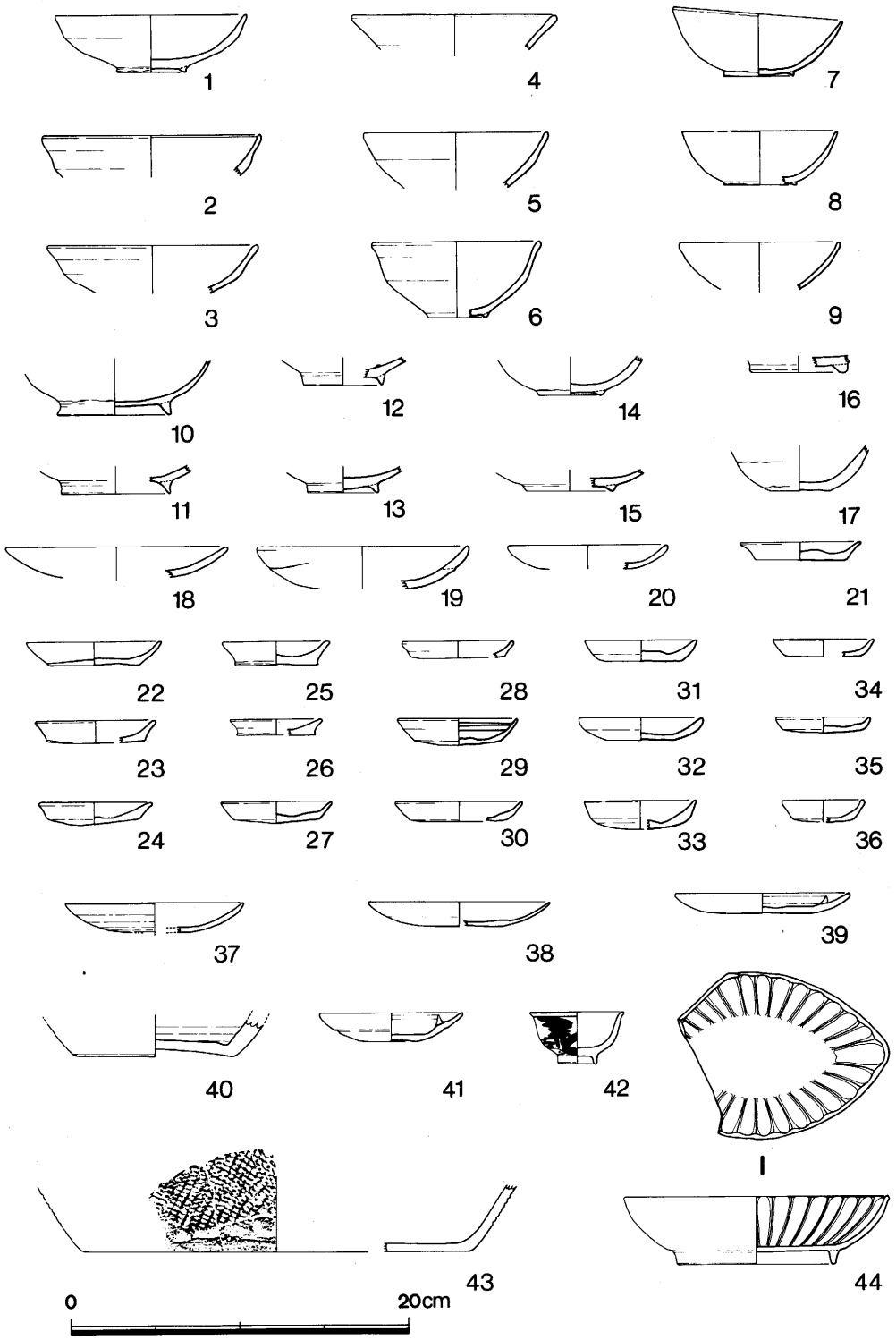
西区瓦溜り出土の土器（24図）

土師質の椀1～17，小皿18～36，備前焼の灯明皿37～39，陶器灯明皿41，染付小杯42，および瓦質の甕底部43などがみられる。

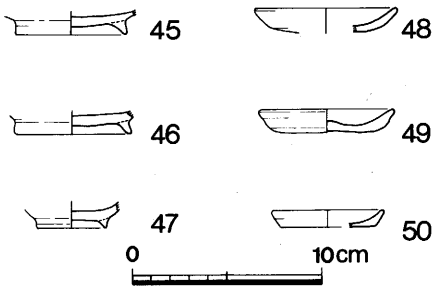
土師質椀には，底部からゆるやかに立ち上がって体部で屈曲してやや外反ぎみに口縁部に至り，外面には鈍い稜線をもち口縁端をやや肥厚させる口径が10.1㎝～13.0㎝のもの1～6と，底部からゆるやかに内湾して斜め上方に立ち上がり，口縁部は丸くおさめる口径9.2㎝～10.2㎝のもの7～9とがある。外面に鈍い稜線をもつものに比べ，稜をもたないものの方が全体に口縁部の径は小さい。底部はいずれも貼り付け高台でほとんどが断面三角形をなすが，断面が台形をなし面をもつもの16もある。また17ははっきりとした高台をもたない椀であるが底部の外周はわずかに厚くなっている。外面には粘土紐の巻き上げ痕がみられる。土師質小皿には口径のやや大きいもの18～20と全体にやや小型のもの21～36がみられる。やや大型のものは口径9.5㎝～13.2㎝を測り，ゆるやかに内湾しながらのび，口縁端は丸くおさめている。19には粘土紐の巻き上げ痕がみられる。色調はいずれも赤褐色を呈し，焼成はやや軟質である。やや小型のものは口径4.9㎝～8.0㎝を測り，短く斜め上方に外反ぎみに立ち上がるもの21～28と内湾ぎみに短く立ち上がるもの29～36とがある。口縁端部はいずれも丸く仕上げている。器表は内外面とも回転ナデを施す。底部外面は回転篦切りの痕跡を残すものが多い。37～39は備前焼の灯明皿である。非常に薄く，底部外面に回転篦削りを施すもの37・38と，内側に立ち上がりをもつもの39がある。いずれも口縁部の内面には煤が付着している。40は備前焼の壷の底部である。外面は赤褐色に光沢をおび，内面はロクロ目がみられる。底部外面には「日」の窯印が押されている。41は陶器の灯明皿で内側に立ち上がりがみられる。42は染付の小杯で，胎土は白色磁土である。43は瓦質の甕の底部である。全体に薄手のもので，体部外面は細かい格子目叩きが施され，胴部内面および底部内面は回転ナデにより仕上げている。内外面とも黒灰色を呈し焼成はやや軟質である。44は青磁の舟形状を呈す皿で，内面には弁状の文様を施している。口縁部は内湾ぎみに立ち上がり，端部はやや肥厚して丸くおさめている。釉は淡青灰色を呈し，外底見込みを含め全体にかかっている。

西区瓦堆積層出土の土器（第25図）

土師質の椀・小皿がみられる。土師質椀45～47は底部のみの破片である。高台は貼りつけで断面は三角形を呈すが，46はやや外へふんばっている。土師質小皿48～50は小型のもので底部から短くやや内湾ぎみに立ち上がる。



第24図　西区瓦溜り出土の土器

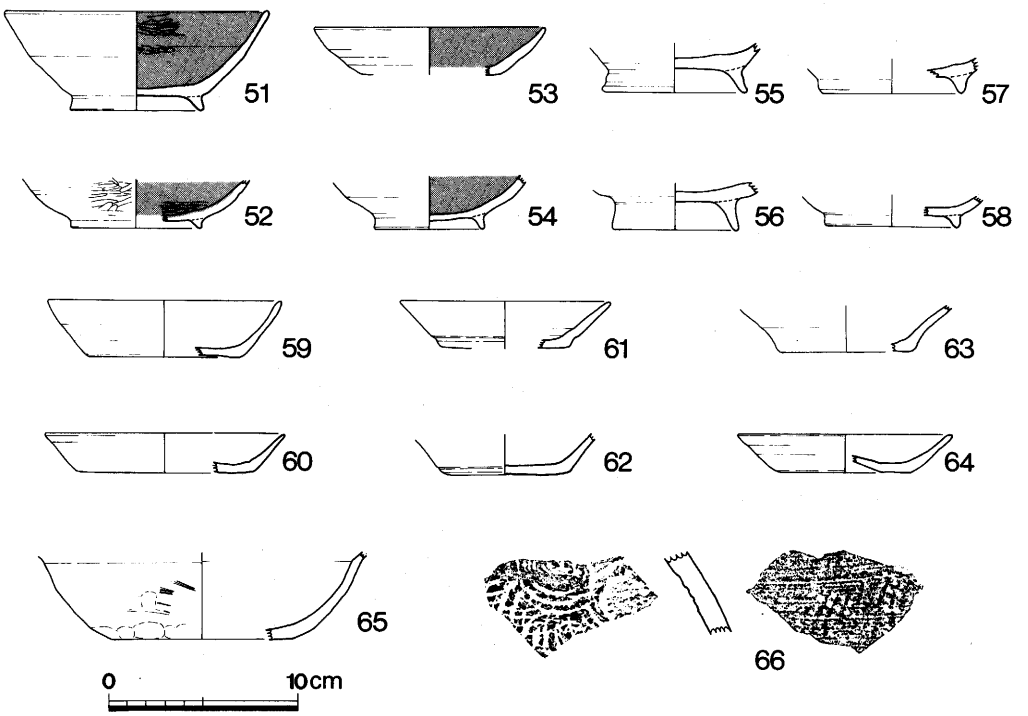


第25図　西区瓦堆積層出土の土器

西区南トレンチ最深部出土の土器（第26図）

層位確認のために掘った西区南トレンチの今回掘り得た最深部の青灰色粘土層から出土した土器である。土師質椀51～58，皿59～64，鉢65および須恵器甕胴部の破片66がみられる。

土師質椀のうち51～54は内面に炭素を吸着させたいわゆる黒色土器である。51は底部からわずかに屈曲しながら斜め上方に立ち上がる深い椀である。口縁部は丸くおさめる。高台は貼り付けでわずかに外側へ広がる。内面はていねいに篦磨きが施される。外面は赤褐色を呈する。52は底部の破片であるが，内外面とも篦磨きがなされる。高台は底く貼り付け高台である。外面は赤褐色を呈する。53・54は内外面ともナデによって調整されている。55・56は高くてしっかりとした貼り付け高台をもつ椀の底部で，内外面ともナデによって調整され，高台端部は丸くおさめる。57・58は低い高台をもつ椀の底部である。59～64はいずれも底部からやや外反ぎみに斜め上方に立ち上がる皿で，口縁端部は丸くおさめている。底部はおおむね平底であるが，64は底部中央付近で弓なりに上げ底となっている。また59もわずかに上げ底ぎみである。



第26図　西区南トレンチ最深部出土の土器

いずれも内外面とも回転ナデを施しており，61・62の底部外面は凹線状に強くナデられている。65は土師質の鉢で，口縁部は欠けているが，底部からゆるやかに湾曲して立ち上がり，口縁付近で内側に稜線をもって屈曲している。体部は荒い刷毛目がみられ，体部下端には指頭圧痕が残る。内面および口縁部付近は回転ナデを施している。66は須恵器の胴部の小片である。外面は格子目叩きののち回転ナデ仕上げ，内面には青海波文が残る。厚さは1.1㎝を測る。

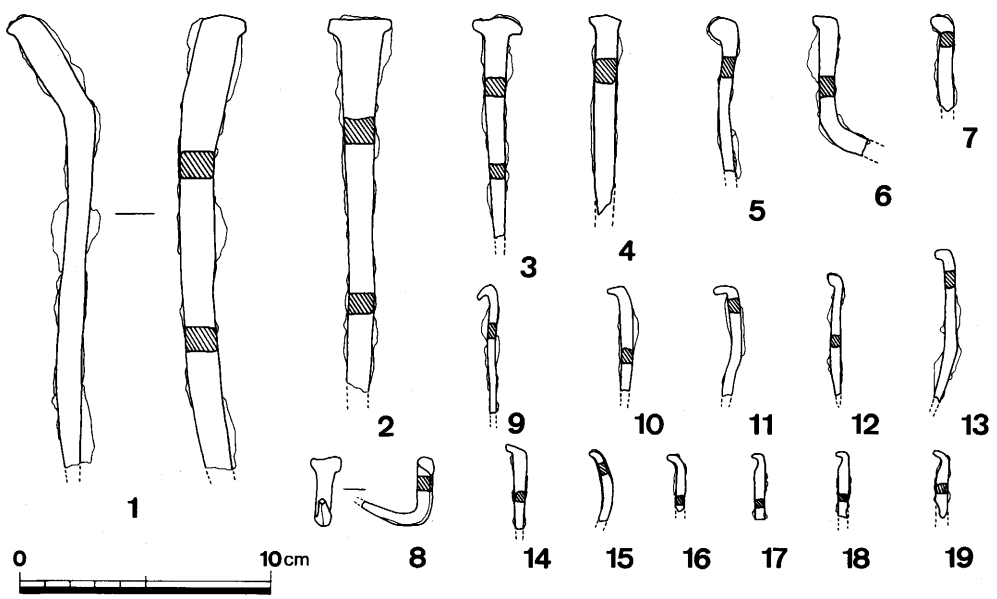
Ⅲ　その他の遺物

鉄釘

出土した鉄釘は約40点ある。このうち大部分は西区瓦溜りから出土しており，西区瓦堆積層からもわずかに検出されている。

釘はいずれも破片のため全長の知れるものはないが，断面はすべて長方形を呈する。大きさによりおおむね3種類に分けることができる。太さ10㎜以上で，長さも15㎝以上を測る大型のもの1・2，太さ約10㎜前後で，長さは約10㎝位の中型のもの3～6，太さは10㎜以下で，長さも10㎝以下の小型のもの7～19の3種類である。形態は頭部が「T」字型のものと「┐」型のものとがあるが，小型の釘には，「┐」型のものが多くみられる。

また軒平瓦1の平瓦部凸面に残っていた釘は，頭部は欠けているものの現存長10.2㎝，太さ10㎜を測り，ここにみられる中型の釘の大きさに相当する。これにより少なくとも長さ10㎜前後の中型の釘は，瓦を止めるための瓦釘に使用されたことがわかる。



第27図　鉄　　釘

註 1. 安養寺所蔵の軒瓦中にみられる。

註 2. 玉井伊三郎『吉備古瓦図譜』第2集　1941年

註 3. 註2と同じ

註 4. 玉井伊三郎『吉備古瓦図譜』第1集　1929年

註 5. 岡山県教委による昭和58年度の山陽自動車道建設に伴う調査で出土している。未発表の資料であるが，県教委正岡睦夫氏の御厚意により実見させていただいた。

註 6. 岡本寛久「泉瓦窯跡・万富東大寺瓦窯跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』37　岡山県教育委員会　1980年

第3表　出土土器観察表

挿図番号	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	備考
1	土師質椀	口径 11.4 器高 3.4 高台径 4.1 高台高 0.4	底部からやゝ横へ広がりぎみに上方へのび，体部でゆるく屈曲する。口縁端部は丸くおさめる。内・外面ともナデによる調整。高台は貼りつけ。底の浅い椀。	胎土は精良。 内・外面茶灰色，断面は黒灰色。 焼成は良好。
2		口径 13.0	体部外面で肥厚して稜線をもち，やゝ内湾ぎみに口縁部にいたる。端部はやゝ尖りぎみに丸くおさめる。内外面とも回転ナデを施す。	砂粒を多く含む。 内・外面は乳褐色，断面は黒灰色。 焼成は良好。
3		口径 12.5	体部でゆるやかに屈曲する。口縁端部はやゝ肥厚して丸くおさめる。内面および外面上半は回転ナデ，外面下半はナデによる仕上げ。	細砂を含む。 全体に乳灰色～乳褐色。 焼成は良好堅緻。
4		口径 12.2	やゝ外反ぎみに口縁にいたる。端部は肥厚し，丸くおさめる。内外面とも回転ナデ。	細砂を含む。 全体に明乳灰色。 焼成は良好堅緻。
5		口径 11.0	体部でゆるやかに屈曲し，口縁部にいたる。端部はやや肥厚して丸くおさめる。内外面とも回転ナデを施す。	細砂を含む。 全体に暗乳褐色 焼成は良好。
6		口径 10.1 器高 4.5 高台径 3.5 高台高 0.3	底部からゆるやかに立ち上がり，体部でやゝ屈曲してやゝ外反ぎみに口縁部にいたる。口縁端部はやゝ肥厚し，丸くおさめる。外面には鈍い稜線をもつ。内面は回転ナデ，外面は回転ナデのゝち荒いナデ仕上げ。高台は貼りつけで，断面は先の丸い三角形を呈す。	細砂を含む。 内・外面乳灰色，断面は淡灰色。 焼成は良好。
7		口径 10.2 器高 3.7 高台径 4.2 高台高 0.4	底部から口縁部にかけてゆるやかに内湾して斜め上方へ立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。高台は貼りつけで断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデを施す。	細砂を含む。 全体に淡乳褐色。 焼成は良好。
8		口径 9.2 器高 3.2 高台径 4.3 高台高 0.2	底部からゆるやかに内湾して口縁部にいたる。口縁端はやや尖りぎみに丸くおさめる。高台は貼りつけで断面はつぶれた三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整。	細砂を含む。 内・外面とも乳褐色，断面は一部灰黒色。焼成は良好。
9		口径 9.6	ゆるやかに内湾して斜め上方に立ち上がり，口縁端部は丸くおさめる。内・外面とも回転ナデ調整。	1～3㎜の砂粒を多く含む。 全体に暗乳褐色。 焼成は良好。
10		高台径 6.8 高台高 0.8	底部から内湾して斜め上方へのびる。高台は高くしっかりしている。内外面とも回転ナデを施す。	2㎜位の砂粒を多く含む。 全体に淡黄褐色。 焼成はやゝ軟質。
11		高台径 6.5 高台高 0.8	高台は貼りつけで，先端はやゝ尖っている。内外面とも回転ナデを施す。	細砂を含む。 全体に明乳灰色。 焼成は良好。
12		高台径 4.7 高台高 0.7	高台は貼りつけで，断面は三角形を呈す。内面に重ね焼きの痕跡が残る。内外面とも回転ナデ。	胎土は精良。 全体に暗黄褐色。 焼成は良好。
13		高台径 4.3 高台高 0.6	高台は貼りつけで，断面は三角形を呈し，つくりは荒い。内・外面は回転ナデを施し，高台部見込みはナデを施す。	細砂を含む。 内・外面乳灰色，断面淡黒灰色。 焼成は良好。
14		高台径 4.0 高台高 0.3	底部から湾曲して斜め上方へのびる。高台は貼りつけで，稚拙なもの。内外面とも回転ナデを施す。	細砂を含む。 内・外面暗乳灰色，断面淡黒灰色。 焼成はやゝ軟質。
15		高台径 5.2 高台高 0.4	高台は貼りつけで，断面は三角形を呈する。内・外面とも回転ナデを施す。	細砂を含む。 内・外面暗乳灰色。断面黒灰色。 焼成は良好。

図番号	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	備考
16	土師質椀	高台径 5.8 高台高 0.5	高台は貼りつけで，断面は方形を呈する。高台部はナデ仕上げ。	細砂を含む 内面暗褐色，外面乳灰色，断面黒灰色。 焼成はやゝ軟質。
17		底部径 3.6	高台をもたない椀である。底部外周はわずかに肥厚する。体部外面に粘土紐巻き上げ痕が残る。剥落がはげしく調整は不明。	細砂を含む。 全体に乳灰色。 焼成はやゝ軟質。
18	土師質小皿	口径 13.2	ゆるやかに内湾して口縁部にいたる。端部は丸く仕上げる。内外面とも回転ナデを施す。やゝ大型のものである。	胎土は精良。 全体に赤褐色。 焼成はやゝ軟質。
19		口径 12.6	やゝ大型のものである。ゆるやかに湾曲して口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。体部に粘土紐巻き上げ痕が残る。内外面とも回転ナデを施す。	胎土は精良。 全体に赤褐色。 焼成はやゝ軟質
20		口径 9.5	ゆるやかに内湾して口縁にいたり，端部は丸くおさめる。内外面とも回転ナデを施す。	胎土は精良。 全体に赤褐色。 焼成は軟質。
21		口径 7.2 器高 1.1 底部径 5.4	底部は平底で厚い。やゝ外反ぎみに短く斜め上方へのびる。底部外面は篦切りのゝちナデ。口縁部は内外面とも回転ナデ。底部内面はナデによる調整。	細砂を含む。 全体に暗茶灰色。 焼成はやゝ軟質。
22		口径 8.0 器高 1.4 底部径 5.3	底部よりやゝ内湾して短く斜め上方にのび，口縁にいたる。端部は丸くおさめる。底部外面は篦切り痕が残る。口縁部は内外面とも回転ナデ。底部内面はナデを施す。	細砂を含む。 全体に乳褐色。 焼成は良好。
23		口径 7.2 器高 1.3 底部径 5.8	短くやゝ外反ぎみに口縁にいたる。端部は丸くおさめる。底は平底である。底部外面はナデ，口縁部と内面全体は回転ナデを施す。	細砂を含む。 全体に暗乳灰色。 焼成はやゝ軟質。
24		口径 6.6 器高 1.3 底部径 5.1	底部より短く斜め上方へのび，端部は丸くおさめる。底部中央はやゝふくらみをもつ。底部外面はナデ仕上げ。口縁部および内面全体は回転ナデを施す。	細砂を含む。 全体に茶褐色。 焼成は良好。
25		口径 6.4 器高 1.4 底部径 4.9	平底の底部よりやゝ外反ぎみにのび，端部はやゝ肥厚して丸くおさめる。底部外面は篦切り痕を残す。口縁部および内面は回転ナデを施す。	細砂を含む。 全体に乳褐色。 焼成は良好。
26		口径 5.5 器高 0.9 底部径 4.6	器壁は厚く，斜め上方へのび，端部は丸くおさめる。底部外面は篦切り痕を残し，口縁部から内面全体にかけては回転ナデを施す。	砂粒を含む。 全体に暗乳褐色。 焼成は良好。
27		口径 6.8 器高 1.4 底部径 5.4	底部より斜め上方にのび口縁端部はやや外反して丸くおさめる。底部外面は篦切りのゝちナデ仕上げ。口縁部から内面にかけては回転ナデを施す。底部はやゝふくらみをもつ。	胎土は精良。 全体に暗茶灰色。 焼成は良好。
28		口径 6.7 器高 1.0 底部径 5.6	やゝ内湾ぎみに口縁部にいたり，丸くおさめる。全体に回転ナデを施す。	細砂を含む。 全体に乳灰色。 焼成は良好。
29		口径 7.2 器高 1.6 底部径 5.1	器壁はやゝ薄く，内湾ぎみにのび端部は丸くおさめる。内面に篦描きの沈線がみられる。底部外面には篦切り痕が残る。口縁部外面と内面全体は回転ナデを施す。	細砂を含む。 全体に暗茶灰色。 焼成は良好。
30		口径 7.6 器高 1.2 底部径 5.7	底部より斜め上方にわずかに屈曲して口縁にいたる。端部は丸くおさめる。底部外面には，篦切り痕が残る。口縁部と内面は回転ナデを施す。	砂粒を含む 全体に暗乳灰色 焼成はやゝ軟質。
31		口径 6.6 器高 1.3 底部径 4.7	全体に器壁は厚く，やゝ内湾ぎみに口縁にいたり，端部は丸くおさめる。口縁内外面は強い回転ナデ，底部内外面はナデ調整を施す。	胎土は精良。 内・外面茶黒色，断面茶褐色。 焼成はやゝ軟質。
32		口径 7.4 器高 1.3 底部径 4.0	底部よりゆるやかに内湾して口縁にいたり，端部は丸くおさめる。底部外面はナデによる調整。口縁部および内面は回転ナデ。	胎土は精良。 全体に暗赤褐色。 焼成は良好。
33		口径 6.7 器高 1.7 底部径 5.3	口縁部は器壁が薄くなって斜め上方へ立ち上がり，端部は丸く仕上げる。底部外面はナデでゆるやかにまるく仕上げる。口縁部および内面は回転ナデを施す。	胎土は精良。 全体に赤褐色。 焼成は良好。
34		口径 6.0 器高 1.0 底部径 4.4	口縁部はやゝ内湾して斜め上方へのび，端部は丸く仕上げる。底部は平底である。底部外面はナデによる調整。口縁部および内面は回転ナデを施す。	胎土は精良。 内外面赤褐色。断面暗茶褐色。 焼成はやゝ軟質。
35		口径 5.6 器高 0.9 底部径 4.8	口縁部は短く斜め上方へ立ち上がる。内面は回転ナデにより凹凸が目立つ。底部外面はナデによる調整。	胎土は精良。 全体に暗茶褐色。 焼成はやゝ軟質。

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	備考
36	土師質小皿	口径 4.9 器高 1.3 底部径 3.6	全体に小型で，口縁部は斜め上方へ立ち上がり，端部は肥厚して丸くおさめる。底部外面はナデによる調整。口縁部および内面は回転ナデを施す。	胎土は精良。 全体に茶褐色。 焼成は良好。
37	備前焼灯明皿	口径 10.6 器高 1.3 底部径 5.6	器壁は薄くつくられており，口縁部はやゝ内湾ぎみに張り出す。体部下半から底部にかけての外面は回転篦削り，口縁部から内面全体は回転ナデを施す。口縁端部には煤が付着する。	胎土は精良。 全体に暗茶褐色。 焼成は良好堅緻。
38		口径 10.8 器高 1.5 底部径 5.8	器壁はきわめて薄く，口縁部は内湾して張り出す。体部外面下半から底部外面にかけては回転篦削りを施す。口縁部と内面全体は回転ナデ。口縁端部には煤が付着する。	胎土は精良。 全体に暗茶色。 焼成は良好堅緻。
39		口径 10.4 器高 1.2 底部径 6.2	底部から短くゆるやかに内湾して口縁部にいたり，端部は丸くおさめる。内面に高さ4㎜の立ち上がりをもち，3ケ所の切れ目を入れている。底部外面から体部外面にかけて回転篦削り，内面は回転ナデを施す。	細砂を含む。 全体に暗茶褐色。 焼成は良好。
40	備前焼壷	底部径 9.2	底部のみの破片。底部は上げ底になっている。体部内面にはロクロ目が残る。底部下面に窯印が押印されている。	胎土は精良。 外面赤褐色，内面淡茶褐色。 焼成は良好。
41	陶器灯明皿	口径 8.5 器高 1.7 底部径 3.2	底部より斜め上方に屈曲してのび，口縁にいたる。内面に高さ6㎜の立ち上がりをもち，1ケ所切れ目をいれる。口縁部外面から内面全体にかけて灰色の釉をかける。底部外面から体部外面にかけて回転篦削りを施す。	胎土は精良。 全体に灰色を呈する。 焼成は良好。
42	染付小杯	口径 5.6 器高 3.1 底部径 2.3	底部より内湾して立ち上がり，口縁部は外反する。胎土は白色磁土で，図柄には家，松，鳥などが描かれる。上釉は青味を帯びた透明釉である。	胎土は精良。 白色，呉須は濃青色。 焼成は良好。
43	瓦質甕	底部径 23.0	全体に薄手で，底部から屈曲して斜め上方にのびる胴部をもつ。胴部外面は細かな格子目叩きを施し，内面は回転ナデを施す。胴部下端から底部にかけてはナデによる整形。	細砂を含む。 内外面とも黒灰色，断面は灰色～黒灰色。 焼成はやゝ軟質。
44	青磁皿	口径 15.8～9.9 器高 4.0 高台径 9.4～4.9 高台高 0.8	舟形状を呈し，内面に弁状の文様を施す。高台は貼りつけで，端部は面をもつ。底部からゆるやかに内湾して立ち上がり，端部やゝ肥厚させて丸くおさめる。釉は淡青灰色で全体にかかる。	胎土は精良。 全体に淡青灰色。 焼成は良好堅緻。
45	土師質椀	高台径 5.9 高台高 0.7	高台は貼りつけで先端は丸くおさめる。底部内外面はナデを施し，高台部外面は回転ナデを施す。底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。	細砂を含む。 全体に暗乳灰色。 焼成は良好。
46		高台径 6.2 高台高 0.7	高台は貼りつけで，先端まで太く丸く仕上げる。器表が荒れているため調整は不明。	細砂を含む。 全体に淡乳灰色。 焼成は軟質。
47		高台径 3.8 高台高 0.6	全体にやゝ小型の底部，高台は貼りつけで断面三角形をなす。底部内外面はナデ仕上げ。高台部は回転ナデを施す。	細砂を含む。 内・外面明乳灰色，断面黒灰色。 焼成は良好。
48	土師質小皿	口径 7.6	底部よりやゝ内湾して口縁にいたり，端部は丸くおさめる。口縁部外面および内面全体は回転ナデ，底部外面はナデを施す。	胎土は精良。 内外面赤褐色，断面暗黄褐色。 焼成はやゝ軟質。
49		口径 7.2 器高 1.3 底部径 4.2	全体に器壁はやゝ厚く，底部よりやゝ外反ぎみに短く斜め上方へ立ち上がり，端部は丸く仕上げる。口縁部外面から内面にかけては回転ナデ，底部外面はナデを施す。	砂粒を多く含む。 全体に淡乳灰色。 焼成は良好。
50		口径 6.0 器高 0.9 底部径 5.0	底部は平底で，内湾ぎみに短く立ち上がり端部は丸くおさめる。口縁部外面から内面全体は回転ナデ，底部外面はナデを施す。	胎土は精良。 全体に赤褐色。 焼成は良好。
51	土師質椀	口径 14.1 器高 5.3 高台径 7.1 高台高 0.8	底部よりやゝ内湾ぎみに斜め上方に立ち上がり，体部でわずかに屈曲する。口縁端はやゝ肥厚して丸くおさめる。高台は貼りつけで，先端は丸く仕上げる。内面はていねいな篦磨きのゝちナデを施す。体部外面は回転ナデ，底部外面はナデを施す。内面は全体に炭素を吸着させ，黒色を呈す。	細砂を含む。 内面黒色，外断面赤褐色。 焼成やや軟質。
52		高台径 7.0 高台高 0.6	底部より内湾して斜め上方へのびる。高台は貼りつけで断面は三角形を呈す。内面は篦磨きのゝち一部ナデを施す。体部外面は荒い篦磨きを施す。底部外面は回転ナデ仕上げ内面は全体に炭素を吸着させ黒色を呈す。	細砂を含む。 内面黒色，外断面乳赤褐色。 焼成はやゝ軟質。
53		口径 12.3	底部より屈曲して斜め上方へのび，端部はやゝ内湾して丸くおさめる。体部外面から内面全体は回転ナデ，体部外面下半はナデを施す。内面は全体に黒色を呈し，炭素を吸着させる。	細砂を含む。 内面黒色，外面赤褐色，断面茶褐色。 焼成は良好。

挿図番号	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	備考
54	土師質椀	高台径 5.8 高台高 0.9	底部より内湾して斜め上方へのびる。高台は貼りつけで先端は丸くおさめる。内面はていねいなナデ仕上げ。体部外面は回転ナデ底部外面はナデを施す。内面は全体に炭素を吸着させ，黒色を呈する。	砂粒を含む。 内面黒色，外断面乳茶褐色。 焼成は良好。
55		高台径 7.8 高台高 1.2	高台は貼りつけで，やゝ屈曲して広がる高くしっかりした高台をもつ。全体に回転ナデを施す。	砂粒を含む。 内外面乳灰色，断面淡灰色。 焼成は良好。
56		高台径 6.7 高台高 1.6	高台は貼りつけで，高くしっかりしており先端は丸くおさめる。全体に回転ナデを施す。	砂粒を含む。 内外面乳白色，断面淡灰色。 焼成はやゝ軟質。
57		高台径 7.2 高台高 1.1	高台は貼りつけで，断面三角形を呈し，先端は丸くおさめる。外面は回転ナデ，内面はナデを施す。	細砂を含む。 全体に赤褐色。 焼成は良好。
58		高台径 7.0 高台高 0.7	高台は貼りつけで，先端は丸くおさめる。外面は回転ナデ，内面はナデを施す。	砂粒を含む。 内面赤褐色，外断面乳灰色。 焼成はやゝ軟質。
59	土師質皿	口径 12.4 器高 3.0 底部径 8.0	底部より斜め上方に立ち上がり，口縁部付近でやゝ内湾する。端部はやゝ肥厚して丸くおさめる。やゝ深めの皿で，底部はわずかに上げ底ぎみである。体部外面から内面全体にかけては回転ナデを施す。	細砂を含む。 全体に明赤褐色。 焼成は良好。
60		口径 12.8 器高 2.1 底部径 9.4	底部よりやゝ外反ぎみに斜め上方へのび，口縁部は薄くなり，丸くおさめる。体部外面から内面全体にかけては回転ナデを施し，底部外面は篦切りのゝちナデ仕上げを施す。底は平底である。	砂粒を含む。 内面赤褐色，外断面暗乳褐色。 焼成は良好。
61		口径 11.2 器高 2.5 底部径 6.9	体部から口縁部にかけては斜め上方へほぼ直線的にのびる。体部下端は強い回転ナデにより凹線状に屈曲する。口縁端部は丸く仕上げる。底部は平底である。体部外面および内面全体は回転ナデを施す。底部外面はナデによる仕上げ。	砂粒を含む。 全体に明赤褐色。 焼成はやゝ軟質。
62		底部径 6.8	底部からやゝ外反ぎみに立ち上がる。体部内外面は回転ナデを施し，外面下端は凹線状に段をなす。底部は平底で，内外面ともナデを施す。	細砂を含む。 全体に乳褐色～赤褐色。 焼成は良好。
63		底部径 7.0	平底の底部から外反して斜め上方へ立ち上がる。全体に回転ナデを施す。	胎土は精良。 内・外面暗乳灰色，断面淡黒灰色。 焼成は良好。
64		口径 11.4 器高 2.1 底部径 7.0	体部から口縁部にかけてはやゝ外反ぎみに斜め上方へのび端部はやゝ肥厚して丸くおさめる。底部は中央よりで上げ底になる。体部外面から内面全体にかけては，回転ナデを施す。底部外面は篦切り痕が残る。	砂粒を含む。 全体に暗乳褐色～赤褐色。 焼成は良好。
65	土師質鉢	底部径 9.6	底部よりゆるやかに内湾して立ち上がる。口縁部は欠落しているが，口縁部内面は外に屈曲して稜線をもつ。体部外面は回転ナデのゝち，荒い刷毛目を施し，下端は指頭圧痕が残る。体部内面は回転ナデを施す。	砂粒を含む。 全体に暗茶褐色。 焼成はやゝ軟質。
66	須恵器甕	厚さ 1.1	胴部の小片である。外面は格子目叩きのゝち回転ナデを施す。内面は青海波文が残る。	細砂を含む。 内外面暗灰色，断面暗紫灰色。 焼成は良好。

第4章　ま　と　め

岡山県下における古代寺院の調査・研究は，近年の発掘調査の増加とゝもに多くの成果があげられている。しかしながら，平安時代の寺院の調査例はきわめて少なく，奈良時代を中心とする寺院の調査において断片的に平安時代の瓦が検出される程度である。[1] 浅原寺においても，先学により研究がなされているものの，その実態は未だ明らかになっているとはいいがたい。

今回の浅原寺跡に対する調査は，[2] 安養寺会館建設にともなう事前調査で，面積も約70㎡ときわめて小規模なものであったが，礎石や石積壇などの遺構をはじめとして，瓦溜りおよび瓦堆積層からは大量の瓦が検出された。

以下これらの遺構・遺物について，推測の域を出ないが，若干の補足を加えまとめとしたい。

遺構について

今回の調査で検出された遺構としては，3個の礎石，瓦溜り，石積壇とこれに伴うと思われる溝・敷石遺構・円形土坑，そして遺構そのものとしてはとらえられなかったが，瓦堆積層が検出された。さらに西区の南・北トレンチでみられたように，谷状の堆積が西に向ってかなりの傾斜で落ちこんでいるのが確認された。

まず，これらの遺構の時期的な前後関係については，最も先行するものとして谷状の堆積があげられる。調査区周辺を地形図でみると，現在の安養寺の伽藍は，福山山頂からのびる支脈の一つが，寺の背後で南に向って2つに分かれた尾根のちょうど間にはさまれた位置にあることがわかる。現在の阿弥陀堂や本堂などの伽藍が建っている場所は平坦で，庫裏の東，今回の調査区あたりからわずかに高くなっている。

一方，この平坦地の北の山側は大きく削平されており，山側を削平し谷を埋めながら平坦地を次第に広げていったことをうかがわせる。このように考えると，今回西区南・北トレンチで確認された西に向って傾斜する土層は，平坦地を拡張するために谷を埋めていった土が谷に向って傾斜しているものと解することができる。そして，それは南トレンチの最深部で出土した土器などから，おそらく平安時代後期頃に埋められ，伽藍の敷地を拡張していったものと考えられる。

谷が埋められてからのち，その上に大型の礎石をもつ建物が建てられる。すなわち西区石積壇東に残されていた2個の礎石である。今回の調査区は非常に小規模であったため，この2つの礎石が同一の建物に使われていたものか，あるいはどちらの方向に広がる建物であるのかは，必ずしも明確ではないが，礎石の規模や上面での高さがほぼ等しいことなどから，これらは同じ建物の礎石であると考えられ，そして，東区で礎石あるいは礎石抜き取り穴等の遺構が全く検出されなかったことから，建物は西方に広がっていたものではなかったかと推測される。

一方，これらの礎石の西側，石積壇の下には軒瓦をはじめとして多くの瓦片が含まれる瓦堆積層が広がっている。この瓦堆積層と前述の礎石との前後関係については，南トレンチでみたように互いに石積壇の溝によって切られており，両者の直接の切り合い関係は不明である。しかしながら瓦堆積層中の瓦片は，軒平瓦1にみられるように瓦釘がついたまゝ残っているなど残存状況が良好なものが多いことを考え合わせると，2次的に他から持ってきて廃棄したとは考えにくゝ，東側の礎石の建物が廃絶した時の瓦が堆積したものかも知れない。これらの遺構の時期については，出土瓦・土器等から鎌倉末から室町にかけての頃と考えられるが，これを直接『備中誌』の中の福山合戦による伽藍の焼失と結びつけることは，同誌の中に「是より再興昔の様にならね共　度々造立有」とあるように，今回の調査のみで限定することは困難である。

次に石積壇と溝，そして敷石遺構・円形土拡については，一連の遺構と考えられる。このうち敷石遺構の東に接してある円形土拡中からは，桟瓦が検出されており，江戸時代に入ってから，現在の安養寺の伽藍が建てられる享保二年（1717年）以前の遺構で，庫裏の一部ではないかと考えられる。そしてこれらの遺構を覆うようにある瓦溜りは，享保二年に現在の安養寺の伽藍を建てるに際して，整地の意味を兼ねて一時に瓦を廃棄したものではないだろうか。

このように今回の調査では，浅原寺の創建に直接関係するような遺構は検出されなかった。しかしながら，安養寺経塚群の第3経塚から出土した瓦経願文中にみられるように，すくなくとも11世紀後半頃には，近くに安養寺と称する寺が存在したことが考えられ，そして安養寺が後の記録に出てくるように浅原寺の子院であったとすれば，浅原寺の本坊があったこの地にすでに何らかの伽藍のあったことは充分に考えられる。また，現在安養寺に所蔵されている毘沙門天や吉祥天の仏像群がいずれも12世紀頃につくられたものであること，あるいは『源平盛衰記』[3]に記されているように備前に配流になった藤原成親が治承元年（1177年）頃にこの寺で出家受戒したことなどを考え合わせると，浅原寺は平安時代後期頃を中心に最も隆盛を誇っていたものと考えられる。

遺物について

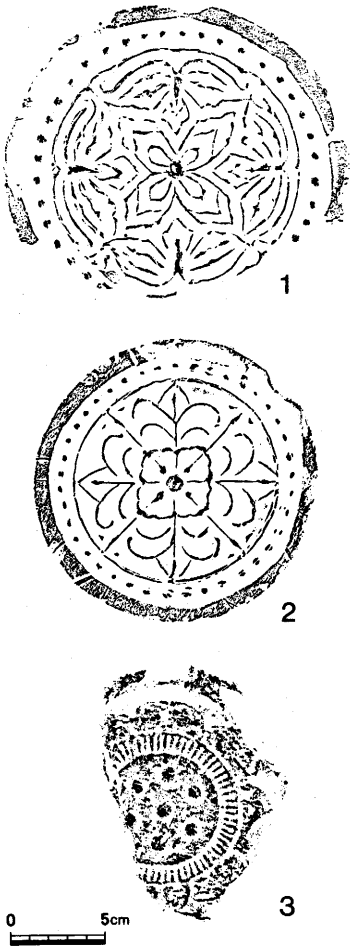
遺物については第3章に示したように，西区瓦溜りと瓦堆積層から軒瓦を含む大量の瓦類が出土し，その他土師質土器や鉄釘などがみられた。

出土遺物の中で，まず軒瓦については，軒丸瓦12種，軒平瓦18種があり，これらのうち以前から紹介されていたもの[4]（軒丸瓦**1·3·4·5**，軒平瓦**1·3·6·11·12·17**）も含まれるが，既往の資料には未見であった軒瓦も多くみられた。

岡山県内においては，平安時代の寺院跡の発掘例が乏しく，軒瓦について同笵あるいは類似する文様構成をもつものを検索するのはなかなか困難である。しかしながら今回出土した中でわずかではあるが平安京内で出土している軒瓦と同文あるいは，類似した文様をもっているものがある。まずそれらについてみてみる。

半截花文を中心飾りとする軒平瓦**2**ないし**3**については京都の得長寿院跡から同文のものが

出土している。これが軒平瓦2であるのか3であるのかは，瓦当脇区[5]部分まで残っていないので拓本でみるかぎりは，どちらであるのか不明である。得長寿院は京都市左京区岡崎のいわゆる六勝寺に隣接しており，延勝寺の北，尊勝寺の西方にあたる位置にあったとされる。『中右記』によれば長承元年（1132年）三月九日「今日白河千體[6]觀音堂供養習禮，堂備前権守造営也，中央間安置丈六正觀音像・・・」とあるように得長寿院千體觀音堂は1132年に造られ，堂は備前権守が造営したとされている。しかし，この得長寿院は『山槐記』の元暦二年（1185年）七月九日の記事に「午剋地震，[7]（中略）聞得長壽院千體正觀音鳥羽院御願顚倒云々」とあり，また『吉記』にも同様のことが記されており，1185年には地震により[8]堂は倒壊したようである。このように得長寿院の存続は12世紀のうちに限定することができる。したがってここから出土しているとされる瓦と同文の軒平瓦2および3はおゝむね12世紀前半～中頃にかけてのものと考えてもよかろう。



第28図　安養寺所蔵の軒丸瓦拓影

この軒平瓦に対応する軒丸瓦については，今回の出土例の中ではみあたらないが，「岡山市神力寺跡（備前一ノ宮神宮寺），賞田廃寺や総社市備中国分寺あるいは備中安養寺等で出土しているいわゆる新羅系の軒丸瓦が平安宮跡や白河の得長寿院跡から出土したものとよく似ており，これらが備前国内の瓦窯で生産されたものと推定される。」[9]という指摘がある。ここでいう新羅系の軒丸瓦とは文献中には図示されていないが，おそらく第28図に示した安養寺所蔵の軒丸瓦のうちの2にあたるものと考えられる。そのであるとすると，軒丸瓦2・3と第28図2の宝相華軒丸瓦とも同じ得長寿院跡から出土し，文様の表出の方法あるいは胎土なども類似していることから，これらをセットとしてとらえてもよいのではなかろうか。

次に，主茎の先端が蕨手状に分岐する唐草文をもつ軒平瓦5と同様のモチーフをもつものが，平安宮民部省跡から出土している。この瓦は瓦当右半部のみの破片で中央部分は不明であるが，11世紀末から12世紀前半頃の[10]ものとされている。また岡山県内でも軒平瓦5と酷似する例が知られている。御津郡馬屋下村福谷（現岡山市[11]一宮町）の木蔵神社出土の軒平瓦である。これは軒平瓦5とほとんど同じ文様構成をもつが，第1単位の上方に反転する蕨手がみ[12]られないものである。

このほかの軒瓦については，時期的に明らかなものはないが，文様の構成等から，軒丸瓦1

および軒平瓦1などは，今回出土の軒瓦の中では最も古式に属するものと思われ，先にあげた2例よりは若干先行するものかも知れない。

また軒丸瓦2～5，軒平瓦6～12については，おゝむね平安時代末から鎌倉時代初め頃のものと思われる。このうち軒平瓦7～11は半截花文を中心飾りとし，唐草を左右に反転させたものであるが，このようなモチーフをもつものは平安京内で多く出土しており，おそくとも11世紀後半までに讃岐系瓦屋で出現し，12世紀前半に播磨系瓦屋でも採用されており，これらの瓦当文様の系譜は鎌倉時代にも受け継がれるという指摘がなされている。軒平瓦7～11に類する軒平瓦は県内の寺院あるいは窯跡からの発見例をみないが，讃岐系[13]・播磨系瓦屋にみられるものとも製作技法等において若干異なるようである。

軒丸瓦4・5については，剣頭文状の花弁を四葉配[14]するもので，これに類似するものが，総社市新山廃寺から出土している。文様はやゝ硬化しているがよく似たモチーフをもっている。新山寺は標高400mの山上にあり[15]，浅原寺と同様平安時代から中世にかけて栄えた寺であるが，出土瓦等についてはわずかに知られているのみである[16]。

軒丸瓦7～12はいずれも右巻の三巴文をもつものである。軒丸瓦8などは長くのびた尾をもつが平安時代まで遡り得るものではなかろう。

また軒平瓦13の平瓦部凸面には，細かい格子目叩きが施されているが，これはいわゆる亀山焼の窯跡から発見される瓦や甕に施された叩き文様に共通したものがみられる。亀山焼の瓦についてはなお不明な点が多く，今後の資料の増加をまちたい。

軒丸瓦11・12および軒平瓦16～18については江戸時代に含まれるものと考えられる。

次に浅原寺跡出土の平瓦についてはいずれも一枚づくりのものと考えられ，凸面の叩き目には，無文のものをはじめ，縄目，格子目などがみられた。その中で特異なものとして凸面全体に同心円叩きを施したものがある。これには，薄手で非常に焼きの堅緻な須恵質のものと，厚手でやや焼成のあまいものの2種がみられた。このうち，厚手のものは，軒平瓦11の平瓦部と同様のもので軒平瓦用に作られたものかも知れない。

平瓦に同心円叩きをもつものは各地で知られているが，これには2種類ある。ひとつは，平瓦の凹面の広端近くに横方向に連続して残っているもので，桶巻作りにおいて粘土円筒を桶からはずしたのち広端部の「補足の叩きしめ」として内面に同心円文の当板をあてがってさらに叩きしめたもの。もうひとつは同心円文当板をあきらかに叩板として使用したものとである。

前者には，福岡県大浦2号窯跡[17]・大分県法鏡寺跡・山口県周防国府跡などから出土した瓦があり[18]，後者には東京都瓦尾根瓦窯跡[19]・大分県伊藤田瓦窯跡出土のもの[20]などが知られている[21][22]。

今回出土の同心円叩きをもつ平瓦は，あきらかに当板を叩き板として使用したもので，瓦尾根瓦窯跡・伊藤田瓦窯跡出土のものに近い。

瓦尾根瓦窯跡出土のものは，薄手の瓦で，凸面全体に同心円叩きを施したものと凸面に縄目叩きとともに同心円叩きを施したものがある。これらの瓦を焼いた窯は10世紀前半頃に操業し

たものとされている。[23] 伊藤田瓦窯跡出土のものは，厚さ約1cm程度で須恵質を呈し，凸面全体に同心円叩きが残るものと，一部を擦消し数条の凹線を施したものがみられる。これらは奈良時代のものとされている。[24]

この2例はどちらも窯跡から出土したもので，平瓦に同心円叩きが施されることについて，須恵器工人との深いつながりが指摘されている。今回浅原寺跡から出土した瓦類については，焼かれた窯を知り得るものはないが，わずかに平瓦にみられる格子目叩きが亀山焼の窯跡出土の平瓦と酷似しており，浅原寺跡から出土する瓦の一部が亀山焼の窯で焼かれたものである可能性も考えられる。そうすると外面に格子目叩き，内面に同心円文をもつ甕を特徴とする亀山焼において，あるいは平瓦の製作に際して叩きの原体として同心円文をもつ当板が使われたことも考えられるのではなかろうか。今後の資料の増加を待って検討したい。

今回の調査で出土した土器類については，椀・小皿を中心とする土師質土器が最も多くみられたが，その中で西区南トレンチでは内面に炭素を吸着させた内黒の黒色土器51～54が出土した。51は内面を篦磨きののちナデ，52は内外面とも篦磨き，53・54は内外面ともナデを施している。黒色土器のうち内面にのみ炭素を吸着させるものは，8世紀後半頃からみられ，11世紀前半頃までは存在するとされる。[25] また，少し遠方になるが広島県福山市ザブ遺跡から類似した内面黒色の土師器が，土師質椀・緑釉陶器・灰釉陶器などに伴って出土しており，11世紀頃に比定されている。[26] 今回出土の内面黒色土器についてはなお検討を要するが，おゝむね平安時代後期のものとしてとらえておくにとどめたい。なお，そのほか西区瓦溜りからは，近世の陶磁器に混っていわゆる早島式土器の椀が出土している。

今後の課題

前述のように，今回の調査においても浅原寺について解明されたのはわずかであり，その創建についても知り得るものはなかった。また，平安時代末以降についても決して明らかになったとはいいがたい。

浅原寺周辺の山々には俗に浅原千坊といわれるように多くの寺坊があったことが知られている。実際にどの程度のものであったかは知るよしもないが，『吉備郡誌』によれば字名などから23の寺坊があったことが確認されている。今後，浅原寺のみでなく周辺の寺坊を含めた総合的な調査が必要であろう。

出土瓦については，浅原寺に使われたものと同文の瓦が平安京でも出土していることが確認され，また今回は出土を見なかったが安養寺蔵の単弁八葉蓮華文軒丸瓦（第28図3）は京都円勝寺・広隆寺あるいは讃岐龍燈院・阿波極楽寺等から出土しているものと酷似しているという。平安京への地方窯からの瓦の供給については多くの研究がなされ，讃岐・播磨・丹波などについては，しだいに明らかにされつつある。[27] しかしながら，備前・備中についてはわずかながら在地の寺院で使用された軒瓦と同笵あるいは同文の関係にあるものが平安京内で発見されるということはあるものの，それらへ供給した瓦窯は未だ発見されていない。それらの瓦

窯の発見とともに，中央と地方あるいは地方寺院どうしの瓦の供給関係をまず明らかにすることが急務であろう。

註 1. 大内田廃寺跡の調査等がある。「天神坂遺跡・奥坂遺跡・新屋敷古墳」『岡山県埋蔵文化財調査報告』53 岡山県教育委員会 1983年

註 2. ・藤井駿「倉敷の安養寺について」『岡山春秋』68号 1959年
・『安養寺瓦経の研究』安養寺瓦経の研究刊行委員会 1963年
・永山卯三郎『倉敷市史』 1978年

註 3. 『岡山県の文化財(1)』 岡山県教育委員会 1980年

註 4. ・玉井伊三郎『吉備古瓦図譜』第1輯 1929年・同第2輯 1941年
・永山卯三郎『倉敷市史』 1978年などに紹介されている。

註 5. 奈良国立文化財研究所上原真人氏の御教示による。

註 6. 「中右記」『史料大成』13巻

註 7. 「山槐記」『史料大成』21巻

註 8. 「吉記」『史料大成』23巻

註 9. 高橋美久二「平安時代後期の地方瓦窯と京都への供給」『京都考古』12号 1975年

註 10. ・平安博物館編『平安京古瓦図録』 1977年
・戸田秀典・松井忠春「平安宮推定民部省跡の発掘調査」『平安博物館研究紀要』 第6輯 1976年

註 11. 『平安京古瓦図録』によれば後期Ⅱ期（1075年～1157年）に属するとされる。なお後期Ⅱ期は大治年間を境に2分される可能性があるという。

註 12. 玉井伊三郎『吉備古瓦図譜』第2輯 1941年

註 13. 上原真人「十一・十二世紀の瓦当文様の原流（上）」『古代文化』第32巻第5号 1980年
B Ⅰ類に分類されている。

註 14. 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14号 1978年

註 15. 註12に同じ

註 16. 藤井駿「俊乗房重源遺跡の研究」『岡山史学』第13号 1963年

註 17. 佐原真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』 58巻2号 1972年

註 18. 小田富士雄・柳田康雄「野添・大浦窯跡群」『福岡県文化財調査報告書』第43集 1970年

註 19. 小田富士雄ほか「法鏡寺跡・虚空蔵寺跡」『大分県文化財調査報告』第26輯 1973年

註 20. 防府市教育委員会「周防国府跡昭和53年度発掘調査概報」『防府市文化財調査年報』Ⅱ 1979年
亀田修一氏の御教示による。

註 21. 大川清「瓦尾根瓦窯跡」『国士館大学文学部考古学研究室報告』乙種第2冊 1969年

註 22. ・賀川光夫「伊藤田瓦窯跡」『中津市史』 1965年
・小田富士雄「伊藤田瓦窯跡群」『天観寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財調査会 1977年

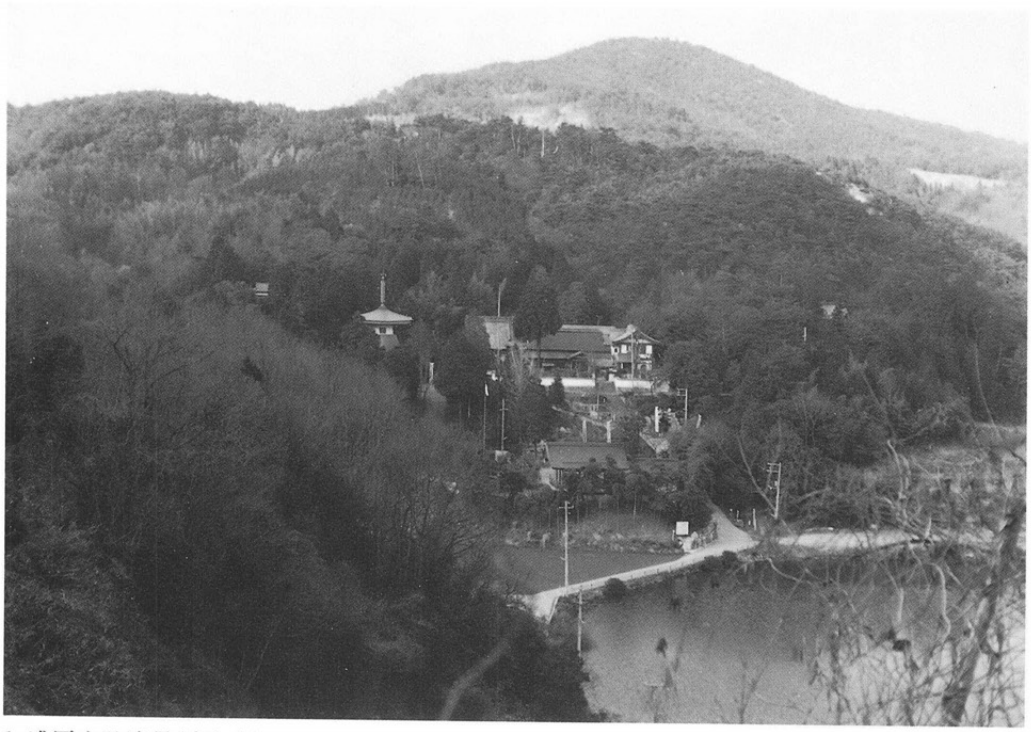
註 23. 註21に同じ

註 24. 註22に同じ

註 25. 稲垣晋也「瓦器椀の成立と展開」『日本歴史考古学論叢』第2 1968年

註 26. ・潮見浩・河瀬正利「ザブ遺跡出土の土器」『土師式土器集成』本編4 1974年
河瀬正利ほか「ザブ遺跡」『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』広島県教育委員会 1973年

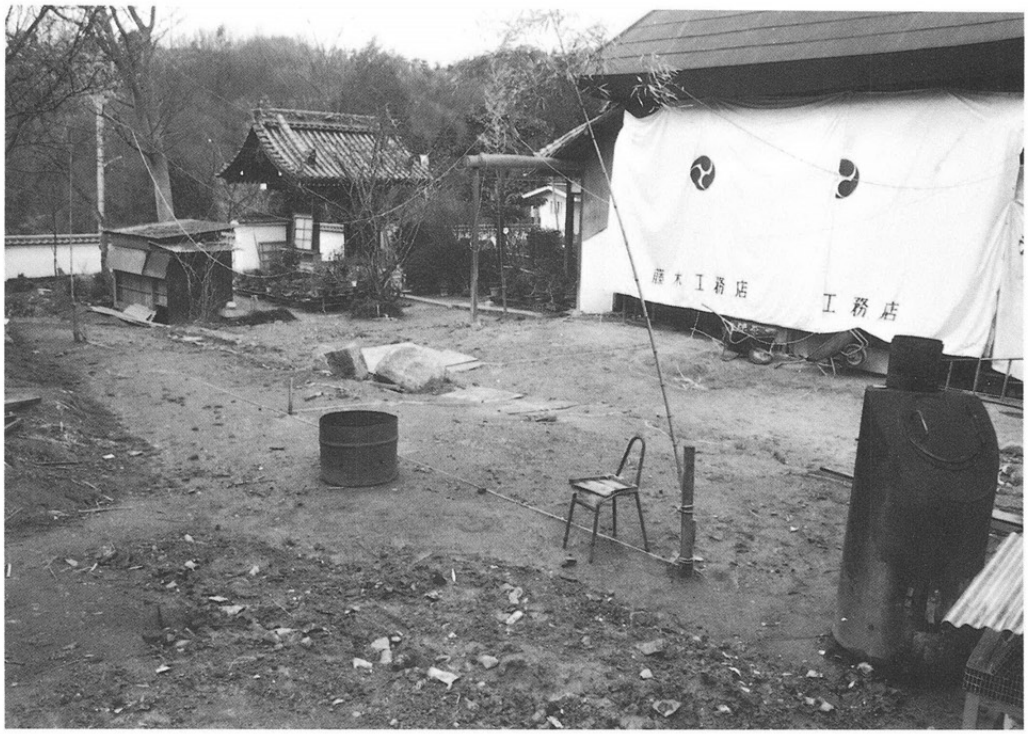
註 27. 註14に同じ



1. 浅原寺跡遠景(南から)

2. 浅原寺跡遠景(南から)

図版2



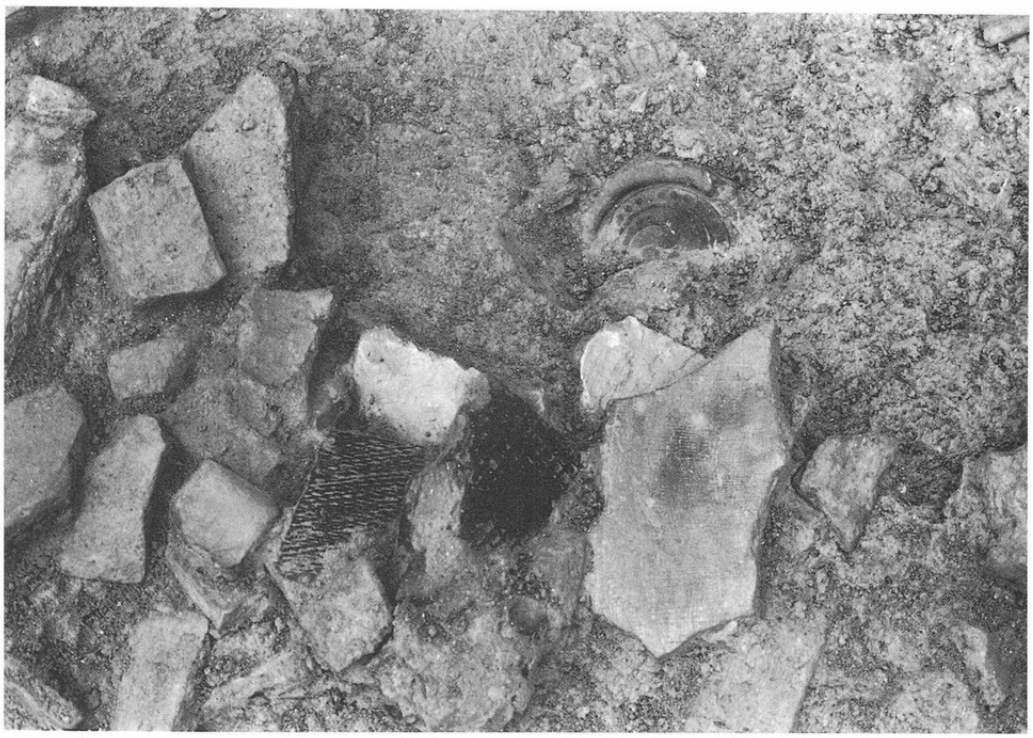
1. 調査区調査前全景(北東から)

2. 西区瓦溜り全景(南から)

1. 西区瓦溜り(南から)

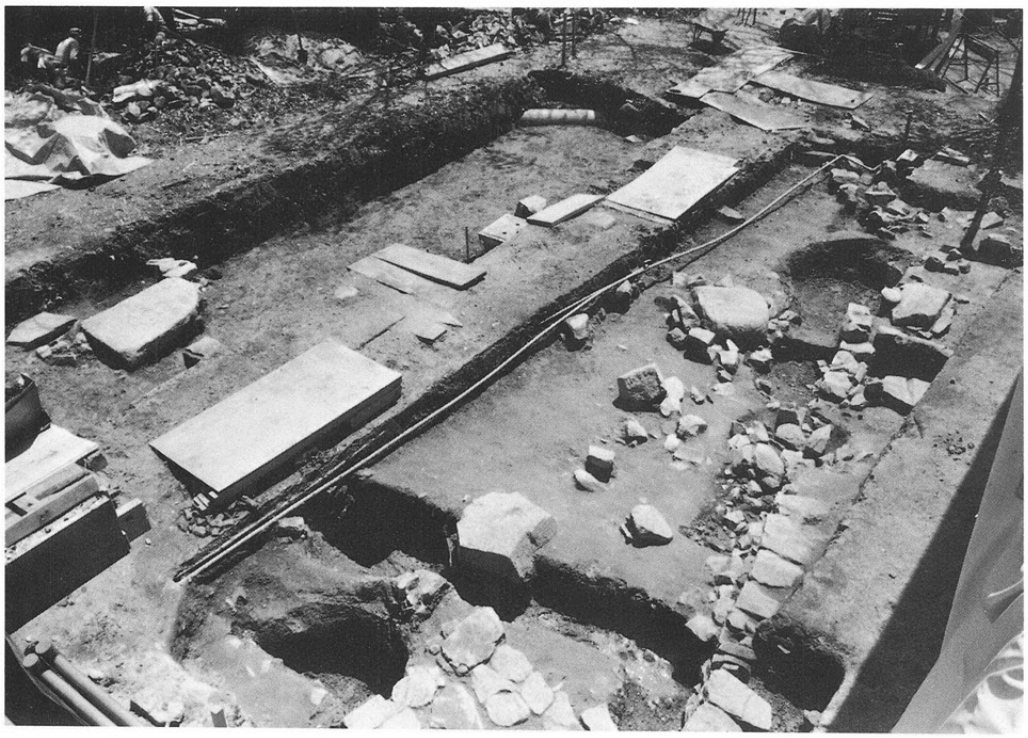
2. 西区瓦溜り(北から)

図版4



1. 西区瓦溜り遺物出土状況

2. 西区瓦溜り遺物出土状況



1. 調査区遺構面全景(北西から)

2. 調査区遺構面全景(北西から)

図版6

1. 西区遺構面全景(南から)

2. 西区石積壇検出状況(東から)

1. 西区石積壇・礎石検出状況(南から)

2. 西区石積壇・溝遺物出土状況(東から)

図版8

1. 西区南側礎石検出状況(東から)

2. 西区敷石遺構検出状況(北から)

1. 西区瓦堆積層軒丸瓦1出土状況

2. 東トレンチ北壁断面(南から)

図版10

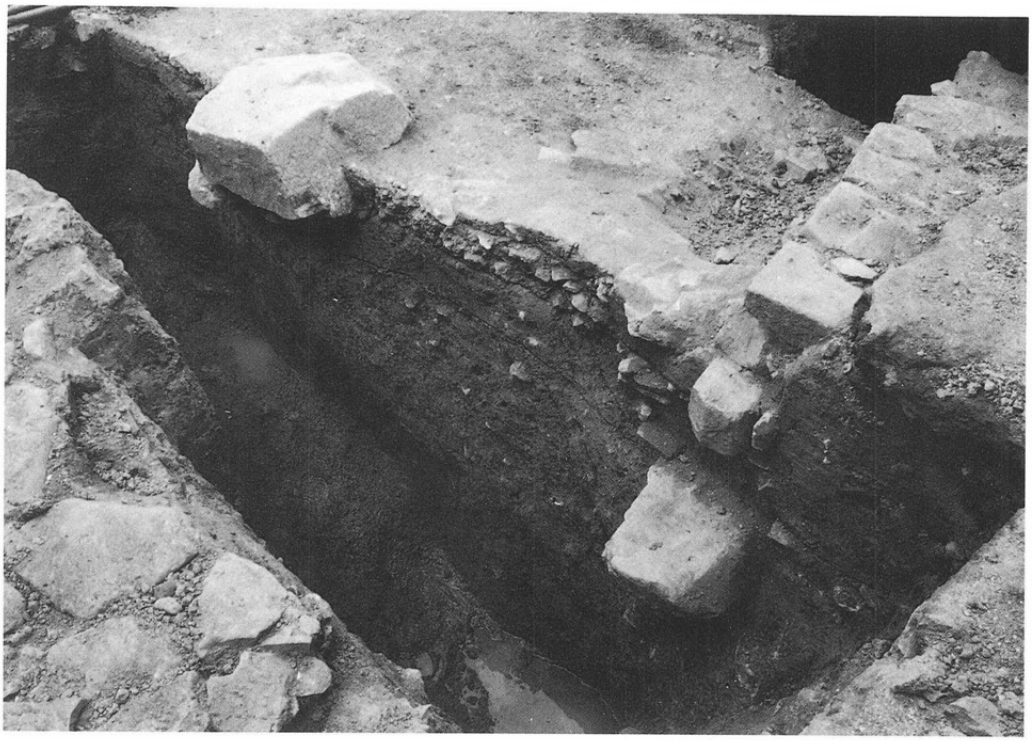
1. 西区南トレンチ全景(北から)

2. 西区南トレンチ全景(北西から)

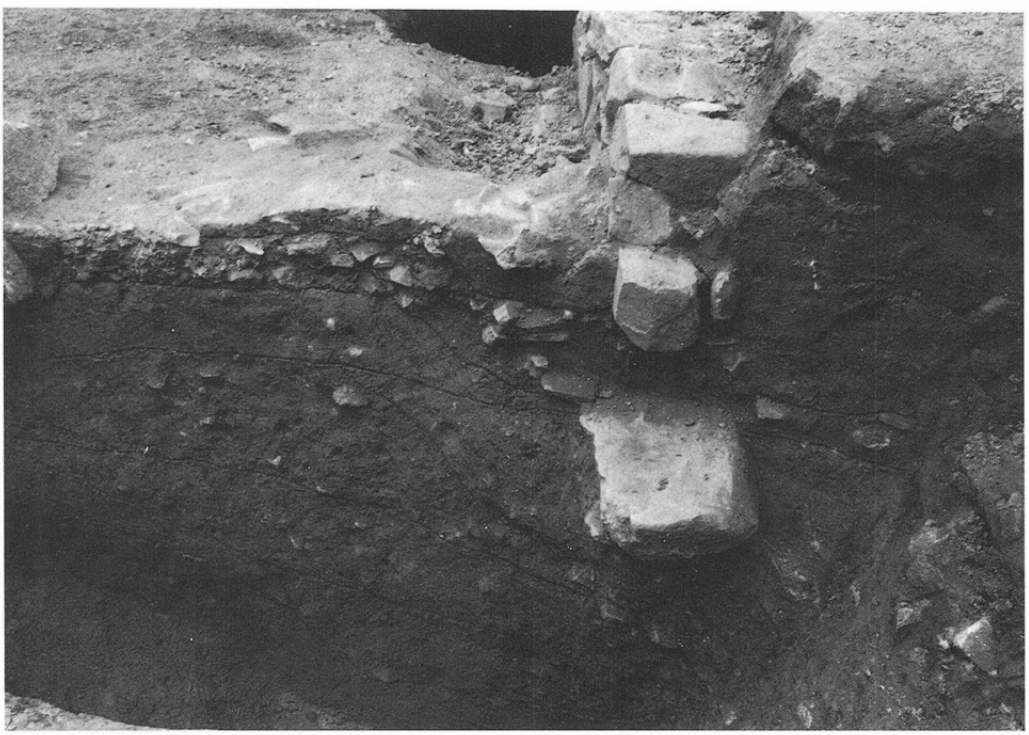
1. 西区南トレンチ南壁断面(北から)

2. 西区南トレンチ調査風景(西から)

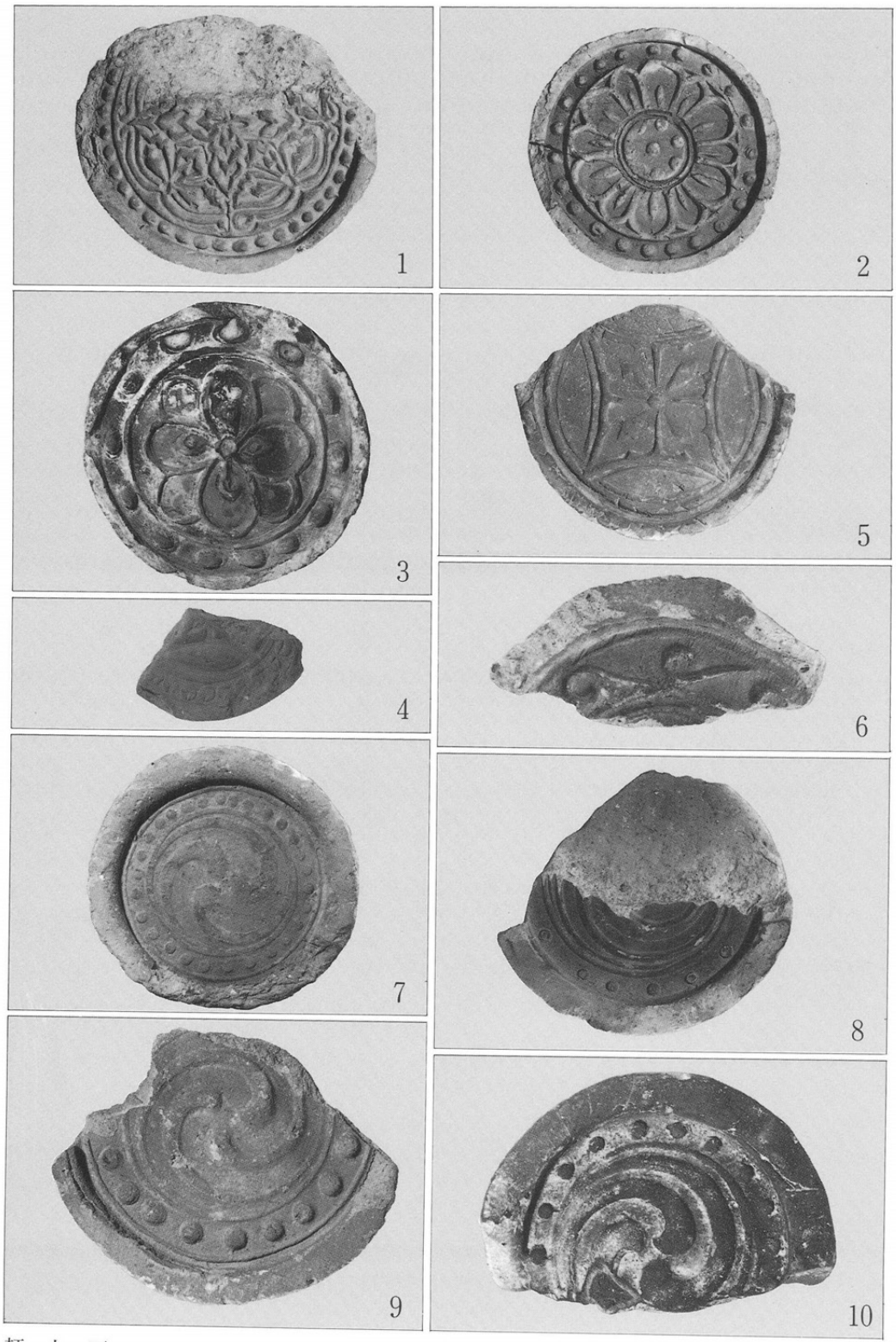
図版12



1. 西区北トレンチ全景(北西から)

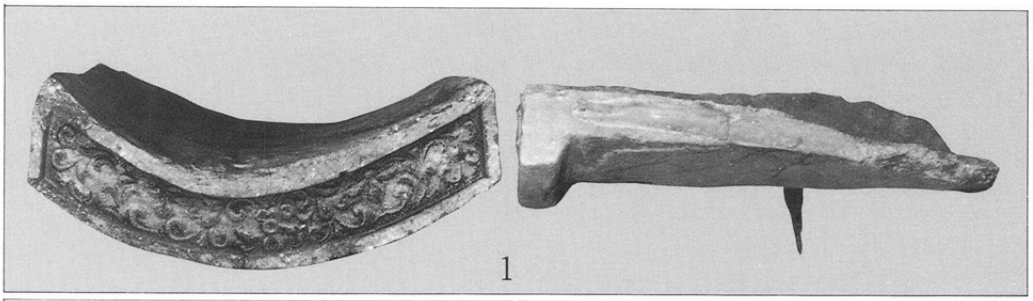


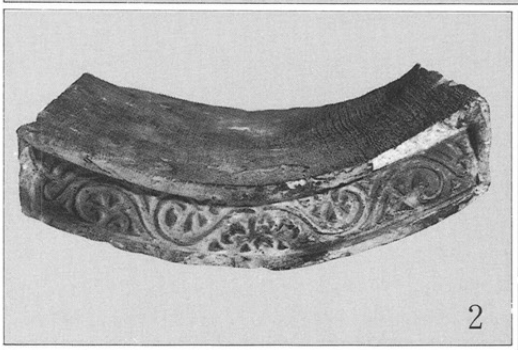
2. 西区北トレンチ南壁断面(北から)

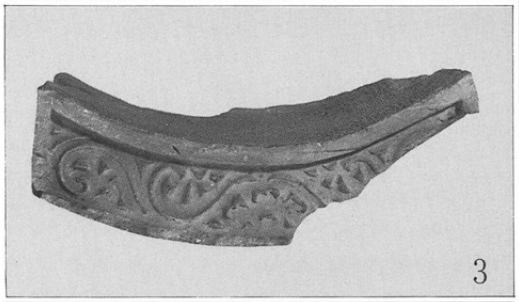


軒　丸　瓦

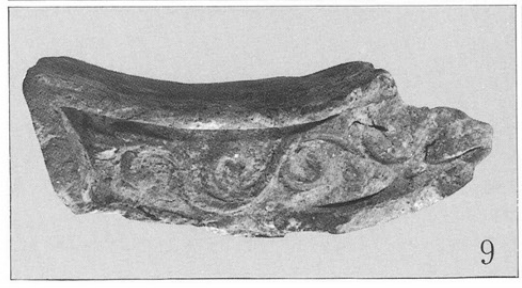
図版14

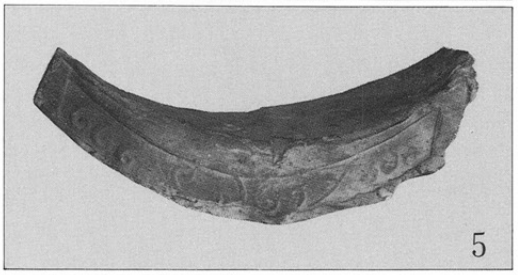

1

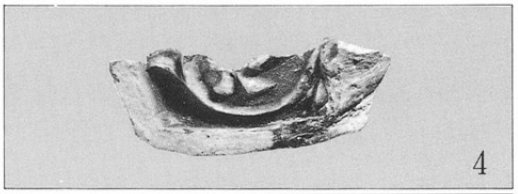

2


3

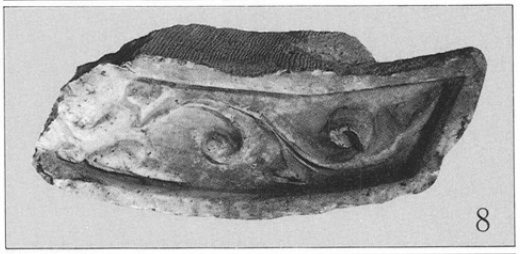
6


9


5

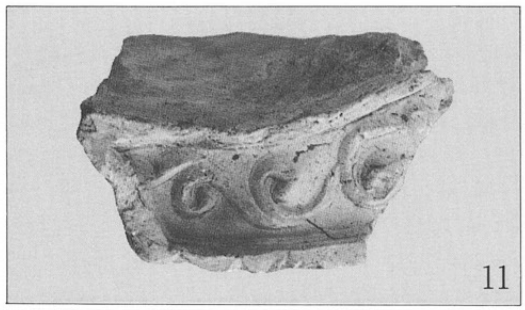

4

7

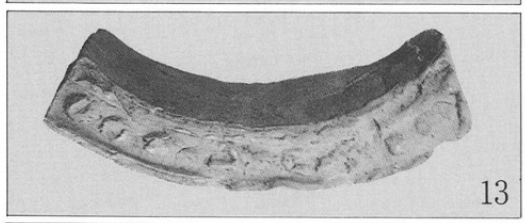

8

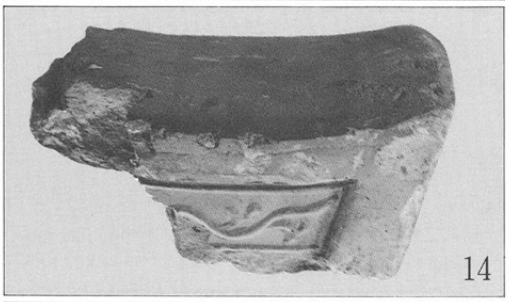
10

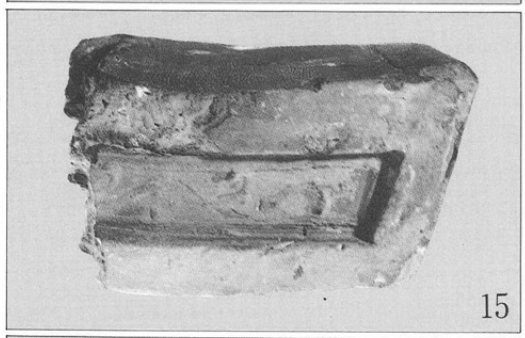
軒　平　瓦

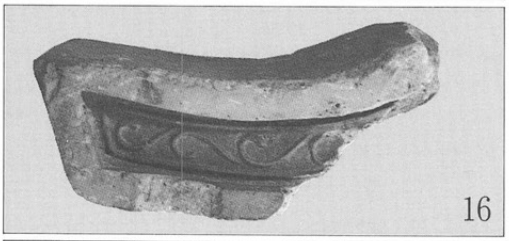

11

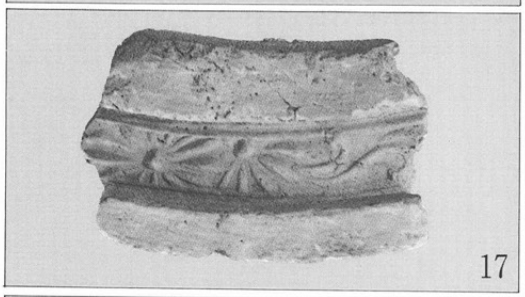
12

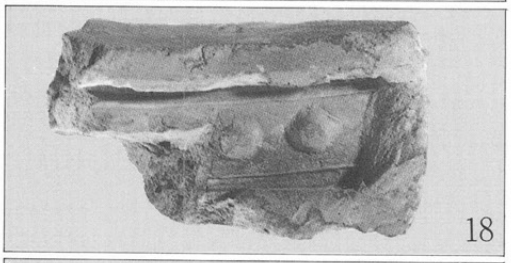

13

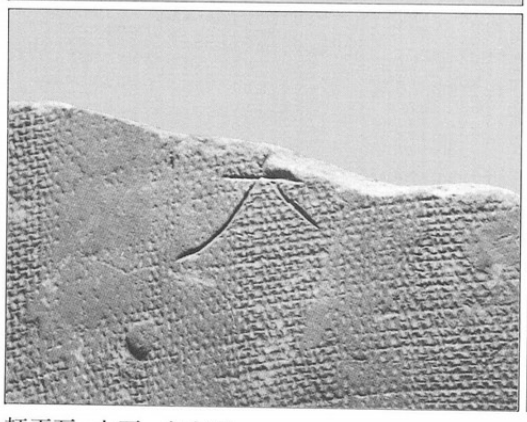

14

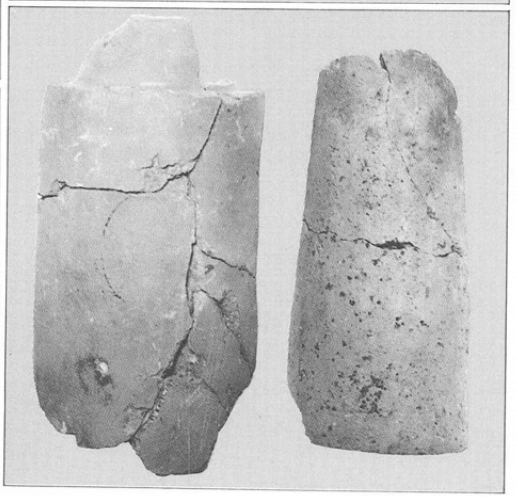

15


16


17

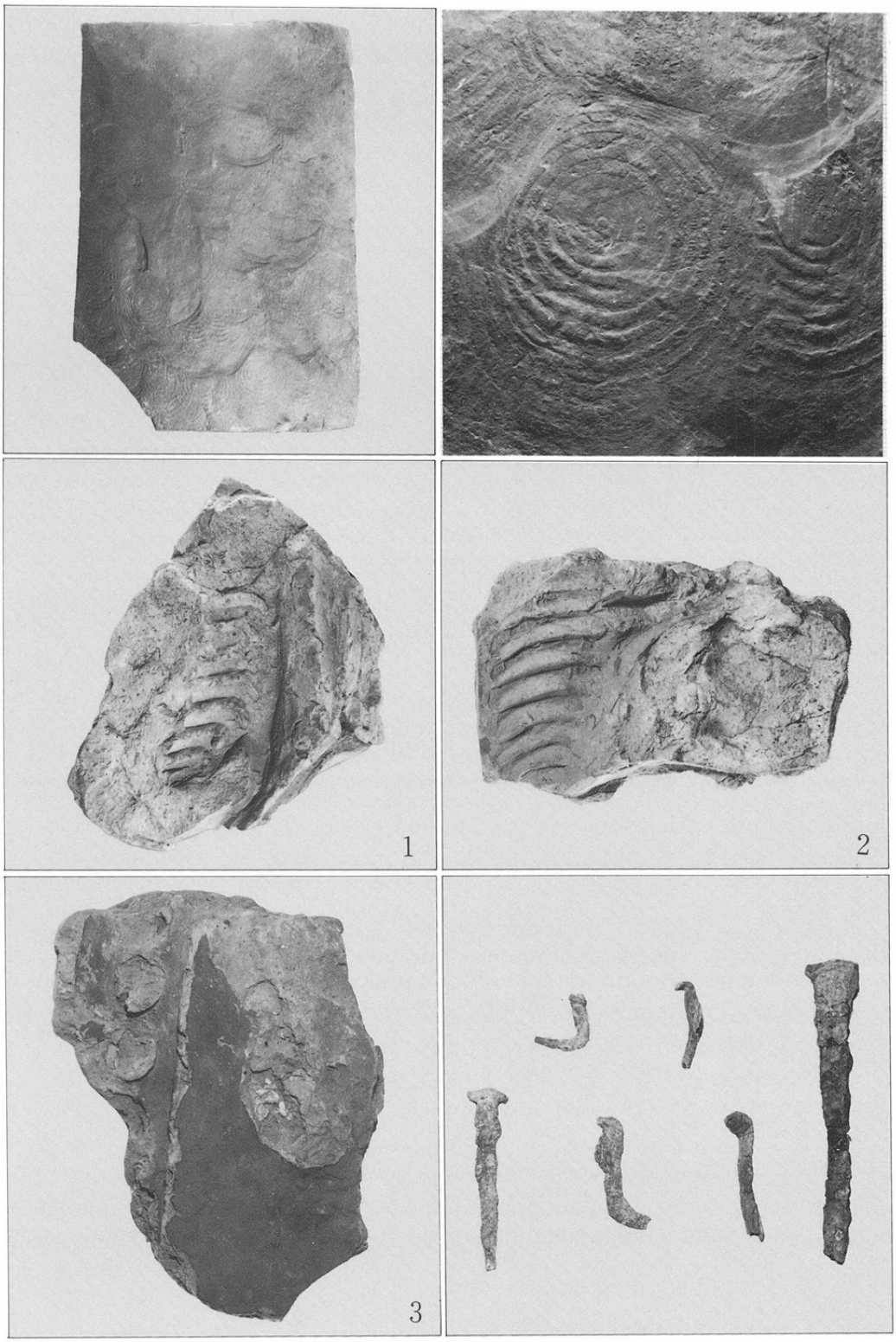

18



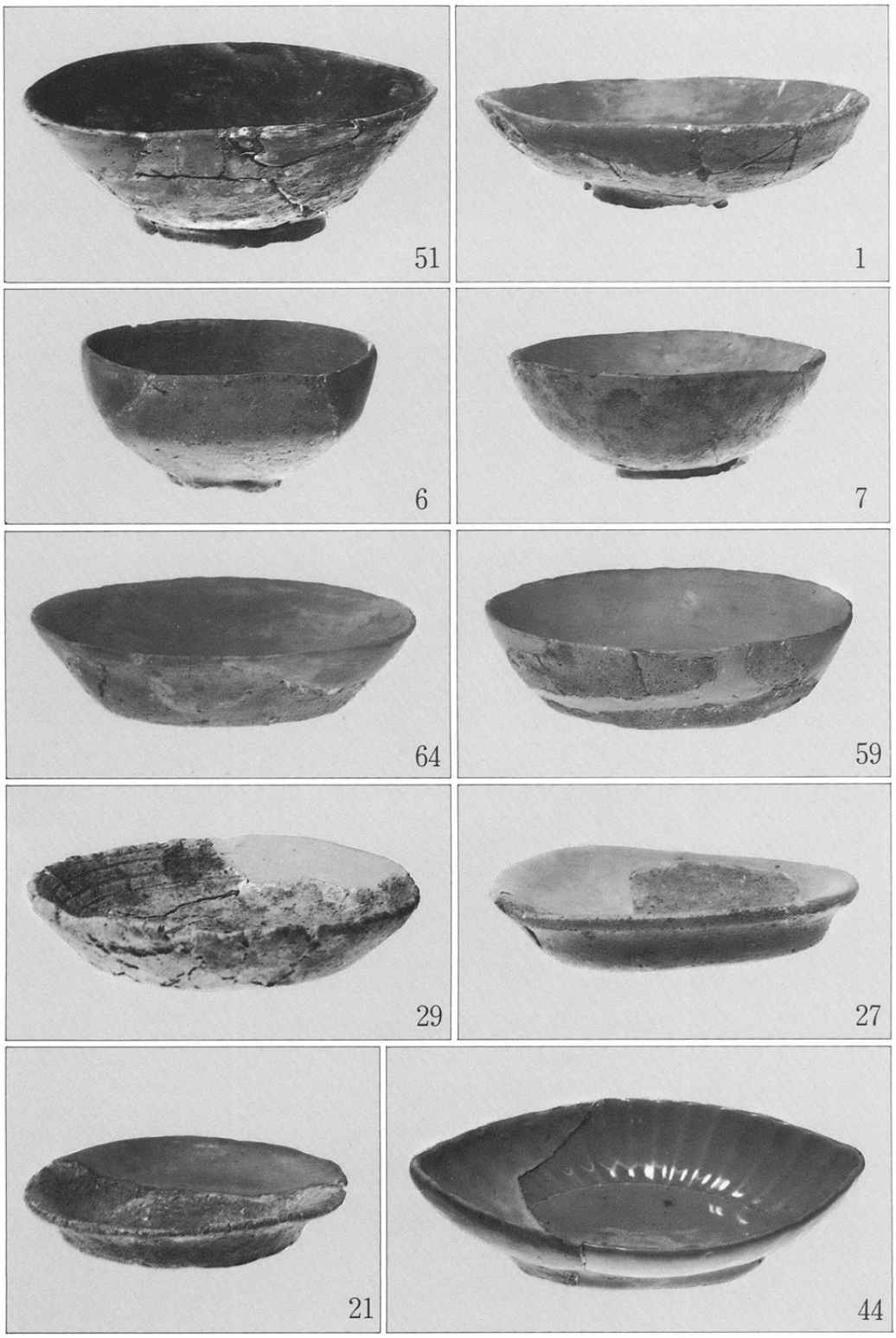


軒平瓦・丸瓦・文字瓦

図版16



平瓦・鬼瓦・鉄釘



土　器　類

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告　第１集
──浅原寺跡──
1984年3月31日　印刷発行
編集発行　倉敷市教育委員会
印　　刷　シンコー印刷株式会社